

「……………来て、くれたんだ……………」

ある天空の島に、一人の天使が降り立った時。

赤い天使を、その瑠璃色の髪の少女が一人で出迎えたのは、  
「……………わかってたよ」

まるで運命の時を、自ら望んで現れたかのようにだった。

「あなたなら……………私を止めてくれるって」

少女が一人の時を狙い、島に降り立ったその天使は。

たった一人で消える事を望んだ少女に——赤い天使は無情に、

自らの永い役目、処刑人の鎌を、咎人である少女に突付ける。

C r y    p e r s .

—sin-eating—

「……………私のこと……………連れて行って、くれるの？」

C 3 ・ 外 伝

そのために赤い天使が現れた事——そして咎人の少女をも、  
助けたいと願って続けている天使に、少女は心から微笑んだ。

赤い天使は決して動かない表情——それでも青の目に確かな  
哀しみをのせて、無力な人間の少女を見つめ返し。

「何か……………言い残す事はある？」

たった一言。それだけは命に刻まれた言葉を口にした。

その山里は、古くから存在する結界に守られた隠れ里だった。

「……あなた……名前は？」

鬼や妖、千種の種族など——数は少ないが、様々な『力』を持つ化け物が住むこの世界では、最も商業が発達し、力の無い人間の多い地である『西の大陸』の奥地で。

人間の里でありながら、大陸内の都市のように発達せず、結界という人間ならぬ力に守られた山里で。その近くで山菜を採っていた幼い子供に話しかける、異邦の人影があった。

「シルファだよ。おねえちゃんは、だれ？」

にこにこ明るい顔の、瑠璃色の髪を二つ括りにした子供に話しかけた人影は、同じくにこにこ微笑みを返す。

「こう見えてもおばあちゃんなの。おばあちゃんの悪魔よ」

どう見ても十代半ばで、尖った耳と長くまつぐな銀色の髪、孔雀緑の目をした少女は、類稀な美形の顔立ちをしており。

立ち居振る舞いが落ち着いているせいか、少女と呼ぶよりは女性という方が似合う人影は、自身の事をどのように名乗った。

「……アクマのおばあちゃん？」

まだ六歳に過ぎない幼い子供は、女性の言葉を理解出来ず、ただ深い青の目を丸くして女性を見上げる。

「おばあちゃんは、どうしてここにきたの？」

理解は出来ないながら、相手の言を尊重して対応しようとする幼い子供に女性は軽く苦笑い、しゃがんで目線を合わせる。

「私も昔、ここに住んでいたの。もう百年以上は前だけど……だからここでの大切なお仕事を、私が頼まれたのよ」

「そっか。それならおばあちゃんも、シーたちのなかまだね」  
隠れ里たる地に住む人間は、基本的に外部との関わりを嫌い、そもそも里の者でなければ結界の内に立ち入る事も出来ず。

そのため、その里の内に在った、長き封印から解かれつつあった古い禍を再び封印してほしいのだと。里へと立ち入れる悪魔だった女性に、よく様々な仕事をさせる死天使という類の上司から、女性は依頼を受けて来ていた。

「おしごとってなあに？ たいせつなことなの？」

「ええ。放っておくと、この里には良くないことだと思うわ」  
そっかと子供は、それが女性の厚意と疑わない顔で微笑むと、

「じゃあシーも、おてつだいする！」

心から嬉しそうに女性の手をとり、引っ張るようにするので、女性もあららと立ち上がり。女性を里の内へと誘う子供に手をひかれつつ、どうせならその子供を自宅へ送ろうと思ひ立ち、そのままの状態で山里へと立ち入る事になった。

そうして幼い子供が、女性と関わったために両親を失い……子供も命を落とす事になると、その時は思いもよらないまま。

「……いた——……」

泣き叫びそうな痛みで——瑠璃色の髪の子供は目が覚めた。

「いたいよ……おかあ、さん」

もう何度も繰り返して観た、誰かの終わりの、昏く赤い夢……その夢ではいつも主演者となる瑠璃色の髪の幼い子供と、ほぼ同じ姿の子供は、胸を押さえながら起き上がる。

あなたのせいよと——夢の最後に必ず、幼い子供の胸を鋭い刃物で貫く誰かは。山里に封じられた禍に巻き込まれ、実父を失った幼い子供の……夫を失い狂気に支配された実の母であり。

「それは……シルファのせいじゃ、ないよ……」

枕元にある、黒く大きな目で灰色の猫のぬいぐるみを子供は手に取り、止まない胸の痛みを押さえるように強く抱きしめた。

「……エル？ 大丈夫か？」

同じ部屋に眠る紅い髪の少女を起こさないよう、静かな声で、戸口から子供の様子を窺う人影があった。

「……ユオン兄さん」

子供が悪夢で目覚めた事をリアルタイムで気付いたかのような人影に、子供は顔を上げて扉の方を見る。

ぬいぐるみを抱えてベッドから降り、暗い部屋から出てきた瑠璃色の長い髪の子供の頭を、扉の外にいた人影は撫でながら……困ったような顔付きで笑った。

「何か……温かいものでも飲むか？」

子供が兄と呼んだ人影は、金色の短い髪で紫の目の少年で、人間である子供の実の兄では有り得ない、精霊族という化け物……尖った耳と金色の髪という姿からは、妖精の類であると、周囲からみなされていた少年だった。

「うん——兄さん」

五感が及ぶ範囲の現状把握に優れる、直観という特殊な感覚を持つ少年は、自身以外の事を我が事と感じてしまう性質であり。

近くにいる子供の夢を、おそらく同じように観ていた少年と……我が事でないその夢を、繰り返し観る子供も、少年と似た直観の持ち主であり。子供が夢を観ていた事を感じて、少年が声をかけてきただろう事を、当たり前前に把握しており。

そうした暗黙の了解が当然である少年と子供は、他に言葉を必要とせず、共に夜の台所へと向かったのだった。

体の血は全く繋がっていないものの。現状把握に優れる同じ才能を持った少年と子供は、本来は血も繋がった兄妹だった。

「……エルはどれくらい、ラピスの事は思い出せるんだ？」

自身の呑物を温めるため、ちようどお湯を沸かしていたらしい少年は、慣れない手つきでお茶を炒れながら子供に手渡す。

「わたしとラピスは、あんまり似てないから……あの赤い夢と、体が覚えてる痛みくらいだよ」

台所の机に向かって座り、ぬいぐるみを抱えながら空いた手でお茶を受け取った子供は、子供とは思えない落ち着いた声調で淡々と続ける。

「ラピスの体の記憶も、シルファが死んじゃった六歳までだし。もし読めたとしても、それくらいだと思う」

「そっか……だからエルは、子供になったのか」

あまりに言葉足らずの会話でも、少年と子供の間ではそれで通じているらしく、

「兄さんとレンも似てないから、レンの事はわからないでしょ」  
こくりと少年は、腕時計のように左手に巻く、蝶の羽の飾りが付いた何かの鍵を見つめて頷いた。

「確かに、レンの躰を使つても、レンの記憶はわからないな」  
「うん。わたしも、ラピスの躰をもらったけど、ラピスの事はちよつとしかわからないよ」

互いに謎めいた事を口にして頷き合う少年と子供は……実際にその言葉通り、自ら以外の他者の躰を貰い受けて生を得た者で。遠い昔に自らの身体を失った、実の兄妹だった。

ラピスという瑠璃色の髪の少女の躰を貰い受けた子供は、元々黒い髪で青い目の、十三歳の少女だったが。ある古い国同士の戦いに巻き込まれ、敵対してしまった兄が重傷を負った時に、それを助けるために敵国を訪れ、命を落とす事になり。

「竜の眼つて、命は助けても、記憶は残せないのかな」

しかし兄は、その妹を助けられるはずの小さな宝を、それが人間である自らも使えるものと知らなかった妹から、兄の方を助けるために託されており。

その宝を妹に返し、妹を助けるために、ヒトの命を宿す事が出来る宝剣に兄は魂を宿してまで長い時を待ち……つい先日、妹の魂が宿る秘宝と巡り合い、妹を助ける事が出来ていた。

「そうだと思う……多分わたしは生きてる頃から竜の珠の中にいたから、そつちに記憶が残ってたんだと思うよ」

兄も妹も、己以外の死者の躰を貰い受け新生した形だったが。兄は古い記憶をあまり思い出せず、しかし妹は数千年もの遠い昔を、わりとしっかり覚えている状態だった。

「レンの躰もラピスの躰も、竜の眼の力で助かつてるなら……二人共もし戻つても、他の所に記憶がないと真つ白だと思う」  
「レンは羽に記憶がありそうだけど。ラピスは……そもそも、まず戻らないだろうな」

子供にお茶を炒れた後、自身は酒瓶を温め、ごく小さな杯で少年は少しずつ、彼らが今いる国の穀物から出来たお酒を含み。その顔はいくらか痛ましげで——戻りさえすれば本来は自らの生を繋げる少女の事を、思っているようだった。

「エルがその躰を使う方がいい——竜の眼もエルの命だって、ラピスは帰ってくる気はないんだ」

俯く少年が口にする名は、養父母が元々連れていた養女であり。少年には実の妹と同じくらい、大切な妹分だったのだが。

「その方がオレのためになるって……だからラピスは自分から、消える道を選んだんだ」

淡々と無機質に言い、杯を含む少年は、元々非常に食が拙く。その妹分が消えてしまった時から、全く食事を摂れなくなった事を、この家にいる者は全員が知っていた。

「……ラピスを本当に追い詰めたのは、兄さんじゃないよ」

辛うじて酒類だけをエネルギー源に、それも明朝から、養父と共にしばらく遠出する力を蓄えるため、嫌々の摂取である兄に。

子供は淡々と、無駄とわかった言葉を口にする。

「ラピスはシルファに戻りたかったんだよ。シルファの事を、ちゃんと……ほんとは死んでるって思い出したかったみたい」

「……………」

十四歳だった妹分は、本来は六歳の時に、幼い命を母の手で奪われており。ある悪魔の女性の命を秘密裏に分け与えられ、死した体を見かけだけ成長させ、生を繋いでいた状態だった。

「シルファは命を食べるのが嫌で、でも独りで消えたくなくて、水華や兄さんに一緒にいてほしがって……だから、兄さんから記憶を奪ったり、水華を道連れにしようとした——」

その女性の命が尽きる局面が迫った中、女性に命を返す事を選んだ妹分の姿は、死した六歳に戻る事となったが。

他者の命を奪って生きる自身を、自身を含む周囲に隠し続け、誰より嫌悪しながら。同時に生への執着——そして死の孤独に苦しんでいた少女を、彼らは嫌という程感じ取っていた。

「でもラピスは……シルファを止めてって、願ってた」  
「……………エル」

最終的に妹分が消える後押しをしたのは、他ならぬ自身……妹分の躰を貫き受ける前には、自身の魂が宿った赤い鎧を身に着ける天使の人形だった子供であり。

その天使に何故と尋ねた少年が、明朝にいらなくなってしまいう局面において、やっと答えを返す気に子供はなっていた。

「ヒトの記憶を奪う神様になったシルファは、もうラピスには止められなかった。でもそれで兄さんが、消えてしまいそうになったから……だからわたしが、ラピスを殺したよ」

「……………」

痛ましながら厳しい顔付きの兄は、とつくにそうした現実——妹分が、自らそれを望んだことは承知しており。

故郷の山里に封印されていた、ヒトの記憶を奪う力を持った『神』を妹分はその身に宿しており。そして『神』に囚われた妹分を解放するため、天使がそうした事をわかっている少年は……妹分も天使も結局は少年を助けようとしたのだと、現実を呪っていた事も子供は知りながら。

「それは兄さんのせいじゃなくて——わたしのせいだよ」  
子供の視野より範囲が狭い分、鋭い直観を持つ兄が受け止める現実が、最も真実に近いと知っていながら。無表情のまま……願うように子供は、子供にとっての現実を口にした。

「わたしは処刑人だから。優しくないことをするヒトを殺す」  
今ここにいる幼い子供の前身——赤い鎧をつけた天使は元々、  
無垢なる処刑人だった。

「兄さんも変わってないけど、わたしも変わってないよ」

処刑人たる天使の基準はたった一つ——気ままな私情であり。  
現状把握に優れた天使は、常に『今』を観てそれを決めた。  
「わたしも兄さんも……誰かを殺すことがお仕事だったから」  
天使は天使にとって優しくないものを咎人と定め。その上で  
それが殺すべき相手と誰かが定めれば、躊躇いなく命を奪った。

どれだけ本性——過去は優しい者でも、現在、誰かのために  
ならない行動をとる者は、どんな理由があっても咎人であり。  
たとえ自己満足でも、現在、誰かのための行動をとる者は、  
天使にとつては「優しいヒト」で生かすべき相手だった。

「ラピスを……シルファをそうさせたのは、兄さんじゃない」  
「……………」

暗い夜半に、子供が少年とこうして話す事になった理由……  
子供の目を覚まさせた赤い夢を、そこで子供は口にする。

「シルファのお母さんが、シルファを殺さなければ。兄さんも  
……わたしも、殺さないで済んだよ」

その幸薄い少女を、自身の手にかける結果となった現実を——  
躊躇いはなくとも、良しとしたわけではない事を示すように。

そんな子供を未だに、厳しい目付きで見つめ続ける少年は、  
「……エルはもう、誰も殺すなよ」

妹が決して自らヒトを傷付けたい者ではなく、そう生きるしか  
無かった事を無意識に知っていた。

「兄さんは……どうなの？」

ヒト殺しの才能を持ち、多くの者の命を奪った過去を持つ兄も  
同じだと知る妹は、淡々とその呪いを問い返すが。

しかしあくまで、赤い現実に身を置き続ける兄は、

「オレは化け物だけど、エルは人間だろ。それに……」

彼らが誰かの命を奪った理由は、根本は違うと気が付いていた。

「ラピスはこれ以上奪いたくなくて、何か返したくて、エルに  
軀をくれたから……エルは、ヒトの役に立ちたいだけだろ？」  
それならそのまま軀の主の願い……子供が本来の性質、優しく  
在る事を叶えれば良いと——無機質な紫の目で少年は口にした。  
「オレは自分のために——多分、これからもヒトを殺す」  
「……………」

この少年は、大切なものの脅威は全て滅ぼす事を、無自覚に  
根本とし。その脅威が観える目、ヒト殺しの才能を持った事と、  
それが自己満足とわかる冷厳さが何よりの不幸だった。

「兄さんは本当に……優しいから、優しくないね」

兄と似た感覚を持ちながら、兄よりずっと自由に過ぐす子供は。

本当は平和で穏やかな笑顔が似合う兄を思いながら、現状で  
それは変えられそうにないと……現状ごと変えるための行動を、  
気ままに練っている事を、兄は知る由もなく。

明朝からしばらくいない兄と、そうして話せて良かったと。悪夢で目覚めた事も至って前向きに受け取る子供は、六歳の体に合わない落ち着いた表情で、暗い部屋のベッドへと戻った。

何か水分を摂る事すら不快らしい兄が、それでもちみちみと杯を含み続けながら、最後に言った事を思い出す。

「ラクトと水火の言う事をきいて、エルは留守番、よろしくな」現在彼らがいるこの家には、非常に強固な結界が施してあり。

弱小な人間に過ぎない躰の妹が、少年と養父の留守の合間に危険に合う事のないよう、安全領域である家から出るなど兄が言っている事は、子供は重々承知していたが。

それでも子供には、明朝から企む一つの謀り事があった。

「……せつかく、出来そうな事が見つかったんだから」  
いなくなる少年と養父の他に、この家にいる二人の者の存在を感じ、子供はぎゅつとぬいぐるみを抱き締める。

「ラクトにも水火にも……手伝ってもらおう」

一人は今も同部屋で眠る、鎖骨までの紅い髪で、兄より二つ年下の少女であり。もう一人は少年、養父と同じ部屋にいる、先日からこの家に来た客、紫苑の短い髪と目の若い男だった。

「兄さん達には内緒だけ……」

硬くその決意を秘めていた子供は、一人でうんと一度だけ頷き……無機質に目を閉じ、あっさり眠りに落ちていった。

現状把握に優れる才能を持った、その子供と少年の感覚は。化け物の少年は五感の及ぶ範囲で、人間である子供の方は、化け物が持つ感覚——気配が感じられる範囲という、不思議な逆転現象があるものの、基本的に共に『今』を観る事に長け、記憶という過去や、無意識の領域を覗く事は苦手としていた。今夜のように誰かの夢を、我が事のように観る場合を除いて。

そして今。温かな心持で眠りに落ちた子供に訪れたのは——

——……ラピちゃんにいいことがありますように……—

先日までは確かに、瑠璃色の髪のこの躰の傍らにあった……  
幸薄くも、常に微笑んでいられた少女を確かに支え、長く共にあってくれた誰かの声——それを届けるための通信の道具と。そのすぐ近くの何かに込められた、まっすぐな思いだった。

——つまらない物も入ってるけど、お守りになるといいな——

それをいつの間、この躰は失くしてしまっていたのか……。そこに確かにあるはずの意味を、子供は決して観逃さなかった。

そうして眠る子供の枕元には、抱えていたぬいぐるみに……壊れたPHSという妙な付属品が架けられていたのだった。

\*

『神』を決して、殺してはいけない。

ある惧れの元に定められた、この世界の不文律など、子供の前身の赤い天使は知らなかったが……それは天使が少女だった、遠い過去にも出会った事のある局面だった。

――全く……命拾いしたわね、貴方――

天使が身に着ける赤い鎧はその本体に少女の命を、胸骨上に填めた黒い珠玉に、少女の魂と記憶を分けて宿しており。

そんな奇跡が可能な秘宝の価値を知っており、不滅の聖地に長く保存したのは、少女が死ぬ前に出会っていた『神』だった。

――私は、今日から貴方の上司になる者よ――

突然現れ、秘宝である鎧を少女ごと奪おうとした『神』は、ただ秘宝収集家であるだけだったが。少女の兄に重傷を負わせ、少女が命を落とすキツカケを作った者であり……少女も兄も、殺した方が良い相手と、その脅威は初対面から感じ取っていた。

それでもそうしなかったのは、彼らが私心で殺さない死神と、処刑人であった事と……無意識に把握していた惧れからだだった。

少女の兄には先日、瑠璃色の髪の子が消えてしまう前に、その惧れの真相がよりはっきりと伝えられていた。

――いいか？ 神様って奴とは、間違っても殺し合うなよ？――  
何故その妹分が『神』に囚われ、咎人となったか。

――神の命を奪った奴は、その命に侵されて神に書換えられるか、死んだ神体に命を追いやられる。神に命を奪われた奴も、体も命も神のものになる――

ヒトの記憶を奪う『神』と共存していた妹分は、妹分自身が、命の遣り取りに乗じる『神』を殺したわけではなく……妹分に命を分けた悪魔の女性が、長い間封印されていた『神』を宿す炎の獣を殺し、『神』に遷られたからだった。

分けられる悪魔の女性の命を介し、妹分に移り来た『神』は、妹分を『神』に書き換える事までは出来なかったが。その体を殺した赤い天使に『神』を遷し、赤い天使をやがて乗っ取り、そこにいた少女にも『神』たる素因を一部書き写していた。

「……水華が殺してくれなければ、わたしも神になったのかな」

しかし最終的に、『神』が遷った赤い天使を滅ぼし、それで更に居場所を遷した『神』まで滅ぼしたのが……現在、子供と同居で暮らす紅い髪の少女であり。

その時『神』と共に失われてしまった少女を水華、その後に残った少女を水火と、瑠璃色の髪の子供は区別して呼んでいた。



元々朝は強い方でなく、幼い体も相まってか、陽は昇っても寝床にいる瑠璃色の髪の子供に。

朝からしゃつきり、淑やかな微笑みをたたえる、鎖骨までの紅い髪と目の少女は、情け容赦なく子供を起こしにかかった。

「おはよう、エルファイ。今日もいい天気みたいよ」

「……ううん——……」

寝付いたのが遅い時間だった事もあり、ぐずる子供から布団を引剥がし、紅い少女は窓を開けて日差しを部屋に入れる。

「今日は起こしてねって頼んだのは、エルファイよね？」

くすくすと子供の眠るベッドに腰掛け、振り返るように子供を見つめる紅い少女は、既に外出用の出で立ち……頭巾のような被り物がつく上着に、短く末広がりな下衣を身にし、近代的な都市ではよく見られる少女らしい格好をしており。

「烙人と買い物に行きたいでしょ？ と言っても烙人もまだ寝てるけど……エルファイの意向を確認しないと、起こせないわ」

「……ん……」

些細なことでもこうして、子供の意思を確かめる紅い少女は、基本的に主体性が無く。それもそのはず——紅い少女が水華と呼ばれていた頃は、少女が背に生やす羽に宿っていた別の魂の言いなりであった、元々人形の性の生き物であり。

「……やっぱり……水火と二人で、行って来て……」

今はこうして、子供の人形になることを楽しんでいる相手に、子供はあっさり、頼んだ前言を撤回して眠たげに口にした。

あらあらと紅い少女は、寝床から動かない子供から少しだけ視線をずらし、

「それじゃ、『ピアス』を連れていく？ 何かあればわたしを直接、『ピアス』で動かしてくれていいしね」

「うん……そうする……」

子供の枕元の『ピアス』というらしい灰色の猫のぬいぐるみを手にとると、心なしか少しだけ——小悪魔のような顔付きで、微笑んだ紅い少女であり。

「それじゃ、ゆっくり休んでね。お休み——エルファイ」

紅い少女がそのぬいぐるみを手にも、部屋を出て行くと同時に、子供の意識もすぐに遠くなり……

「——ほら、烙人。もうレイアスもユーオンも、とっくに出て行っちゃったわよ」

「……あ……？」

そして横たわる子供の視界は、紅い少女が大切そうに抱える、灰色の猫のぬいぐるみからの情報に占拠される。

「これからしばらく烙人が、わたし達の保護者なんでしょ？ ちゃんと保護責任は、果たしてもらわなきゃ」

「……あんだ、そりゃ……」

朝方早くこの家を出た者の旧い仲間である、紫苑の髪と目の、痩せた体の若い男は。目は一応覚めているのだが……常に体調不良という状態のために布団から出ず、鋭く整った顔付きで、睨むように紅い少女と灰色猫を見上げたのだった。

紫苑の男は気怠そうに床上で体を起こしながら、紅い少女が抱える灰色猫を不服そうに見つめる。

「またそいつ、魂だけ連れて出歩くのかよ……そういうの正直、あまりお勧め出来ないけどな」

「仕方ないでしょ？ エルフィは躰は六歳の子供なんだから。すぐに疲れて眠っちゃうし、それならこの方が持ち運び自由よ」  
「ここにこと虚ろに微笑む紅い少女に、苦い顔をする紫苑の男の様子がありありと、瑠璃色の髪の子供まで届く。」

「ピアスからエルフィまで、ちゃんと意識も繋がってるしね。エルフィの直観が届く範囲なら、ここから京都くらいまでなら、何とかわたしの遠隔操作だって出来るのよ」

普通の人間の感覚では考え難い内容を、いかにも嬉しそうに口にする紅い少女は、その言葉の通り——瑠璃色の髪の子供の魂だけを宿した、灰色猫の内に在る黒の珠玉からの呼びかけで、自我の手綱を子供に渡す事が出来る状態であり、

「よくその感覚で生きてられるな……正気の沙汰じゃないぜ」  
化け物でありながら、至って真つ当な感覚を持つ紫苑の男は、ともすれば女性にも見えそうな程に端正な顔立ちを強く顰め、紅い人形を見つめるのだった。

紅い少女は、やだなあと心から楽しげに微笑むと、  
「わたしをそう造ったのは烙人でしょ？」

人形である己の創成に関わった技術者を、綺麗に見返していた。

改めて不服気に紫苑の男は、紅い少女から拙く目を逸らし、冷え冷えとした寝床から立ち上がる。

「オレは最終調整を任せただけだ。生物工学なんて本来全然畑違いだし」

「でもわたしのクレセントも、三つの心臓も烙人製じゃない。それがあからわたしはこうなったと思うんだけど？」

クレセントと銘打つ二本の魔法杖を持ち、少し前に『神』を殺すため、『神』が遷り来た自らの心臓を貫いても、その後蘇生出来た生き物は……ある強い力を持つ二人の悪魔の情報を基に造られた、悪魔達の子供と言える身上であり、

「それで水火に魂が宿ったなら、苦勞した甲斐はあるけどな」  
本来そうした人造の『力』ある生物が、真つ当な人格を得て、自律して稼働出来る事はほとんどないと言われており。

たとえ人形の性であっても、紅い少女がいつしか自身の心を得られていた事は、当初関わった時にはそれを諦め切っていた紫苑の男には、一つの安堵であるようだった。

そうした生き物の創成に携わった紫苑の男は、旧くからある職業を生業としており、

「今度はエルフィに良い依り代を造ってあげてね。いつまでもただのぬいぐるみの中は、確かに危なっかしいものね」

物造り系何でも屋であり、携帯型に出来る高度な武器や道具を造れる男は、瑠璃色の髪の子供の魂が宿る珠玉の依り代造りを、旧い仲間である子供の養父に依頼されて来ていた。

「時間かかるぞ……やれ猫型がいいだの、空飛ぶ盾がいいだの、無茶な注文が入りまくってるから」

「あら、素敵ね。エルフィったらとても豊かな想像力ね」

「そいつの兄貴の剣みたいに、携帯可に変えるだけなら一瞬で済むけど。仮にも竜珠の殻を一から造るとなると、まず材料も吟味しなきゃだし」

男と少女と子供の間で予定されていた本日の買い物は、その材料を買い出しに行くためであったが、

「造り切れる程オレの体が持つかどーかだな。はつきり言って最後の仕事になりそーだから、気合は入れるけどよ」

しれっとそんな事を口にする男は、若くして悪魔の呪いに体を蝕まれた身で、その身体の崩壊は差し迫っており。呪いによる発作で度々倒れる事を、少女も子供も教えられていた。

紅い少女はとても穏やかに、綺麗な顔付きで微笑み、

「エルフィの依り代が出来て、わたしのクレセントも注文通り改良してくれたら、いつ成仏してもいいと思うわ、烙人」

「鬼かお前は。水華の口は悪くても思いやりがあったぜ」

苦々しい顔をする紫苑の男は、紅い少女の前身であるその名の少女が、人形である紅い少女の馭者の一人に過ぎないと知っていても……その失権を強く惜しむ者の一人だった。

「そう？ それじゃ——」

紅い少女は、男の哀惜の念にまるで応えるかのように、

「死ぬ前にあたしのクレセント直してってよ、ラクト♪」

これまでの虚ろさが全く嘘のように、不敵な微笑みをたたえて口にした紅い少女に、がくりと男は頭を抱える事となった。

「レイアスと養子が落ち込むわけだ……」

その不敵な顔付きは紛れもなく、少女の前身と何ら変わり無い、水華と呼ばれていた少女のものであり。

そんな男に追い打ちをかけるように、紅い少女は更に少し、違った口調と明るい顔で微笑みを浮かべる。

「あれねえ？ 烙人の要求通りにしたつもりなのになあ？」

「……ラピスまでレパトリーに増やしたのか、お前は」

「えへへへ。正確にはちよつと違うけど、まあラピと言って間違いではないかなあ、これも」

そうして、失われた様々な誰かの真似を楽しむ人形と、男も目をかけていた、仲間の養女の躰を使う瑠璃色の髪の子供に、心底複雑な思いを抱えながら。

それでも少女と子供を助けてほしいと、旧い仲間のたつての願いに、この家にしばらく滞在する事を決めた紫苑の男は——

危うげに明るく、楽しげに男の腕を引っ張る紅い少女について、その雑魚寝部屋を後にしたのだった。

「……——……」

近い部屋のそうした一部始終を、まるで夢に観るように情報を受け取り続けた、魂無く横たわる瑠璃色の髪の子供の躰は。

「水火の……ウソつき……」

寝言のようにそれだけ……素直な哀しみを口にした。

紅い少女と紫苑の男が、手提げ型の買い物籠に灰色猫を詰め、その家がある平野の閑散とした人里から、北に位置する盛況な街に向いて程無く。

世界地図で中央に位置する『ジパング』という小さな島国の、更に中心地である『京都』という街で一番大きな商店通りで、少女と男が思いもよらない出会いをする事になったのを、全て灰色猫から瑠璃色の髪の子供は探知する。

「……………水火、借りるね」

一人自宅で、明るい部屋のベッドに横たわったまま、子供はその把握した現状を、遠隔地の少女を通して男に伝える。

「ねえ、ラクト……………あそこにいるヒト、ラピスの友達みたい」

「——は？」

くいくいと紅い少女は買い物籠を持っていない方の手で、その街に合わせた格好——洒落た黒い裾よけの覗く、白の着流しの紫苑の男の袖を引っ張り、振り返る男を無表情に見上げた。

「つてお前——水火じゃなくてピアスカ？」

「うん。わたし、あのヒトと会ってみたい……………行っていい？」

瑠璃色の髪の子供がそうして、灰色猫に宿った魂をメインに活動する時は、本名でなくそう呼び分けられており。

男は少女の視線の先の人影を、改めて確認する。

「あれは……………青の守護者の姪だろ、確か」

世界中を渡り歩いた化け物である男は、この世界に隠れ潜むある『宝』の守り手——正式には『守護者』と呼ばれている、人間ならぬ強大な『力』を持つ者達の事を、様々な情報だけは一通り把握していた。

「危ない事はないだろうが、多分逆に警戒されるぞ」

視線の先の、古道具屋に立ち寄っている一般的な着物の姿の年若い少女の気配を探り、男は難しい顔をする。

「水火が『魔』だってすぐにバレるはずだ。相当強い『力』と靈感の持ち主だぞ、あの子」

現在紅い少女を動かしているのは人間の子供の魂であっても、悪魔を基に造られた紅い少女自体の不穏さは、隠せないと言う悩ましげな顔の男に、

「うん。だから、水火も友達になれると思う」

至って気楽に、紅い少女の操り主は淡々と所感を口にし。

そのあまりの無害な発想に、男は一度だけ大きく息をつくと、了解というように無表情にゆっくり頷いた。

「オレもちようど、この近くにいるはずの奴に用があるから、終わったら来てくれ。先にある程度、買い物も済ませておく」

「わかった。ラクトも倒れないように、気をつけてね」

全く無機質な表情で男を見て言う少女に、男は困ったように笑いながら溜息をつき。紅い少女をその場に残し、いくつもの商店が連なる賑やかな界限へと姿を消していった。

——で、と。買い物籠を腕に掛けて持ち直した紅い少女は、ふふと微笑みながら、必要事項を独り言で確認する。

「お話するのは、わたしにしろと言うのね？ エルフイ」

男が行ってから、すぐに人形の手綱を放した灰色猫を籠の内に収め、紅い少女はその古道具屋……紅い少女とおそらくかなり年の近い、肩にぎりぎりつく長さの真直ぐな赤い髪、着物の少女が見ていた店にゆつくりと近付いていった。

強い『魔』の血をひく紅い気配の接近に、すぐに気が付いた赤い髪の少女は。青みがかって凜とした黒い目を紅い少女へと不思議そうに向ける。

「こんにちは。ちょっと、お尋ねしていい？」

「——え？」

紅い少女は至って直球に、人間ばかりの街に突如現れた異国の出で立ちの怪異に不審の目をする赤い髪の少女に、虚ろに笑い話しかけた。

「この辺りで、瑠璃色の髪の女の子を見なかった？ 暗いけど

珍しい髪の色だから、目立つと思うんだけど……」

「……見てないけど……その女の子が、どうかしたの？」

同じ髪の色、親密な友人がいるはずの相手には、その問いは聞き流せないとわかって尋ねた紅い少女であり、

「捕まえないの。わたしからずつと逃げ回ってるの」

言う者によっては不穏ともとれる内容を、にこにこ言う紅い怪異に、赤い髪の少女は少し呆然としたようだった。

しかし赤い髪の少女は、すぐにその話に興味を失ったように……不自然さすら伴う、平静な顔付きで紅い少女を見返した。  
「ごめんね、私にはよくわからないわ」

淡々と答える赤い髪の少女は、それは全く本心の様子であり、  
「貴女は……瑠璃色の髪の女の子に、何も心当たりはない？」

微笑みながら食い下がる紅い少女に、ええと赤い髪の少女は、  
紅い少女そのものに関心を失くしたように頷いた。

「……ありがとう。呼び止めてごめんなさい」

それ以上は食い下がるのも不自然であるため、紅い少女は場を後にして——束の間の出会いをすぐに終える事になった。

赤い髪の少女から離れてから、紅い少女は灰色猫を取り出し、  
黒く大きな両目を見つめて首を傾げる。

「……どう考えても、怪しいのよね、わたし」

『魔』である紅い少女を不審者と気付きながら、その不審さに全く触れようとはせず。あまつさえ——

自身の友人が不穏事に巻き込まれているともとれる内容を、  
あつさりとした赤い髪の少女の反応は、紅い少女も灰色猫も  
いくらか想定外のものだった。

「確かに最初は……ラピを知ってるあのコをわたし知ってて、  
わざと声をかけたって、気付いたみたいなのよね」

まるで途中から、その気付きそのものを消されたような、本来  
とても鋭い赤い髪の少女の不自然な反応に……この段階では、  
紅い少女も灰色猫も、実態に思い至る事は出来ず。

かなり不消化な事項をそのままに、商店通りに消えていった紫苑の髪と目の連れを探し、紅い少女は歩き出した。

「わたしが知ってる限りでは……ラピはよくあのコ達のこと、嬉しそうに水華に話してただけ」

籠のない手に抱えた灰色猫に話しかけるように、淡々と少女は無表情に続ける。

「結局わたしが水華の内は、会うことはなかったけど。ラピがレイアス達に拾われてジパングに住み始めてから、ずっと……ラピがいつも、笑っていられるようになったのは、あのコ達と知り合ってからだってアフィも言ってたわ」

紅い少女が口にする名——瑠璃色の髪の少女の養父母は、紅い少女には義理の姉姉にあたり。形だけなら叔母となる、しかし瑠璃色の髪の少女よりも年下の紅い少女は、身近な親戚として知っていた瑠璃色の髪の少女の思いを伝えてくれた。

「ラピは自分も含めて、弱い人間が本当は大嫌いだったけど。だからこそ、人間とか化け物とか特に考えない、優しくて強い混血のあのコ達が本当に好きだったみたい」

灰色猫もその思いは、先程赤い髪の少女を初めて目にした時……赤い髪の少女が瑠璃色の髪の友人に対し持ってくれている思いが、どれだけ温かなものか感じ取り。瑠璃色の髪の少女の癒しが、確かにそこに在ったとわかっていた。

「ユーオンはラピの事……ラピが消えちゃった事、あのコ達に自分から伝える気はないみたいだけど」

くすくすと紅い少女は、瑠璃色の髪の少女には兄貴分であった、約一年前に拾われた金色の髪の少年も、偶然に妹分の友人達と半年程前に出会っていた事を思い、端整過ぎる虚ろな微笑みを浮かべる。

「それってどうなのかしらね？ ラピがもう何処にもいない事……ユーオンだって仲良しのあのコ達に、ずっと隠して生きていくつもりなのかしら？」

あまり自ら語らない、義理の親戚の金色の髪の少年の、真意を知りようがない紅い少女は……少年の妹である灰色猫に尋ねるように、視線を手元に向ける。

「エルフィは……どう思っているの？」

直観という特技で周囲の思いや現状を感じる灰色猫とは違い。灰色猫の方の思いは、紅い少女がその躰を貸し、自我の手綱を灰色猫に渡している時にしかわからないものであり。

「それがラピの望みだから……それでいいのかな？」

それでも、誰にも知られずにこの世から消えたい——それが瑠璃色の髪の少女の望みだったと、知っていた紅い少女は。

それが可能ならいいのにねと、ただ虚ろに微笑み呟いていた。

紫苑の男の気配を辿り、合流せんとする道中で、始終淡々と灰色猫に話しかけ続けた紅い少女に。

その脳裏に去来していたのは、少女が瑠璃色の髪の少女からまっすぐに晒された光景と、灰色猫は感じ取っていた。

既に死した体を、悪魔に縋って生を繋いだ瑠璃色の髪の少女……ここにいなかったはずの者の望みは。

最初からそこにはいない、在るべき状態に戻る事で。

—私がホントは死んでるってわかったら、今までみたいに……みんな、笑って一緒にいてくれない—

幸薄い少女に与えられた現実……新たな優しい両親や友人。その温かな者達に救われていながらも、彼らの前からいつか消えていく事が、避けられない定めと知っていた死者は。

彼らと長く共にいられない、残酷な出会いそのものを嘆き、せめて自身が消えゆく時に禍根を残さない事を望む。

—それならずと、誰も気付かないでもらうしかない……もう誰にも会えないし、何処にもいく所がないよ……—

少女に巢食う事になった、ヒトの記憶を奪う『神』に少女が抗い切れなかった最大の理由が。少女に関わった者の記憶から、自身を消して欲しいという昏い望みだった。

しかし『神』はそれが、少女の理性的な望みに過ぎず——

—でも、独りっきりで死んじゃうのはやだ……!—

だからこそ悪魔の助けを拒否出来ず、少女が生を繋いでいる現実を知っていた『神』は、少女の望みよりも現実を優先する。

『神』は、少女の望み通りには周囲の記憶を奪わず、むしろ少女が望まない形で少女の兄貴分の少年の記憶を奪い。

それは全て、少女を守らんとしていた少年に、少女の現状を維持させるためであり……少女の望みと現実の混乱、どちらも感じていた直観の少年も混乱し、破綻を迎える事となる。

そしてそれが——たった独りで消える事を少女が本気で望む、最後の引き金となった事は間違いがなかった。

—誰にも知られず消える事が出来れば、私は良かったの……—

少女の望みを、その『神』が叶える事は結局無かったが。

ヒトの記憶を奪える『神』とよく似た何か、少女の望みを叶えんと動いていた事を、やがて灰色猫は知る事となる。

\*

気配を追って辿り着いた川辺で、やっと紫苑の男を見つけた  
紅い少女は……その腕の中の灰色猫は、静かに驚く事となった。

「……あれれえ？ 誰かなあ、あの女のヒトと男のコは」

にこやかに遠目で、男と男が会っていた者達の姿を確認した  
紅い少女は、何故か瑠璃色の髪の少女スタイルへすぐに変貌し。

その選択の意味は、紅い少女が少なくともその相手の一人の  
素性については、気が付いている事を示していた。

「あの男のコは確か、ラビがPHSの待受にしてたコだけだなあ。  
何か凄くアヤシイおねーさんと一緒にいるね、ねえエルフィ？」

紫苑の男が険しい顔付きで、話をしている二人の相手は。

一人は紅い少女と年恰好の近い、白金の髪と紅の目を深型の  
帽子で抑え目にし、襟のある上着と繊維の荒い長い下衣という  
この国らしからぬ服装で、人の好きそうな笑顔——それでいて、  
端整に整った顔立ちの少年と。

もう一人は全体的に黒のシルエットの、長く真直ぐな黒髪を  
高い位置で一つに括り。縦襟の黒の上衣に上下の繋がった服を、  
腰に下げた長剣のベルトで引き締める、空のような青い目の、  
営業スマイルといった顔付きの大人の女性だった。

紅い少女がそこに辿り着いた事に気付いた紫苑の男が、少し  
バツの悪そうな顔をしながら少女を手招きする。

「あれ？ 烙人さん、知り合いですか？」

男と楽しげに話していた帽子の少年は、男の方に近付いてくる  
紅い少女に気付き、不思議そうに紅い少女を眺める。

少年の隣に立つ黒い女は、むすつとしている男に代わって、  
楽しげに答える。

「あのコは烙人君が造った娘ですよ、櫛君」

「ええ！ 烙人さん子供いたんですか！？」

「……誰がだ。適当な事言うな、あんたも」

一斉に三人の視線を受ける事になった紅い少女は、にこにこ  
明るく微笑みながら、灰色猫に話しかけつつ現場に向かう。

「今日は何だか、色々運命的な出会いがあるねえ、エルフィ」  
そんな事を口にする少女は、灰色猫に宿る魂が、現在の状況に  
密かに大きく動揺している気配は、気付いているようだった。

それはおそらく——その少年と、瑠璃色の髪の少女の縁と。  
更には黒い女との縁を、灰色猫が直観したからだった。

「そうですねー。でないと烙人さんが成人前の子供になるし、  
今まで放っておき過ぎですよねー。烙人さんの不健康ぶりだと  
無理もなくても、それにしたってヒドイですよね」

「わかっているなら薬よこしやがれ、櫛。オマエならこの場で、  
すぐに調剤する事だつて出来るだろ」

恐喝するかのよう大人げなく少年を睨む男に、帽子の少年は  
ダメです！ と、男を見返す。



「烙人さんの注文通りはホントに危ないお薬になっちゃいます！僕まで危ない売人さんになっちゃいます！もう少し研究して体に良い物にしないと、とてもじゃないけど渡せないです！」

「つたく……櫛はお節介なんだよ、ガキのくせに」

「その辺り適當過ぎるから、烙人さんは不健康なんです。もう少し体を大事にして下さい！」

年中無休の体調不良の男が、この国に来た時には頼りにする若き薬剤師らしい少年は、少年をガキ呼ばわりする男より余程大人びた、穏やかに不満げな顔で男を見上げていた。

そんな少年の横で、けらけらといった様子で黒い女が笑う。

「文句があるなら、自分でお薬造ればいいのにね、烙人君も。元々はそうしてたんじゃないの？」

物造り系何でも屋である男は、そもそも少年に頼んだ処方箋も、基本構成は自身で開発した薬剤だったが。

「んな余裕あれば誰が頼むか。薬なんて本来専門じゃないし、本気でそろそろ死にかけなんだオレは」

「そうみたいだね、残念だねえ。探し人もまだ捕まえられないままなのにねえ」

「……………」

じろりと黒い女を睨む男は、とても複雑そうな顔をしており……黒い女も不敵な微笑みで男を見つめ返し、しばらく無言で対峙する大人を横に。

場に到着した紅い少女は、帽子の少年に朗らかに声をかけた。

「こんにちは、初めまして。アナタ、烙人の知り合い？」  
にこにこ明るく尋ねる少女に、少年もうんと明るく頷く。

「私は竜牙水火つて言うんだあ。最近引越してきたんだけど、京都っていい所だねー」

「タツキさん？へー、ジパングの人っぽくないけど、何だかカッコいい名前だねー」

完全に当て字である姓を名乗る少女は、でしょーと嬉しげに、軽い調子で少年と話を続ける。

「アナタは何て言うの？名前教えてほしいな」

「僕？僕は猪狩櫛、京都在住だよ」

「へー。アナタもジパングの人っぽくないけど、何かすつごくいかつい名前してるねえ」

ぐはあ！と初対面の少女に身も蓋も無い指摘を受けた帽子の少年は、ショックを受けるように胸元を掴んでのけぞった。

「それよく言われるけど、大人しげなのに何と直球な竜牙さん！何だろこの感じ、竜牙さん僕と何処かで会った事ない！？」

「気のせい気のせい。私と櫛君は確実に初対面だよー」

その紅い少女が、少年とよくPHSで連絡を取り合っていた瑠璃色の髪の少女を真似ていると、知る由もない少年は――

「……そうかな？全然似てないと思いますよ、櫛君」

さらりと傍らで、落ちていた声を黒い女がかけた数瞬後には。

――あれ、と紅い少女が目丸くする程に。すぐにも平静な状態に戻り、だよねーと明るく笑う帽子の少年がそこにいた。

しかしそこで、少年自身も何かの違和感を持ったらしく、  
「……あれ。誰に似てないんだっけ」

笑顔のまま首を傾げる少年を、紅い少女は無表情に見つめる。

それでもそれは、違和感を超える事はなかったようで、

「そうだよ、竜牙さんとは初対面だよ。ヘンなこと言っ

ごめんねー、竜牙さん」

「……………」

平和な顔でアハハと笑う少年に、紅い少女は少しの間、ふむと  
考え込む素振りを見せた。

そして紅い少女は——ただ、現状の片鱗に触れるために、

「檢……瑠璃」

「——え？」

その少年が知ったはずの、この国で届け出られている、誰かの  
別名を口にした。

「私、檢さんって所に居候してるんだ。京都からはもう少し、  
南にある人里なんだけどね」

「それって……ラピちゃんのお家じゃない？」

驚いて息を呑んだように紅い少女を見つめる少年は。

少年の知る瑠璃色の髪の少女の、普段は使われていない名を  
しみじみ思い出したように、そして少年と少女が共通の知人を  
持っている事に、すぐに思い至ったようであり。

そして更に——紅い少女と灰色猫を静かに驚嘆させる台詞を、  
その後続ける事になる。

「じゃあひよつとして、竜牙さんがラピちゃんの妹さん？」

「——え？」

「——あ？」

ポカンとした紅い少女の隣、黙って成り行きを見ていた男まで  
哑然とする程、少年のその台詞は唐突であり、

「ラピちゃんこないだ、今度から妹さんがジパングに住むって  
言ってたんだ。でも竜牙さん、名字も違うし、やっぱり違う？」

「……………」

「……な？」

顔を見合わせる男と少女は、それもそのはず……。

「それって……いつのこと？ 榎君」

「ほんとについこないだ。まだ一週間たってないけどなあ」

少年が言う頃には既に、瑠璃色の髪の子供に躰を譲り、消えて  
しまっている少女と——話をしたという少年に。

不可解過ぎる事態に黙り込んでしまった少女と男に、少年は  
不思議そうに自然に笑った。

「ラピちゃん、お母さんの所に行くって言ってたし、今はもう  
ジパングにはいないんだよね？」

「……お母さんの所？」

紅い少女はぴくりと眉を顰め、無表情のまま少年を見返す。

「アナタには——ラピはそう言ったんだ？」

「うん。あれ？ 竜牙さんには違うの？」

当初口にした漢字名でなく、瑠璃色の髪の少女の愛称を少年と  
同じように言った少女に、少年は微笑んだまま首を傾げた。

「……………」

紅い少女は一しきり、無表情にまた考え込んだ後、

「私はラピの妹じゃなくて、ラピの妹を預かってるんだあ」

にこりと明るく微笑むと、少女側の事情を、躊躇無く少年へとそこで口にした。

「ラピも、ラピのお兄ちゃんもお父さんも留守にしてるから、ちっちゃなエルファイを守ってねって頼まれてるのー」

「そーだったんだ！ うわー、大変だねえ、竜牙さんも」

「でしょー？ いくら私が、ラピの義理の叔母さんだからって、ユーオンもレイアスもヒドイよねえ」

そーなの！？ と驚く少年に、えへへと少女は明るく笑った。

「そういやユーオン君もいないってラピちゃん言ってたなあ。でもそれじゃ、今お家には、女の子しかいないんじゃないの？ 大丈夫、危なくないかなあ？」

「うーん、だから烙人がいてくれるんだけど、烙人も正直、あんまり体調良くないからなあ。やっぱり少し無用心だよねー、危ないよねえ？」

オイオイと、悪魔の血をひき強力な魔法剣士である紅い少女の、か弱いぶりっこに男が呆れるのも構わず、紅い少女は少年との会話をそのまま楽しんで続ける。

「でも、ラピの知り合いに会えて良かったなあ。京都ではまだ全然、頼れるヒトがいなくて困ってたのー」

「そっか、そうだよね。竜牙さんも引越してきたばかりって、さつき言ってたよね」

それならと、帽子の少年は、人の好い顔で紅い少女の手をとり、朗らかに笑った。

「良かったら今度、他の友達にも竜牙さんのこと紹介するよ。みんなラピちゃんの事も知ってるから、ラピちゃんの妹さんも一緒に連れておいでよ」

「本当？ 嬉しいなあ、梱君って優しいねー」

淑やかでもきらきらとした目で少年を見つめる少女に、少年はあははと照れ臭そうにする。

「明日はちよつと用事があるから、明後日の朝にまた、ここに来てもらっていい？ みんながいる所に案内するからさ」

「うん、わかった。よろしくお願いするね、梱君」

そうして少年と少女の話が一段落したところで、話の邪魔をしないように黙っていた黒い女が、少年へと視線を向けた。

「そろそろいいですか？ 梱君」

「あ、ごめんねスカイさん。まだ京都案内の途中だったよね」

「すみませんねえ。休暇中とはいえ、営業職にはどうしても、次の仕事の足場固めが必要なもの」

それじゃと黒い女は、紫苑の男にひらひら手を振り背を向け、「さわらぬ神にたたりなしですよ——烙人君も、水火さんも」顔見知りで手伝いを頼んだらしい帽子の少年と、毒も害も無い仕事らしき活動のため、夕刻前の川辺を後にしたのだった。

帽子の少年と黒い女が去った後で、紅い少女は改めて——  
まだ不眠且つ複雑そうに黙る男を、虚ろな微笑みで見つめる。

「あのヒトは誰だったのかしら？ 烙人」

「……………」

「何だか烙人とは親しげに見えたけど……………わたしの気のせい？」

—— けつと。少女を見ずに川辺に背を向け、歩き出した男に  
続きながら、楽しげにしている紅い少女に、

「オレのヨメ……………によく似た、名前までほぼ同じっつゝ意味の  
わからない、多分人間の妙な女だよ」

さらりと男は、既に顔見知りではあった黒い女を思い浮かべ、  
不満そうに大胆な事情を口にした。

「烙人のお嫁さん？ そんなヒトいたかしら？」

「この世界の時間軸では、十年前かな。西の大陸で告ったけど、  
ずっと拒否って逃げ回ってんな」

「それ、完全にストーカーじゃない？ 怖いなあ、烙人みたく  
一途なヒトに想われると、そんな事になるのね」

黒い女が口にした、男の『探し人』という言葉をそこでやっと、  
紅い少女は納得したようだった。

「まああのヒト、何か普通の生き物じゃない感じもするし……………  
烙人の探し人がどんなヒトか知らないけど、あのヒトはやめて  
おいた方がいいと思うわ」

「言ってる。ヒトの事言えた義理かよ、水火も」

危うげに明るい少女口調から、すっかり虚ろな微笑みの常態に  
戻った紅い人形に、呆れたように言う男だった。

それにしても——と。男と少女、どちらからともなく、一番  
不可解であった事柄をそこで口にする。

「櫛が会ったラピスっていうのは……………いったい何者なんだ？」

「……………そうよね。もうとっくにラピは、成仏してるとばかり、  
思ってたんだけど」

——と男は、怪訝そうに紅い少女を見つめる。

「水火はそれは——ラピス本人だと確信してるのか？」

「そうじゃない？ だってわざわざラピを騙ってラピの友達に  
会いに行くなんて暇な事、誰もしなないと思うわ」

「まあな……………でもそれだと、余程霊的素因の強い人間でないと、  
単独で現世に干渉するのは、死者には無理だぞ」

既に消えた存在の、瑠璃色の髪少女と会ったらしい少年には、  
何の違和感も与えない姿で少女は現れたはずであり、

「そうよね……………もやっとした霊体とかじゃなかったなら、凄く  
強い力を持ったヒトに降霊されるか、櫛君が有り得ない程強い  
霊感を持っているかしら、思い当たらないわ」

瑠璃色の髪の少女自身には、自らをそこまでこの世に再現する  
力はないと。それは少女にも男にもわかりきった事だった。

「これは……………エルフィと辻褃合わせが必要ねえ」

この川辺の一部始終も、灰色猫を通して観ていたはずの子供を  
思い浮かべ。紅い少女はあっさりと、自身で事の真相について、  
考えてみる徒労をそこで放棄した。

紅い少女がそうして、現状把握に優れる子供の力を期待した通りに。

夕方に自宅に帰り着き、灰色猫が傍らに戻ると共に、やっと目を覚まして起き上がった瑠璃色の髪の子供は——開口一番に、既に観えていた所見の一部を口にした。

「ラピスはもういないけど。ラピスの一部が、まだ彷徨ってる」  
「——どういう事？ エルファイ」

長い髪を左側で一つに、黒く長いリボンできゅつと束ねながら、無表情に子供はきよろきよろと辺りを見回す。

「ラクトは……体が悪いの？」  
「みたいね。帰ったらすぐ、寝床に引っ込んでしまったわ」  
そつかと子供は、少し残念そうに灰色猫をぎゅつと抱える。

そしてそこで——それまでずっと考えていた思いを、子供はベッドに座ったままで、初めて紅い少女に伝えた。

「……あのね、水火」  
「——？」  
「わたしは——ラピスに帰ってきてほしい」

「……エルファイ？」

何の情も浮かべず、ただ澄んだ紅い目で子供を見つめる、隣に腰掛けた紅い少女に、子供は躊躇いがちに続ける。

「水火も手伝って。わたし一人じゃ、それは出来ないと思う」

それは——と少女は、不思議そうに子供を見つめた。

「別にいいけど。どうしてわざわざ……そうやって頼むの？」  
自身は元から、子供の人形であると。それなのにあえて協力を要請する子供に、紅い少女は虚ろに微笑む。

「……………」  
子供は暗い青の目……それでも瑠璃色の髪の少女の深い青より、僅かに色が薄まった目で少女の紅い目をじっと見つめた。

そのまま黙り、何も答えない子供に紅い少女は改めて微笑み、  
「よくわからないけど。とりあえずわたしは、何を求めるの？」

「……兄さんと父さんには、心配するから内緒にしてね」  
それは必須と少女を無表情に見つめる子供に、あらと楽しげに口元を押えて笑いを堪えていた。

「二人共、魔界に行ったばかりだし、早々帰らないと思うけど」  
「ラピスも、魔界にいると思う……兄さん達が助けに行った、母さんのそばに」

「——あららら？」  
そこで心底、意外とばかりに、紅い少女は首を傾げる。  
「今日の事だけで、どうしてそんなに色々わかるの？ エルファイ」  
「ラピスはそのヒトには……お別れを言ったんだと思う」

「あのヒトって——櫛君のこと？」  
こくりと子供は、瑠璃色の髪の少女が母の元に行くと言ったと、

屈託なく伝えてくれた少年を思い出しているようだった。  
でもそれはと、紅い少女は困ったような顔で微笑む。

「ラピは、本当のお母さんと一緒に成仏したんじゃない？」

「……うん。それもそうみたい」

だからあくまで、彷徨っているのは一部だと、子供は少し前に気が付いたある事実を先に続けた。

「ラピスは悪魔と契約して、生きてきたから」

枕元に置いてある、壊れたPHSをそこで手に取る。

「契約が終わった後はラピスの魂は……悪魔にとられちゃったはずだから」

そのPHSに取り付けられていた、瑠璃色の髪の毛の少女が大切にしていた物がないと——魂が宿り媒介たり得る物が消えた事の意味を、正確に把握出来る子供にはある理由があった。

「……なるほどね。そう言えばエルフィ、ちょっと前までは、生粋の悪魔使いだったものね」

赤い天使のみならず、数々の天使の姿をした、悪魔の宿る人形——それを傀儡としていた子供の前身を思い出し、紅い少女も凜とした目で、子供を見返して頷く。

「エルフィは魂だけが、今もピアスの珠玉にいるみたい……ラピ自身は成仏しても魂だけが何処かに残って、契約の代償に奪われてるはずということね」

「うん……それでラピスが何処に行ったのかまでは、わたしもわからなかったけど」

それが今日の少年との出会いで、糸口が掴めたというように、子供は力強い目で紅い少女を見上げた。

「ラピスはきつと——母さんの所に行きたかったんだよ」

子供は未だに会えた事の無い、瑠璃色の髪の毛の少女と金色の髪の毛の養母を、その養女はどれだけ慕っていたか——

それをたとえ、子供は知らなかったとしても。養母の方も、何も動かず養女を手放す事はなかったのだと、この先に子供は知る事になる。

「シルファは、シルファのお母さんと一緒にいっちゃったけど。ラピスはきつと、母さんの所にいると思う」

「でもエルフィ……それは……」

紅い少女は少し悲しげに、諭すような目で子供を見つめた。

「魂はあくまで、ヒトの自我と精神を司る一時的な表層意識を支える力に過ぎないわ。エルフィの魂がわたしを動かした時も、わたしは結局、わたしであるように」

「……」

魔道の徒である少女は子供の胸に、冷たい手を当て先を続ける。

「理性や精神、そんな脆弱で不安定な高位の自我じゃなくて。エルフィがエルフィである理由……エルフィの本当は——命と心は、こっちにあるのよ」

だからたとえ——瑠璃色の髪の毛の少女の魂が、未だに何処かに残っていたとしても。それは少女本人でなく残滓に過ぎないと、紅い少女は現実を口にした。

「ラピは……シルファは多分、二度と戻っては来ないと思う」それは金色の髪の毛の少年からも告げられた、厳然とした事実で

……安らぎを得たはずの幸薄い少女の、切なる望みだった。

わかってる——と、瑠璃色の髪の子供はまっすぐ紅い少女を見返して呟いた。

「それはわたしの我が侘だから。うまくいなくてもいいの」

「……」

「水火も兄さんも、反対なのはわかってる。二人は優しいから

……シルファをもう、眠らせてあげたいんだよね」

だからあえて、協力してくれるかどうかを尋ねていた子供に、

紅い少女は困ったような顔で笑った。

「わたしは反対というより、無理と思っただけよ」

「……」

「ラピ、頑固だったからなあ。でもエルフィの気が済むなら、

何をすればいいか言ってくれたら、いくらでも付き合うわ」

にこにこ、普段通りの顔で笑って言う少女に、子供はうんと

無機質に頷く。

とりあえずと子供は、そのまま爆弾発言を続けた。

「シルファのお母さんに、会いにいきたい。連れてって、水火」

「——はい？」

笑顔のまま紅い少女は、理解不能な内容に思考を止める。

「今日のヒト、シルファのお母さんだった。だからあのヒトと、

楽しそうに一緒にいたんだよ」

「って……櫛君といた、あの怪し過ぎる女のヒトのこと？」

「うん。シルファの友達のこと、みんな好きみたい」

「……」 と微笑む少女に、子供は溜息をつきつつ語った。

「躰が痛みそうだから、あんまり会いたくないけど。あの女のヒトの体は、シルファを殺した本当のお母さんの体だよ」

「それはまた……烙人は本当に、変なヒトと知り合いなのね」

「ラクトは知らないと思う。中身は多分、シルファのお母さん

じゃなくて、シルファに住んでた神様に近いヒト」

という事だと、紅い少女は目を丸くする。

「もしかして……エルフィ……」

「うん。あの女のヒトにも、記憶を奪える力があるみたい」

それが今日少女達が出会った、様々な違和感の源と——それも

子供は既に把握していた。

「水火も今日、ラピスの友達に、あんまりラピって口にしちゃ

いけない。みたいな、ヘンな圧力かかってなかった？」

「へえ……そういう形の間接介入も、ありという事なのね」

成る程と紅い少女は、意を得たようにぽんと手を打つ。

「それって、会って大丈夫なのかしら？ わたしもエルフィも、

あの神様には乗っ取られかけた身の上なのに」

「大丈夫だよ。わたし達の方が本家だったみたいだから、あの

ヒトの記憶を奪う力はそんなに強くないよ」

「ふうん。何だか色々、ラピの置き土産が残ってるのね」

様々な運命的出会いの日と、自身で口にしておきながらも、

紅い少女は感心したように軽く息をついた。

「本当、エルフィ達の直観って伊達じゃないわね」

その日はそうして、それ以上進展はなく話は終わったのだった。

数千年前から夜行性である、寝巻き姿の似合う子供は。

その家の誰もが眠りについた夜更けに、灰色猫を抱えながら一人縁側に座り、暗い夜空をしばらく見上げていた。

「……兄さんは……今頃魔界なのかな」

瑠璃色の髪の毛の少女の生が閉ざされた、赤い夢を何度も観る度、金色の髪の毛の少年は妹を心配するように様子を窺いに来ており。

夢を観るのが嫌なこともあり、夜行性に拍車がかかっている子供にわかったのは……つまり少年は、子供より眠れていない状態で、顔色一つ変えずに日々生活しているのだった。

「どうして兄さんは、あんなに身も蓋も無いのかな……？」

誰もそれを望んでいないと知りながら、妹分を失くした事で自身を責める少年は、ただ常に淡々と自らに厳しくあり。

「ラクトは……竜とか精霊はそういうものって、言ってたな」

世界の数多な化け物の中でも、自然の力を基盤とする化け物

——竜や精霊といった自然霊は、情けでなく理法で動くのだと。必要なら一切情を殺す兄は、遥か昔から天性の死神だった。

元は竜の血をひく精霊の兄を持った妹は、自身はほぼ人間と言える生を受け。後に、竜の珠という秘宝に魂を囚われたが、それでも根本的な人間性は変わる事が無く。

竜の眼という小さな宝で新たな生を得た後も、やはり人間の軀に在るためか、同じ直観という感覚を持っていたても、兄程に追い詰められる事は子供にはこれまで無かった。

その分子供は——兄とは違う痛みを、古くから一人で抱える。

「……わたしも……早く母さん、会いたいな……」

善意にも悪意にも敏感だった昔の少女は、溢れる悪意の中で、孤高な暮らしを余儀なくされ、孤独には強い方であり。

幼い見た目と裏腹に、瑠璃色の髪の毛の少女の実年齢と近い年で一度死んだ魂は、一般的な人間よりずっと、おそらく強い芯の持ち主だったが。

「……ここも、寒い……」

ぎゅっと強く、灰色の猫のぬいぐるみを抱える子供は。

遠い昔に少女を支え、今では新たな生を得る事と引き換えに失われてしまった、温かな何かだけを求めて——

暗い水の底のような夜空を、祈るように見上げ続けていた。



\*

ねえ——と。

夕暮れ時に唐突に、京都をほぼ縦走する形の川辺に現れた、瑠璃色の髪で青い目の、袖のない功夫服のような恰好の子供は、

その薄暗い川辺にいる相手とは、完全に初対面であっても、長く果たされなかった再会と知りながら無表情に口にした。

「ラピスを返して。ラピスの……………お母さん」

「……………」

にこにこしながらも、ぽかんとした様子の相手は。灰色の猫のぬいぐるみを抱えて立つ子供に、沈む陽を背に沈黙で応答する。

「……………」

沈黙には沈黙で応じた目前の子供に、少し観念したように、黒い髪で青い目の女は、皮肉げにも見える顔で微笑んだ。

「わざわざ酔狂だねえ。ラピスの妹ちゃんは」

でもねと女は、残念そうな顔でも笑うと、

「シルファはラピスに戻る気はないんだよ。シルフィ……………シルファのお母さんも、ここにはもういないし」

普段は引きこもりである子供が遥々外出してまで、自身の前に現れた目的は、叶う事はないとの現実を口にした。

「君を助けられて、やっと安心して眠る事が出来たシルファを、どうして起こしたいの？」

誰かの命を喰らって生きた者が、最後にその意味を見出す事が出来た安らぎを知る女は、

「また命を喰わせれば、確かに可能だろうけど。あのコに更に責め苦を負わせるつもりかな？」

それはただの苦行でしかないと諭す女に、しかし子供は淡々と……………自らの躰の実母の躰を使う者を、その呪いに負けない強い意思の籠った目で、まっすぐに見据えて答える。

「ラピスはわたしに、連れていってと言った」

「……………」

「わたしは兄さんとラピスに助けってもらった。今度はわたしが兄さんとラピスの助けになりたい」

それが自己満足に過ぎない思いでも、昔から子供は気ままに私情で動く性質であり、

「まだ何か……………出来る事はあると思うよ」

この場で解決する事ではないと知りながら、まずは所信表明に、自らの躰を一度殺した者の元へ現れた子供だった。

「エルちゃんは本当、前向きだねえ」

子供と自身の躰の関係を、当然知っていた女は。

元来持っていた強い霊的な感覚で、名乗ってもいない子供の愛称を簡単に言い当て……………ただ、子供と同じ青の目で笑った。

その黒い女の、中身はいったい誰であったのか。それだけはこの先も、長く明かされる事はないままで。

ゆつくり堤防の上に戻ってきた子供を、付添いの紅い少女が  
出迎える。

「お帰り。お話は、終わったの？ エルフィ」

「……うん。水火」

「どう？ ラピのこと、何か進展あった？」

外界には基本興味の無い紅い少女が、社交辞令に近い調子でも  
こうして尋ねるのは珍しく。紅い少女にとってもそれがやはり、  
無視できない存在である事を示していた。

「全然。わたしじゃやっぱり、無理みたい」

「そうなんだ。ユーオンやレイアスに内緒で来たのに、残念ね」

「兄さん達は絶対に心配するから、今後も言わないでね」

まだまだ外出する気満々の子供に、くすりと少女は、虚ろでも  
楽しみに笑った。

「エルフィの考える事はわからないわ。何か一つでも、勝算は  
あるの？」

そもそも子供の目的は無理と諦め切っていた少女は、それでも  
動く気の子供に、整い過ぎた顔で微笑む。

「エルフィはユーオンより視野が広いから。何か観えてる事は  
あるんだろうけど」

「……………」

現状の把握を、五感に依存する兄とは違い、気配が感じられる  
範囲……頑張れば町一つ、カバー出来るアンテナを持つ子供は。

「あのヒトが、ラピスを返してくれたら……ラピスの友達にも  
手伝ってもらえると思う」

自身だけでは目的は叶わないと知っていた子供は、淡々と、  
直接黒い女を前にして把握した現状を改めて説明する。

「ラピスの友達は、ラピスがいない事が今はわからないように  
されてる。それがラピスの望みだったから」

「そう。それは、ラピらしいなあ」

「でも友達から帰っておいでつてラピスに言ってくれたら……  
きいてくれる気がする」

そうかな？ と虚ろに微笑む少女に、子供は力強く、無表情の  
ままで頷いた。

「ラピスは……まだ、帰ってこれる」

「それは——エルフィの体についてこと？」

元々は子供を助けるために、その体をくれた相手と命を分ける  
気かと、紅い少女は問いかける。

「それも出来るけど。それはしないとと思う」

「そうよね。それなら他に、方法はあるの？」

そこで子供はもう一度、力強く頷くと、  
「きつと……何か、出来る事はある」

特に根拠はないながらも、小悪魔のように一瞬だけ笑うと。  
相方である紅い人形と、黄昏の川辺を後にしたのだった。

赤い夢とそうして、直接向き合った効果であるのか。

その日の夜は、夜行性である瑠璃色の髪の子供は驚く程早く、温かな眠りにつく事が出来ていた。

—ごめんね……私、邪魔かな？—

まだ子供が、物言わぬ赤い天使であった頃に、瑠璃色の髪の少女と共に過ごした束の間……子供にとっては哀しくも優しい記憶が、深い青の夢として初めて訪れる。

その瑠璃色の髪の少女……金色の髪の少年の義理の妹は、

—あなた、ユーオンの妹さんなんだよね？—

実の妹より、金色の髪の少年に似た自責的な心の持ち主だった。

—ユーオンは、あなただけを守れば良かったのに……—

一度は破綻を来した少年が、何に苦しんでいたのか。少女に宿る『神』から記憶を制限されながらも、自らを誤魔化さずに直視していた少女は、奪い続けた生の果てを探し、—  
—私がいいた事に、一つでいいから……意味があればいいのに—  
—そうして大切な軀をくれた少女を、子供が慕わないわけもなく。

金色の髪の少年も瑠璃色の髪の少女も、奪い行く自らの事を呪われた者に見なし——心から嫌悪していたが。

そんな彼らをこそ子供は心から慕い、今も求め続けていた。

寝付きも夢見も良かった夜の翌朝は。とにかく朝は弱かった子供も、珍しく自分で起きられる程の快調ぶりだった。

「本当、びつくりね。エルフイってばそこまでして、櫛君達に会いたかったんだ」

川辺で朝に待っていてと言った、瑠璃色の髪の少女の友人と無事に会うためには、それが必須であったものの。紅い少女に付添われて来た、川辺の堤防に座りながら眠たげに目をこする子供に、それでも異例の頑張りとわかる紅い少女は、くすりと笑いながら、

「忘れ物よ。元々はわたしのだけどね」

「……ありがと、水火」

黒く長いリボンを取り出し、下ろしたままだった子供の髪を、束ねてやった紅い少女だった。

程無くして、約束の相手——帽子の少年が近くの橋に現れた。

「おはよー、竜牙さーん！ 今日もいい天気だねー！」

朝から元気一杯である少年は、ぶんぶんと橋の上から手を振り、堤防まで駆け下りてくる。

「ごめん、結構待った？」

「ううん、そんなことないわ。おはよう、猪狩君」

え。と少年は、淑やかに微笑みながら少年の前に立ち上がった紅い少女に、何か違和感を覚えたようだった。

「どうしたの？ 猪狩君」

「え、いや……竜牙さん、そんな大人しかつたっけ？」

虚ろに微笑む紅い少女は、そう言えば先日少年と話した時は、瑠璃色スタイルだったと思い出したようだが、

「猪狩君って呼ばれるのも、そう言えば意外に少ないかも」

「そうね。わたしも、竜牙さんって呼ばれる事は少ないわ」

ここでまた変貌を遂げるのも不自然と思ったか、このまま紅の常態でいこうと、あつさり開き直ったらしい少女だった。

そしてそんな些細な違和感は、少年は次の瞬間には——紅い

少女の傍らに立ち上がった子供の姿に、すぐに吹き飛ばした。

「うわあ！ ラピちゃんそっくりだあ！ ホントのホントに、ひよつとしてラピちゃんの妹さん！？」

「……………」

無表情に少年を見上げる、灰色猫のぬいぐるみを抱えた子供を、少年は感極まった様子で思わず抱き上げ、

「可愛いーちっちゃいー！ 君、名前何て言うのー！？」

「……………」

子供がぬいぐるみを抱えているように、子供を抱えて嬉しげに頬を寄せる少年に——

その温かみにしばらく声も出せない程、瑠璃色の髪の子供がささやかに衝撃を受けた事に気が付いたのは。おそらく彼らの傍らに佇んだ、にこにこ微笑む紅い少女だけだった。

——ホラ。と紅い少女は、少年のぬいぐるみと化した子供に、助け舟を出すようにぼんぼんと肩を叩き。

「ちゃんと猪狩君に挨拶しなきゃ、エルフィ」

しばし呆然としていた子供は、そこでようやく我に返り。意を決したように、じつと帽子の少年の深い紅の目を見つめた。

ん？ と少年は、満面の笑顔で子供を見つめ返す。

「……こんにちは」

子供は僅かに頬を紅潮させながら、表情は至って無機質のまま、  
「ウツギ……ネコハです。ウツギルリとシグレの——妹、です」

はにかむように何とか言い切った子供に。

「猫羽ちゃん！？ ジパンダ名も持つてるんだあ、可愛いー！」

きゃあーと叫ばんばかりに、更に強く少年は子供を抱き締め、  
「ラピちゃんと一緒に、ホントは人見知りの小動物な感じだよ」

懐いてくれると嬉しいよね可愛いよね、何でもしたくなるよね！」

最早全く反応出来ない、一見は六歳程のただの幼い子供だった。

そうしてそのまま、付き添いの紅い少女を隣に、少年の腕に

抱えられた状態で場所を移動する事になった幼い子供は。

「……………」

ひし。と少年の首に、ぬいぐるみごとしがみつきなから。

その少年には血縁者がいないことを、ふと感じ……それでも持てる温かみに知らず、一筋の雫が静かに頬を伝っていった。

帽子の少年が瑠璃色の髪の子供と紅い少女を連れて来たのは、京都の管理中心地である、『花の御所』という風雅な大邸宅で……元々その大邸宅が、少年の友人達の住む場所と知っていた子供も少女も、それは予測していたのだが。

「おお！ 何とイタイケな女の童なのじゃ、本当に！」

「すげーな頼也、鶯の小さい頃を思い出すなー！」

友人達にでなく、先にその親に熱い歓迎を受ける事になった状態は、子供にも少女にも想定外だった。

「……初めまして。ウツギネコハです」

先に挨拶を済ませた紅い少女と共に座敷に正座し、ぺこりと頭を下げる子供の前では、二人の若い男が穏やかに笑いながら座しており。

「検殿から先日に、話は伺っておるよ。まさかこんなにすぐに、会う事になるとは思わなかったがのう」

一人は翠の直衣と烏帽子を着こなす、短い黒髪と青みがかかった黒い目で、端正な顔立ちをした公家であり、

「別にジパング届出名で名乗らなくていいんだぜ。ユーオンも全然、そんなの気にしてなかったしな」

もう一人は赤い髪を無造作に束ねる、赤い目で気風の良さげな、浪人風で非常に体格の良い侍の男だった。

気さくさの滲み出る男達に、紅い少女が親しげに微笑む。

「わたしはどの道、水火なんです。でも猫羽は、エルフィって呼んでいただけると普段通りです」

竜牙水火と名乗り、年若い外見に合わず、落ち着いた物腰の虚ろな紅い少女に、公家は少しだけ困ったように微笑んだ。

「竜牙殿が現在、検家の留守を任されていると伺っておるが」

「ええ。わたしはエルフィ達の義理の叔母にあたるので」

「家を空けなければいけない事情は、いくらかは、検殿からも伺った。竜牙殿も巻き込まれた騒動は一段落したと言うが……幼い子供と二人で留守を守るのは、心細くはないかのう？」

ちょうど金色の髪少年と養父が自宅を後にした一昨日に、彼らはこの御所に挨拶に来たという事であり。

それは金色の髪少年が一時期、公家に身柄を引き受けられ、この御所で生活させてもらった事や、それから色々と助けを受けていた事の礼のためだったのだが。

「良ければ竜牙殿とエルフィ殿も、しばらくの間、この御所に滞在されぬか？」

「……はい？」

紅い少女は、微笑んだまま目を丸くして公家を見返し。隣では無表情な子供が、ぎゅむっと灰色猫を強く抱き締める。

公家は穏やかな顔で少女と子供の方を見つつ、じっと公家を見上げる子供に、気さくに笑いかけた。

「検殿は正直、いつ帰るとも知れぬ出立であると申されていた。竜牙殿もまだジパングには不慣れと聞く。この土地に慣れるか、家の者が帰られるまでは、ここにおられた方が安全じゃろう。その方が検殿もユーオン殿も、安心されると思うがのう」

「それは……願っても無いお話ですけど……」

紅い少女はちらりと子供の方に目をやり、思ってもみなかった公家からの申し出に、人形の身としては判断に困るといった、子供の意向が気になる様子であり。

「……………」

瑠璃色の髪の子供はそこでおもむろに——静かに立ち上がると。

「……エルフィ？」

不思議そうに子供を見る紅い少女の前、とことこ公家の元に近付き……。

「——お？」

すとんとあまりに自然な動作で、楽しげに微笑む公家の膝に、座り込んで直衣をひしつと掴んだ幼い子供だった。

ひたすら目を丸くする紅い少女の目前で、公家はよしよしと子供の頭を撫で、赤い髪の侍も少女に朗らかに笑いかけた。

「ほら、嬢ちゃんもここがいいって言ってるぜ」

「……………」

紅い少女は、しばらくうーんと、両手を組んで考え込み。

「それでは……もし良ければ、エルフィをこちらに、しばらく預かっていただいても良いでしょうか？」

そして出したらしい結論に、公家と侍はおやという顔付きで、紅い少女を見つめ直していた。

「それは構わぬが、竜牙殿はどうされるのじゃ？」

「それが……今、家にはもう一人の同居人がいるんです。体が弱いヒトなので、放っておくのも心配ですし」

淡々と言う紅い少女に、公家の膝の上の子供も特に異論のある気配はなく、

「エルフィが寂しがるといけないので、たまに顔を見に来ても良いでしょうか？」

「ああ、構わぬよ。竜牙殿も何か、困り事があれば、遠慮なく相談に来られると良い」

あくまで落ち着いた様子の紅い少女に、それ以上公家も侍も、無理に引き止める気はないようだった。

紅い少女は整った微笑みで、有難うございますと札を口にし、

「いいコにしているのよ、エルフィ。わたしもなるべく、まめに会いに来るようにするわ」

「……………」

こくりと頷く子供に、少しだけ安堵したように笑いかけ。一人その座敷を退出した少女を、黙って見送った子供だった。

あれ？ と。その後部屋に呼び込まれた者達の中で、帽子の少年が真っ先に不思議そうに首を傾げた。

「竜牙さん、帰っちゃったの？ まだ紹介出来てないのにー」

「家に病人がいるんだとよ。蒼潤と一度闘わせてみたかったが、残念だな」

「？」

赤い髪の侍が口にした事に、部屋に入ってきた四人の子供の内、帽子の少年と同年代の、袖を千切り軽装に崩した和服に長袴を着ける、硬派そうな鳥頭の少年が首を傾げた。

「幻次さん、そいつ、強そうだったんですか？」

「ああ。あの研ぎ澄まされた感じは、隠してはいるが、相当の腕前の剣士と見た」

おおおと、夕焼け色の髪に黒い目をした剣士の少年は、表情は少ないながら右手をがっつと握り締める。

「これこれ。いくら剣士と言えど、年頃の少女に、滅多な事で闘いなど仕掛けるものではない」

剣士の少年の父である公家が、未だに膝に瑠璃色の髪の子供を乗せたまま、侍と長男を軽く窘めた。

「父上……それではこちらの方だけが、これからしばらくの間、滞在されるんですか？」

剣士の少年の隣に座る、武家の子供のような和服姿の、黒髪で黒い目と、面立ちは公家のミニチュアのような八歳程の次男が、公家の膝を占拠する幼女を難しい顔で見つめる。

「ああ。ユーオン殿と違ってまだ幼い故、一人部屋というのは心許ないがのう」

元々は、紅い少女と子供を共に滞在させるつもりだった公家はそこで、ぐるりと部屋に集まった子供達を見直し、

「頼也さん。良ければ私、エルフィちゃんと一緒にいます」

公家が何か口にする前に、唯一女の子供である、剣士の少年と同年代の公家の姪が自分から申し出ていた。

「おお。鶯からそう言ってくれるなら、姉上に突然頼むよりは気が楽じゃのう」

「いいのか、鶯？ 子供の世話は楽じゃないぞ？」

侍の娘である赤い髪の少女は、瑠璃色の髪の子供から一番近い位置——侍とは逆側の公家の隣に座り、凜とした面立ちながら微笑ましげに、子供の顔を覗き込んでいた。

「自信は無いですけど——ラピの妹だし、頑張ります」

「鶯ちゃんなら大丈夫！ 何も心配いらんよ、エルちゃん♪」  
剣士の少年、その弟、帽子の少年と、公家と侍から対面に座る男の子供達はそれぞれ思い思いの表情で、始終黙り込んでいる瑠璃色の髪の子供を見つめていたが。

「……………」

瑠璃色の髪の子供はただ——ひしっと、公家の直衣を掴み。

「大丈夫じゃよ。ユーオン殿もすぐに慣れておったからのう」  
そうして子供が強く力を込める度に、公家は穏やかに微笑み、子供の頭を撫でてくれる生活が、しばらく続く事となる。

\*

完全に唐突に——行き当たりばったりで花の御所への居候を決めた、瑠璃色の髪の幼い子供だったが。

「——え？ エルフイより猫羽ちゃんって呼ぶ方がいいの？」

「……………」

こくりと頷く幼い子供に、今日から共に生活する部屋として、自身の寝所に子供を連れて来た赤い髪の少女は。

「その方が……ツグミ達と一緒にいたい気がする」

少女の着物の裾を掴んで見上げつつ、淡々と無表情に口にする子供に、そう？ と、赤い髪の少女は無防備に微笑んだ。

「ラピは全然ジパング名は使ってなかったし、ユーオンなんて使いたくない名前、二つも登録されちゃってるのよ」

「二つ？」

不思議そうに首を傾げる子供に、少女は楽しげに先を続ける。

「最初は身元不明で、届出名があるってわからなかったから、ユーオンが御所を出る少し前、時雨雲英って登録したんだけど。

その後ラピがユーオンを迎えに来た時に、檢紫雨って名前がもう登録されてるって、その時やつとわかったんだから」

「……でも、兄さんはどっちも、シグレなんだね」

「そうなの。凄い偶然だけど……まあでも、確かにユーオン、雨が似合いそうな雰囲気はしてるものね」

はいつと少女は、子供に寝着となる小さな浴衣を差し出し、「猫羽ちゃんも、ちょっと人見知りだけど気まぐれな感じとか、本当に猫がよく似合いそうよね」

「……………」

手早く子供のそれまでの恰好——元は瑠璃色の髪の少女の古いお下がりで、体術家向きの動きやすい袖のない服を脱がせると、子供用で可愛い白猫模様の入った薄赤い浴衣を、難なく少女は子供に着付ける。

初めて着る浴衣を子供は一しきり、袖や帯紐を無表情ながら興味深そうに、そして嬉しそうに眺める。

「初めは……ヤイバにしようって、水火が言ったけど」

「って——つまり、猫刃ちゃんってこと？」

「ネコのヤイバだと、牙とか爪とかいかにも貫く感じだから、やめようって……兄さんが言ったから」

「へえ……ユーオンはもうそんなに、漢字も覚えてたのね」

常に片耳に翻訳機をつけながら、元来の直観の効用か、言語の習得能力自体は高いと少女は少年を見定めていた。

「私達とは多分、猫羽ちゃんは難なく話せるとは思うけど……御所の人はほとんどは人間だから、ユーオンもそうだったけど、無理には話そうとしないでもいいからね」

少女達のように言語に依らない意思疎通能力は、片方にそれがあれば、話は通じるというが。人間である瑠璃色の髪の子供はともかく、金色の髪の少年が現代の化け物に普遍的なその力を持っていないのは、少女は不思議であるようだった。



着替えが終わり、座布団に座った子供は、落ち着いたのか、こくりこくりと船を漕ぎ始めていた。

「ちよつと疲れちゃった？ もうお休みする？」

「んー……………」

いやいやと、目をこすって子供は睡魔を追い払おうとするが、珍しく早起きした日だった事もあり、

「ツグミともつと…………お話したい……………」

言いながら既に胡乱な声色に、赤い髪の少女は温かく笑いつつ、子供用の布団を出そうと立ち上がったのだが。

少女が寢床を用意しようとしてくれていると、それはすぐに

わかった子供は、

「ねえ、ツグミ……………」

「？」

「ツグミと…………一緒に、寝ていい…………？」

着物の裾を掴み、潤んだ目で少女を見上げる心細げな姿に、

「いいよ？ ちよつと待ってね」

二つ返事で微笑んだ赤い髪の少女は、自身が使う寝具を出し、子供と共にそこに横たわった。

「……………あつたかい」

見守るように横向きでいる少女の前、子供は満足そうに呟き、

「でも……………うたないでね……………」

「？」

むにやむにやと寝言のように、最後に子供はそれだけ口にし。

心から安心したような顔で、すぐに眠りに落ちていった。

灰色の猫のぬいぐるみを抱えたまま、眠りに落ちた瑠璃色の髪の子供の寝顔に、赤い髪の少女は微笑みながら息をついた。

「本当に、ラピにそっくり」

束ねたままだった子供の髪の黒いリボンをほどき、ひとまずぬいぐるみに巻き付けておく。

「ラピがジパングに来た頃は、もう少し大きかったかな？」

その頃はこの、無表情でも穏やかな子供より、はつきり棘を持っていた危うげな友人を思い出し、懐かしそうに微笑む。

一時期生活を共にした少年や、幼い頃からの友達が、最近はどうしているのかあまり聞けていない少女は、

「猫羽ちゃんが起きたら……………」

少女も子供に、色々話を聞きたいと思っていたのだが、

「……………起きたら、何だっけ？」

あれと。不意に途切れてしまった言葉に、自身で目を丸くする。

「……………」

そうした様子を、その寝所からは中庭を挟んで対面に位置する場所で、何故か縁側から少女の寝所を見つめる者の姿があり。

「……………大丈夫なのかな……………」

瑠璃色の髪の子供より外見は二つ程度年上の、黒髪の子供……………名立たる術師の家の公家の次男である、天才と呼ばれた術師の

子供が、物憂げに佇んでいたのだった。

思春期以降の年の者が寝付くには、さすがに早い時間のため、しばらくしてから赤い髪の少女は寢床を離れたが。

夜には再び同じ場所で眠ってくれたためか、赤い髪の少女を通して、瑠璃色の髪の子供は戸惑う程に——温かな夢に連続して襲われていた。

——……ええっ？ 子供だけで花火するの？

瑠璃色の髪の少女が現れる夢で、一番近い記憶と思われたのは。

京都の南、子供の自宅近くまで続くあの川辺の、昨夏くらいの出来事だった。

術師の家系に生まれ、人間ならぬ天上の血をひいた赤い髪の少女は、こんな程度の火と『力』で軽く火種を提供しつつ。

そう言えば——と、思い出したように少女は友人を見つめ、

——大丈夫？ 確かラピ、火の気は苦手だったでしょ？

実父を炎の獣に殺された瑠璃色の髪の少女は、それとは覚えていなくても、火を見る事を苦手としており、

——櫛もたまたま強引なんだから。無理に合わせる事ないのよ？——鋭い感性でそうした相手の弱味を、無意識に感じ取る事が多い術師の家系の少女が。これまではあえて声をかけていなかった、恒例の火の行事に、瑠璃色の髪の少女を誘ったのは——有無を言わせぬ笑顔で断りを封じた、帽子の少年だった。

瑠璃色の髪の少女は、ううんと嬉しそうに首を振り、

——断る——と思っただら伝話でも出来たし。こーやってみんなに、誘ってもらえることの方が嬉しいもん♪——

行事の内容は何であれ、彼らと共にいられる時間そのものを、心から喜ぶように。その後更に、気を使ってくれて有難うと、赤い髪の少女にまっすぐ笑いかけた。

瑠璃色の髪の少女は、基本的にはそうした直球な性質であり、

——……ラピは本当、いつも笑って済ますんだから——

照れ隠しに不服気に返してしまう、赤い髪の少女とは対照的な

……だからこそ気の合う友人といった様子で、

——そうだよねー。ラピちゃんいつも、笑っててエライよね♪——  
アンタが言うかと赤い髪の少女にツツコミを受ける、想像力が  
迸る場合を除き常に明るい少年の笑顔を、瑠璃色の髪の少女は  
……まるで映したいかのように、ずっと笑って見つめていた。

それでも彼らは、瑠璃色の髪の少女が微笑み続ける限りは、

立ち入れない領域がある事も何処かで感じており。

それも少女らしい姿なのだ……あえて踏み込む事はせず、  
そのままの在り方を受け入れて共に在った。

それがどれだけ、己の闇を抑えて生きた少女の救いだっただか  
——……泣き出しそうな温かさを、瑠璃色の髪の子供は知る。

赤い髪の少女の居室——つまり、最初に会った公家と侍の内、侍の家に世話になる事になった瑠璃色の髪の子供だった。

「……何だ？ またあの妹、鶯の部屋から消えたのか？」

「蒼は見えてない？ そっちで朝ご飯食べてるのかと思って」

朝が弱い子供を、同室の少女は無理には起こさず。そのためどうしても摂り損ねてしまう朝餉を寝所まで運ぶたび、部屋に入ると子供の姿が無いという状況が繰り返されており、

「今日は父上の膝にもいなかった。と言うより、父上が仕事で朝餉が一緒に出来なかった」

そして何故か、公家の一家の方で、公家が残しておいてくれた食事を僅かばかり公家の膝の上でつまむのが、その子供の朝の日常化していた。

もーっと心配そうに唸る赤い髪の少女に、従兄である剣士の少年は、納得したようにうんうんと無表情に頷く。

「さすがラピの妹だな。気が付けばいない所とかそっくりだ」

「ラピのは何て言うか放浪癖だけど、あのコは大体頼也さんを探してるんじゃない」

「……それ、そんなに違うものなのか？」

気ままに行動するという点で、変わらないように見えるらしい従兄に、全然違うわよと感性の強い少女は不服気に返す。

そんな、自身について話す者達の遣り取りを感じながらも、今日も今日とて、気ままな子供は公家の姿を探す。

「……今は、ダメみたい」

現状把握に優れる子供には、穏やかで優しい公家が現在構ってくれやすい状況か、子供がうろつく場所が客人でも立ち入って良い領域かなど、何となくわかる強味は大きく。

自由気ままに過ごしながらも、特に大きな問題も起こさず、早くも新生活に適応しつつある子供だった。

公家がそうして忙しそうなのは、普段なら赤い髪の少女に引っ付いている子供なのだが、

「……あれ」

近くに訪れた無視できない気配に、登っていた木からひよいと、着物にぬいぐるみを抱えた状態で危なげなく降り立った。

とことごと、御所の正門まで一人で出向いた子供の前には、

「おはよう、エルフィ。元気にしてた？」

慣れ親しんだ相手の来訪に、うんと子供は嬉しそうに微笑み。

「——猫羽ちゃん？」

その強い『魔』の気配を、隠そうともしていない紅い少女に……子供がこの御所に来た日、姿は見ずとも付き添いの気配は覚えていた赤い髪の少女が出てきた事を、紅い少女は確認し。

「初めまして。竜牙水火と申します……山科鶯さん？」

少し前に一度出会ったはずの、不審な相手の虚ろな微笑みに、赤い髪の少女の瞬時の警戒を子供は感じ取っていた。

『守護者』と呼ばれ、世界で四人しかいない強大な『力』を持つ秘宝を守る者の一人が、この御所の公家であるとは子供は知っていたが。

その守護者に対抗出来る程の、強い悪魔の情報から造られた紅い少女に、赤い髪の少女の警戒心も当然と感じつつも……。

「今日はエルフィのおもちゃを持ってきたの。ピアス一つじゃ寂しいかと思って」

「……はあ」

あまりに平和な来訪目的を口にする紅い少女に、拍子抜けしたような赤い髪の少女は、広い庭園内の休憩所の一つに腰掛け。持参したいくつかの道具を、紅い少女がそこで広げる。

「——あれ？ これ……」

しかし出された小さな二つの道具の、二つは赤い髪の少女には見過ごせる物ではなく、

「ラピのPHS……と、アンテナ？」

少し前まで、友人が使っていたはずの通信道具が二つの道具に分離され、そこにある不思議に眉を顰めた。

にこにこ紅い少女は、黙って成り行きを見守るものの。

予想通り、やはり赤い髪の少女は——何故その道具がそこにあるのか、疑問を口にするに至らず、道具に関心を失くす。

「水火……これは、どう使うの？」

PHSの本体とアンテナ、そして後一つは大きな珠玉を填める、巨大な指輪のような形状の道具に、子供は首を傾げた。

「エルフィはあんまり、複雑な道具は得意じゃないのね」  
くすりと少女は、アンテナ以外を子供へと手渡し、

「烙人が直して、改良してくれたから、普通のPHSとしても使えるし。わたしがこつちを持ってば、エルフィの声がわたしに届くし、わたしの声や情報もエルフィに届くんだって」

元は壊れ物のPHSを持つ子供に、紅い少女はアンテナの方を手にして嬉しそうに微笑む。

「……？」

使った事はないものの、PHSとはそういう物だっけ？ と、赤い髪の少女は不思議そうに目を丸くする。

「こつちには、ピアスの中の珠を移し変えろと言っていたわ」  
残る一つの道具を手取る紅い少女に、子供はこくりと頷くと、抱えていたぬいぐるみの後ろ頭を、数個のボタンを外して開け、中から漆黒の珠玉を取り出した。

「本命が出来上がるまでは、しばらくこつちに入れておいて、小さくしておくといいみたいよ」

珠玉を受け取った紅い少女は、巨大な指輪にそれを詰め込み。

そして紅い少女の手から僅かな光を受けた指輪は、次の瞬間淡い光を発し……まるで猫の首輪のように小型化していた。

「ほら。よく似合うわよ、エルフィ」

「……………」

そして首輪を、そのまま子供に取り付けた紅い少女に、目前で何が起きているか全くわからなかった赤い髪の少女は、呆気にとられるしかなく。

巨大な指輪に元々ついていた適当な碧玉を、代りに灰色猫の頭に戻した子供に、紅い少女は意味ありげな微笑みを見せた。

「ピアスもPHSも。後は、エルフィの特技にも使えばどう？」

「……………」

紅い少女が何を言わんとしているか、その場でわかったのは——その時は、現状把握に優れた子供だけではなかった。

「…………その二つの依り代を、何に使うんですか？」

場に唐突に、幼いながら凜とした聡明な声色が響き、

「随分——不穏な気の持ち主だな、あんたは」

その声の主に付き添ってきた、常なる守り手の声の主の兄に、

「蒼に……悠夜？」

赤い髪の少女が目を丸くして、警戒に溢れる様相で場に現れた、二人の従兄弟の方を見た。

「……………」

こうなる事がわかっていたため、先日も早々に御所を引き上げ、鋭い力の主との長い対峙を避けた紅い少女は、くすりと微笑む。

強い力を持った、守護者たる公家の次男で、十歳未満にして既に大人顔負けの術師である黒髪の子供は、

「父上から——貴女達が不穏事に踏み込まぬよう、父上の目が届かない時には代りに気を配るように仰せつかっています」  
場に現れた目的を、子供とは思えない理知的な表情と声色で、まるで諭すように紅い少女に告げる。

呆然としつつも状況を窺う赤い髪の少女と、その隣に座り、黙ったままの瑠璃色の髪の幼い子供を横目に、

「あら。エルフィが自分を守るようにするのは、いけない？」  
紅い少女は悪びれもなく、術師の子供とその背後にいる剣士の少年を、虚ろな紅い目で見据えた。

「呪術や剣は良くても、悪魔はダメ？ 強そうな呪術師さん」

「道具も力も使い手次第でしょう。貴女達の動向を気にされていたのは、他ならぬ貴女達の保護者の方ですよ」

「…………もう。レイアスつてば、余計な事を言っていくんだから」  
少し前にこの御所で公家と話をしたはずの、基本的に慎重な義理の兄を思い出してか、紅い少女はつまらなさそうにし。

そしてそこで——紅い少女は自ら、その事実を明るみに出す。

「数多なる悪魔との契約者——人形使いの再来は、そんなにも警戒されるべき事なのかしら」

既に公家から事実を伝えられていた公家の子供達は、きらりと魔性の紅い目を光らせた少女に、厳しい視線を向けた。

「……猫羽ちゃん？」

「……………」

術師の子供の厳しい視線に、少しだけ身を硬くした幼い子供に、

「悠夜達が言っているのは……猫羽ちゃんのこと？」

子供をまっすぐ見つめ、赤い髪の少女は――

子供の両手をそつと握り、怯えさせないように平静な表情を保ったままで、その先を凜と問いかけた。

「ユーオンがこの御所に、初めて来た時……蒼と悠夜を襲った、正体のよくわからない人形がいたの」

「……………」

「頼也さんは、人形の使い手はユーオンの知り合いで、だからユーオンが危ないと言われてたけど。それは――猫羽ちゃんのことだったの？」

幼い子供と寝食を共にし、一週間に満たない状態であっても、その子供の類稀な勘の良さと、人間の幼子らしからぬ落ち着き、そして常に抱えるぬいぐるみの内に存在する非常な力の気配に、術師の一人である赤い髪の少女は当然気が付いていた。

幼い子供はただ――赤い髪の少女の目をまっすぐ見つめ返し、

「……うん。わたしは――……兄さんに会いたくて、ずっと、

悪魔の力を借りて……悪魔のことを、教えられていたよ」

その兄によく似た、無機質で自然な無表情で、現実を口にした。

瑠璃色の髪の少女の妹という子供が、何故そこまで姉でなく

兄を求め……そのような力を持ち、悪魔の元になどいたのか。

そもそも八年前に両親を失った瑠璃色の髪の少女に、六歳の妹がいるという、有り得ない状況が存在する事にも関わらず。

そうした様々な――噛み合わせの妙な状況が入り乱れる事は、思い至れないようにされた者達がいる前で。

「ユーオンに会いたくて……どうして蒼と悠夜を襲ったの？」

赤い髪の少女は、今も何処かで心配していた金色の髪の少年と、同じ危うさを持ったような幼い子供に真摯に問いかける。

「兄さんを探すことを手伝ってくれた悪魔が……悪魔の間を探すのを手伝ってほしいって、わたしに頼んだから」

「……………」

金色の髪の少年から、その敵は強い力を持った相手を求めていると、自身も注意するように促されていた少女は。

ただ痛まじげな、青みがかった黒い目で子供を見つめた。

傍らのその遣り取りを、黙って見守った術師の子供の横で、

「その件は決着がついたようだと、父上は言われていた。もう過ぎた事だし、悠夜も俺も、今更どうこう言う気はない」

冷静ながら溜め息をつくように、幼い子供に目を向けて言った。

「でもそいつ――ユーオンの妹がまた悪魔に唆されないようにと、父上は心配されてる」

「あら。その悪魔というのは、わたしの事かしら？」

にこやかに剣士の少年を見た紅い少女に、少年は一段と厳しい目線を返す。

「そこが曲者だ——父上もあなたについては、加害者になれる被害者だと、難しい顔をされていた」

「ふうん。レイアスはいったい、わたし達についてどんな風に、何処まで貴方達のお父様に話したのかしらね」

鋭い感性を持った術師一族と、近いようで異なる鋭さを持つ紅い少女は——自身も一度ならず、幼い子供の手で人形化した

『魔』であり、その事変に巻き込まれた側だったが。

「じゃ、わたしがエルフィから離れるか、わたしがエルフィを連れて帰れば……貴方達は満足？」

「……水火」

少しだけ顔を顰めて紅い少女を見た幼い子供に、ひらひらと、紅い少女は余裕そうに手を振った。

あくまで冷静な術師の子供は、いいえとあっさり回答すると、「悪魔召喚の依り代になり得るような物は、預からせて下さい。

貴女達に悪意が無くても、利用される可能性もあります」

目前の相手は、人間と『魔』のどちらも純度の高い存在であること……それ故の危うさを憂慮する深い黒の目で、紅い少女と

幼い子供を見つめた。

「……………」

紅い少女が黙る傍ら、そこで初めて幼い子供は俯き、

「これは……………お姉ちゃん達の……………」

アンテナの無いPHSと、灰色の猫のぬいぐるみをどちらも、ひしと抱き締め。その両方が、幼い子供にとっては大切な物であるのだと示して余りあった。

幼い子供の、その空気のあまりの心許なさに、術師の子供は少しだけバツが悪そうな顔付きとなり、

「それなら……………決してその依り代を悪用しないと、ここで約束して下さい」

「……………」

父である公家から、ただその拙い子供を守ってやってほしいと頼まれた彼らにとって、子供を悲しませる事は本意ではなく。

その厚意を確実に、幼い子供は感じ取っていないながらも——

「……………これが必要なことが、あるかもしれない……………」

己の能力を使わない約束は出来ないと、誠実に答えるしもなく。

そこですつと紅い少女が、幼い子供と彼らの間に無表情かつ

無言で、完全な敵対を示すように立ちはだかり。

「……………」

剣士の少年も前に出て、厳しい表情で紅い少女と睨み合う。

そんな緊迫した空気が、その一帯を支配した直後に。

「こんにちはー！ 蒼ちゃん鶉ちゃん悠夜君、おっはよー！」

場に響いた緊張感の欠片も無い声に、思わずがくつと姿勢を崩しかけた、公家の子供二人と紅い少女だった。

御所を訪れ、友人達のいる休憩所まですぐ辿り着いた帽子の少年は、睨み合う剣士の少年と紅い少女に不思議そうに笑った。

「あれ？ 竜牙さんと蒼ちゃん、何か大事な話し合い中？」

「榎……どう見ても真剣な闘志と殺気だから」

呆れる赤い髪の少女に、うんうんと術師の子供も強く頷き、

「兄様の闘気はともかく、こんなにあからさまな殺気に鈍いと、榎の普段の危機管理が心配だよね」

紅い少女への警戒態勢は解かないながら、少しだけ気が抜けた声色で心配げに呟いた。

「水火……」

幼い子供の譲れない意向を反映している、紅い少女の無機質な後ろ姿に、子供は何も言うことが出来ず、

「……幻次さんの言う通り、相当な剣気の持ち主と見た」

雑念無き相手の眼光に、剣士の少年は、見直したような表情で僅かに不敵に笑った。

その剣士の高揚を、親友を自称する帽子の少年は見逃さず、

「——ダメだよ蒼ちゃん！ か弱くてキレイな女の子相手に！」

こらーっと睨み合う二人の間に割って入った者に、またも剣士二人はがくぐくと集中を途切れさせる。

「こんなにキレイな竜牙さんのお肌に、万一傷でもつけたら、蒼ちゃんはこの先責任とれるの！？ 女の子には一生問題だよ、そもそもか弱い女の子相手に喧嘩を売るなんてダメだよ！」

「つて、剣士に男も女も関係ないだろ、榎……」

「……か弱い、ねえ……」

自らの武器を携帯型にした腕輪を、もう少しで取出す所だった紅い少女はフウと息をつくが、

「竜牙さんも竜牙さんだよ！ 蒼ちゃんはちゃんと話が出来るとヒトだから、何か事情があるなら睨まずに話してあげてよ！」

「……」

深刻さは無いながら、真剣に言っているような帽子の少年を、キョトンとした様子で紅い少女は見つめ返した。

そうですねと、術師の子供も溜息をつくように口にし、

「話し合いはまだ終わってません。荒事に訴えずに、お互いの納得のいく道を探しませんか？」

「……うーん……でもねえ……」

紅い少女はそこでようやく、少しだけ困ったように目を細め、  
「説明出来るなら苦労しないと言うか……わたしもエルフィも、貴方達にこれ以上言えない圧力が、ずっとあるのよね」

圧力がある事は自覚出来ても、その障害は直接に紅い少女達を侵していないため、却って払い除けられない中途半端さだった。

「……」

紅い少女の言に、術師の子供は、何故か僅かに息を飲み。



そんな空気を物ともせず、あっさり帽子の少年は尋ねる。

「ところで今日は何で、竜牙さんは御所に？ 猫羽ちゃんの事、心配だったの？」

「……………」

黙り込む紅い少女に、ちょうどいいやと帽子の少年は、懐から何かの包みを取り出した。

「これ、烙人さんに良かったら渡してくれる？ 頼まれてた分、出来上がりでしたからって」

「……………ありがとう。調子良くなさそうだから、きつと喜ぶわ」

その遣り取りを見て、赤い髪の少女が不思議そうにする。

「そうよね……………元は櫛の友達とラピの妹を私達に紹介するって、それで二人は御所に来たのよね」

成り行きでその内一人が御所に留まる事になったのは、公家が紅い少女達の保護者と、その前に話をしていたからだが、

「でもまるで……………あのコと猫羽ちゃんには、この御所で何か、やりたい事があるみたいな感じ」

「……………」

「あのコは猫羽ちゃんを守りたいだけみたいだけど、それなら最初から一緒に御所にいるか……………自宅を留守に出来ないなら、

二人共断るかよね、何もなければ」

公家が提案する前から、そもそも帽子の少年や、その友人達に会いたいと思っていた幼い子供に気付くかのように。赤い髪の少女は真面目な顔で、黙って見上げる子供を見つめる。

「猫羽ちゃんはどうして……………ここにしようと思ったの？」

「……………」

初対面の公家にその場で懐き、この場所が滞在に適するという判断はあくまで後押しであり、

「……………ツグミ達に、会いたかったの」

本来の目的を忘れていなかった子供は、誠実にそれを口にした。

「ラピスの友達に……………ラピスに、会いたい……………」

瑠璃色の髪の少女の不在を、その友人達に気付かせる挙動は、あくまで制限されている中で……………それだけは譲れない事柄と、自身の思いの強さを示すように。

「……………」

幼い子供の、そのまつすぐな思いに……………黙って様子を見ていた術師の子供は、一人ぎゅつと両手を握り締める。

「ラピちゃんに……………会いたい……………」

最も身近な存在……………妹であるはずの子供の不自然な発言を、最もよく連絡をとった間柄の帽子の少年は聞き逃さず、

「ラピスを探すの……………手伝って、ほしいの……………」

子供のその声が、彼らから消されてしまう前に、

「もしかして猫羽ちゃんも……………魔界に行きたいの？」

瑠璃色の髪の少女の事だけでなく、その場に集まった彼らには別の意味で無視できない……………そのため消えない単語を口にした。

ちよつと——と、帽子の少年の口から出された物騒な単語に、赤い髪の少女が血相を変える。

「魔界ってどういう事？ 欄」

「え？ ……あれ？ ラピちゃんがこないだ、お母さんの所に行くって話してたの、鵜ちゃん達に言っただけじゃなかったっけ？」

「それは妹がいるって話の時に聞いたけど……お母様が魔界に行かれたなんて聞いてないわ」

その養母は養女の友人と、帽子の少年を含めて顔見知りであり、

「えー。鵜ちゃんは魔界って何処か知ってるの？」

そもそもその単語がよくわからなかったらしい帽子の少年は、平和に笑いながら尋ね、剣士の少年も淡々と口を挟む。

「鵜は聞いてなかったのか？ ユオンは魔界に母君を迎えに行ったらしいと、父上は仰ってたぞ」

「ええ！？ アイツこの間来た時、そんな事何も言っただけ！」

金色の髪の少年が養父と公家に会いに来た時に、少年と唯一、顔を合わせていた赤い髪の少女は憤慨するように、気楽そうな男子陣を睨みつける。

「魔界って言えば要するに、悪魔の巣窟、所謂地獄でしょ！？ 何て所行ってるのよ、お母様もユオンも、それにラピまで！」

「ええーっ！？ そーなの、鵜ちゃん！？」

「そんなの猫羽ちゃんが心配して当たり前でしょう！ だから猫羽ちゃん、悪魔の力を借りたいなんて思ってる？」

「……………」

こくりと頷いた幼い子供に、頭痛を抑えるように、片手で頭を抱えた赤い髪の少女だった。

赤い髪の少女は、そして現状に至った問題に立ち返る。

「私達が何か手伝えれば、猫羽ちゃんには悪魔は必要なの？」

しばらく考え込んだ後に、躊躇いがちに幼い子供は頷いた。

「ラピスに……帰って来てって、言いたいの」

「そうだよ、鵜ちゃんがそれだけ言うなら、怖い所だよ」

「ユオンはともかく、ラピまで行く必要があるのかって話だな」

瑠璃色の髪の少女と同年の子供達は、揃って頷き、

「でも、何かの方法で言うにしても、ラピはそれで帰るかしら？」

「……………」

少し遠巻きに様子を見ていた、紅い少女と術師の子供は、くすりと尋ねる紅い少女に、術師の子供は僅かに目を伏せ、何処か痛ましげにしている事に少女は気が付いており、

そうした敏い者達の姿を、瑠璃色の髪の子供は無表情に——最も強く意識を向けながら、感じ続けていたのだった。

\*

瑠璃色の髪の子供の指示待ちという紅い少女は、それから程無くして御所を後にし。

赤い髪の少女や剣士の少年、帽子の少年は、魔界という所について調べてみると、連れ立って書庫に行ったようだった。

「そうか……お主の事について、子供達と、早くもそのような話をしたのか」

朝から仕事のあった公家が、ようやく手が空いた頃を狙い。タイミングばっちりで見れた子供を膝に、公家は困ったような顔付きで笑いかけた。

「言い難かったじゃろう？ 蒼潤と悠夜を襲った事を、正直に認めるのは」

「……………うん」

公家の膝を、うつ伏せの時に腕と胸の下にひく枕のようにして引つ付いた子供は、顔を伏せながら素直な心を口にした。

「ツグミに嫌われるかなと思った……でも、ヨリやお父さんも、ユウヤも……わたしがここに来た時から知っていたもの」

「検殿から既に、話は聞いておったしのう」

先日から子供を新たに養女としてくれた養父は、公家の元を訪れる前に子供のジパング滞在登録も済ませ、なるべく子供が肩身の狭い思いをしないよう、取り計らってくれており。

「ユウヤはまだ、わたしの事、許してくれそうにないけど……ヨリやお父さんが怒らないのは、父さんが話してくれたから？」  
実の子供を、悪魔の憑いた人形に襲われていた公家が。

それでも使い手だった子供を責めずに、受け入れてくれた事……真つ先にその驚くべき現状を感じ、そのため公家にすぐに一番懐いた子供は、しかし公家のそうした寛容さの理由まではわからなかった。

「それもあるが……お主の姿を見れば、ただ寂しかっただけの、ユーオン殿と同じく直向きで不幸な子供であったことはわかる。それはおそらく、悠夜もわかっておるよ」

責められるべきは子供自身ではなく、子供をそこに追い込んだ者達だと、痛ましげにする公家だった。

「……………どうしたらユウヤは、許してくれるかな？」

術師の子供が自身に向ける、子供らしからぬ丁寧な口調——それは拒絶と感じていた子供は、悩ましげに公家を見上げ。

ある目的で、赤い髪の少女達だけでなく、その術師の子供と一番話をしたかった子供に、そんな思惑を知る由も無い公家は再び困ったように微笑む。

「悠夜は、許していいいのではないのでなくて、繊細な子なんじゃよ。身内の者をとて大切に思っている分、外来の者には、それが安全と確信出来るまでは中々心を許せないのじゃ」

そしてその身内に、身内以上に始終引つ付く無礼な新参者には、中々打ち解けられない息子の複雑な思いも察している公家は、遠慮なく甘える子供の頭を笑ってくしやりと撫でた。

「それに……お主達のように重い事情を背負った者には、傍にいと心が痛んで辛いんじゃない？」

「……？」

「なまじ賢い子である分、悠夜は自身の限界もよく知っておる。それでも本当は、助けたいと思っっている優しい子じゃからな」

「……………」

手を貸せる力の限界以上に、周囲の悲鳴が見えてしまう者には、それは辛い事であると。救われない人形の使い手だった子供も覚えのある事を口にする公家に、子供は俯いた。

「お主の関わった此度の事変には、わしも無関係ではなかった。

もう少しユーオン殿の助けになりたかったが、ユーオン殿は、一人で消えない責苦を背負ってしまったようじゃ」

元は公家がこの御所に保護していた金色の髪少年が、その事変で公家の旧い仲間と敵対し、その相手を害した事で大きな負い目を公家達に感じていると、公家は伝えられていた。

「竜牙殿の事も検殿は心配されていてな。これまでの居場所を失った竜牙殿には現在、お主を守る事しか抛り所がないと——まだ、以前の自身を取り戻す程の強い思いが持っていないと、検殿は気付かれておったよ」

ジパングの南に位置する島に住む、公家の旧い仲間の姪とも言える血を持つ紅い少女は——しかし人造の人形であることをその事変で知ったため、帰る場所を見出せないでいると。

危うげで幸薄い者を間近で感じながら、結局は見守る事しか出来ないもどかしさは、公家も同じであるようだった。

「……………」

人形である事を楽しむ紅い少女は、人形にしかないと、自身を諦め切っている事を——

誰かの羽から得た知識と理性で行動する以外は、大切な者の人形になる事が喜びの、ヒトを思う外向きの心を何とか持てた空虚な生き物に。それを知っていた子供は何も言えなかった。

公家の膝に上半身を任せながら、黙り込んで俯いてしまった子供の頭を、公家が黙って撫でていた時に。

「……父上。少し——ご相談しても良いでしょうか？」

暗い障子の外からかかった、躊躇いがちな黒髪の子供の声に、ぴくりと反応した幼い子供は。公家の膝に両手をついて、体を起こして障子の方を見た。

「おお。ちょうど、悠夜の事も話しておったのじゃよ」

公家も嬉しそうに、声のした方向を見る。

「先客がおるが、それでも大丈夫かおう？」

「……はい。その方にも関わる事だと思えますので」

だからこそ、幼い子供が父の傍にいと承知した上で訪室した黒髪の子供は、ずっと障子を開けて静かに部屋に入って来た。

「……………」

じっと、キョトンとした顔で黒髪の子供を見つめる幼い子供に、黒髪の子供は不服そうながら憂い気な視線で応える。

何となく公家の膝から体を起こし、公家の傍らでちよこんと座った幼い子供の前で、公家の対面へと黒髪の子供は正座して落ち着く。

黒髪の子供は訪室の目的を、少し俯きながら切り出した。

「兄様達が——魔界について調べておられます」

「——ほう？」

「父上はご存じないと思いますが、僕も知っている、兄様達のご友人が……ユーオン君と一緒にここにいと伺ったんです」

黒髪の子供から出た意外な単語に、公家は目を丸くしつつも、

「幻次から聞いた事はあるが……検殿の最初の養女で猫羽殿の姉君という方の事かのう」

何故か厳しげな声色となった公家に、黒髪の子供も目を伏せ、

「ユーオン君が魔界に行ったという事は、僕も兄様も父上からお聞きしましたが……兄様達は、その方の事を心配しています」

「……………」

黒髪の子供が俯く理由を悟った公家は、自身も少し緊張の入るある理由を思い返し——憂い気に俯く実子の様子を、悲しげに見つめた。

そして公家は躊躇いがちに……それも幼い子供の保護者から、ちらりと聞いていた話を静かに口に出した。

「……検殿はこの度、大切な養女を亡くされたと伺った」

それが子供達の友人と同一の事を、確信した哀しみと共に。

「その件は、此度の事変に本質的に関わりは無いと言うが……ユーオン殿も竜牙殿も、それで沈み込んでしまわれていると、わしは聞いておる」

「……………」

辛そうに口にする公家の傍らで、公家はその事実を知っている事までわからなかった幼い子供は、思考の止まったような顔で公家を見上げる。

「その養女殿が、何故魔界にいるなどという話になったか——悠夜には何か、心当たりがあるのかのう？」

「……はい。けれどそれを……僕は兄様達に、何もお伝えする事が出来ないんです」

日中に、これ以上事情を説明する事が出来ないと言った、紅い少女以上に……鋭過ぎる霊的な感覚を持った黒髪の術師の子供には、強い制約が少し前から存在していた。

「神隠しと同位の霊障が、その方自身の願いで……兄様達からその方を消そうとしています」

「……………」

「その方に何かあったという事や、今その方がどうしているか、そうした話が、兄様達と出来なくなりました。それは——人の記憶を奪う神の力を流用出来る、強い何かの霊が……その方とその方の母上の霊の影響で、そう動いた結果だと思えます」

既にそこまで真相を掴んでいた鋭い術師は、ただ俯いた。

「それは……養女殿は、何故そのような事を願ったのじゃ？」  
養女の身内にはそうした霊障は無く、ここにいる子供達だけに  
起きている不自然さにも、公家は厳しい顔をする。

「突然に死した者に、そこまで昏い願いを持つ余裕があるとは思えぬ。神通を持つという霊も、わざわざ動く道理はなからう」

「……………」

公家のその言及は、避けられないとわかっていた子供は――

「その方は……猫羽さんと同じくらいの頃、既に亡くなられて  
いたんです」

兄の友人と初めて会った時から気付いていた、それでも子供の  
胸一つに収めていた長い秘密を、ようやく打ち明けた。

「それを、その方自身も含めて隠し通すために――僕も細部は  
わかりませんが、神や悪魔、様々な力が働いたみたいでした」

「……………」

黒髪の子供がそうした真相に気が付いている事を、最初から  
感じていた瑠璃色の髪の子供は。

今は黙り込んだまま、公家と黒髪の子供の相談の先を見守る。

「僕はその方のことについて……兄様達とどう接しているか、  
わからないんです」

「……ずっと一人で抱えておったのか、悠夜は」

公家に養女の養父から話があるまで、誰にも相談出来ずにいた  
我が子を思うように、公家は哀しげな目をした。

「気付けたのは悠夜だけとなると、鵜をも侵せる霊障であれば、  
相当強い力を持った霊の仕業じゃろうな」

それがどれだけ深刻な事態か、公家は既に悟っていた。

「悪魔も関わった事であれば、養女殿の魂が、魔界に囚われた  
可能性も無くはなからう」

「……はい」

その友人の死を思い至れない状態だとしても、友人を心配する  
子供達の思いも妥当だと、悩ましげに親子は頭を垂れる。

そこで不意に――

「でも……」

ずっと黙り、公家の傍らにいた幼い子供が、

「でもユウヤは……ラピスを助けてくれたよね？」

「……………」

既に気が付いていた、何よりも大きな一つの救いを――それを  
手伝ってくれた黒髪の子供を、潤んだ青の目で見つめながら、  
まっすぐ口にした。

「ラピスは――ユウヤのおかげで、クウにお別れを言ってる」

たとえ瑠璃色の髪の少女が長く不在であっても、それを説明  
出来る自然な理由……少女は母親の元にいると、無理に少女の  
存在を消さなくて良い別れを伝えられたのは、

「ユウヤがラピスを、呼び戻してくれたんだよね……？」

一度だけ、秘密裏に少女の降霊に成功していた、術師の子供の  
おかげであると。最大の感謝と共に明るみに出した。

「……………」

しかしその降霊と引き換えに——術師の子供は、少女とある約束を交わす事になった。

「本当の事は絶対に言わない……ユウヤは、ラピスからそう、お願いされた？」

「……………」

類稀な強い力を持った術師が、紅い少女や幼い子供と同様に、真相の片鱗を口に出さないでいるのは——神隠しに影響された紅い少女達とは違う理由と、幼い子供は看破する。

「猫羽殿……猫羽殿には、姉君を消そうとしている者が誰か、心当たりはあるのかのう？」

金色の髪の少年と似た、鋭い現状把握能力を持つ幼い子供に、少年のそれも知っていた公家は憂い気に尋ねた。

「あのヒトは……霊じゃなくて、ただの抜け殻だと思う」

少し前に直接対峙した相手の事を、幼い子供も憂い気に話す。

「ラピスの願いを叶える抜け殻……ラピスのお母さんの霊が、ずっと傍にいたから、霊みたいな抜け殻になってるけど」

「それではあくまで……それは養女殿の願いだと言うのか」

「うん……あのヒトはそれを叶えようとしてるだけ。ラピスは、忘れてもらうか、消えたのを気付かれないことを願ってる」

いつか消えゆく事を無意識に知っていた死者の、昏い望みに……同じ年頃の子供を持つ公家は、ただ沈痛を浮かべた。

「ユーオン殿や楡殿は、それには気付かれておるのか？」

「……キラ兄さんは、多分わかっている。父さんは……ラピスを無理に呼び戻そうとしたら、本当に消えちゃうと思ってる」

本来は呼び戻す事は不可能ではなかったはずの養女を諦めた、養父の無念さを子供は知っていた。

「キラ兄さんも水火も、ラピスの望みを叶えたいと思ってる。でもわたしは……」

金色の髪の少年の別名を口にしながら、幼い子供は、昼間にも伝えた思いを改めて具体的に表明する。

「悪魔になったラピスでいいから、ラピスに戻ってきてほしい」それが唯一——悪魔使いたる子供に観えていた、生きるために悪魔と契約した少女を呼び戻せる、一つの道筋だった。

「……………」

真摯に公家の事を見つめ、それを口にした幼い子供に。

公家はしばらく、痛まじげな顔付きで幼い子供をまっすぐに見つめ……哀しげに、静かにかぶりを振った。

「猫羽殿……死者を呼び戻すのは本来叶わぬ事であり——その摂理に逆らうなら、相応の歪みが再び死者を苦しめる事となる」

「……………」

「生きる力を持ちながら、身体を失った生者も稀に存在するが……猫羽殿の姉君に関しては、残念ながらそうとは思えぬ」

その少女の望みは、行き過ぎてはいるが間違っていないと。あくまで死者本人の苦しみを思い、公家はその先を続ける。

「たとえそれが誰かのためでも……良くない行いは、基本的にしてはいけないのじゃよ、猫羽殿」

「……………」

まっすぐ子供を見て諭す公家に、子供はぐつと口を引き結ぶ。

「その時はそれで良くとも、物事とはそれで終わりではない。

そこまで昏い望みを持つ程苦しまれた姉君を、猫羽殿がその先、ずっと支える事など出来はしない」

それは子供自身のためにもならないと、公家の深い黒の目には、守る側の痛みが湛えられて余りあった。

「猫羽殿もユーオン殿も、あまりに『今』が観え過ぎるため、どうしてもその点は後回しになってしまうようじゃが……」

そのために、死神や処刑人となる道を辿った危うき古い命に、まるで可能な限り歯止めをかけるように。

公家は改めて、実子の方を見つめた。

「不審な化生による霊障は、確かに解除する方法を考えた方が  
良いが。わしに何か手伝える事はあるか？ 悠夜」

「……父上……」

「蒼潤や鶴達が、友人を失った事と強引に向き合えないように  
されている方が残酷な事じゃろう。誰にとつても……出会いが  
ある限り、別れは避けられぬのじゃからな」

最早実子が、その解除に関われない状態であるなら、代わりに  
自身が動く——明らかにそう示している敏腕な術師の公家に。

黒髪の子供は、それは……と、再び辛そうに目を伏せた。

「……………ねえ」

始終神妙に話を聞いていた幼い子供は、話題を変えるように、  
不意にその問いを口にした。

「ヨリやお父さんも、ずっと言わないでいる事があるのに……  
ラピスの事は、言った方がいいの？」

「……………」

それはあくまで糾弾ではなく、ただ不思議そうに子供は尋ねる。

つい最近、子供が関わっていた事変の中で、公家の子供達を  
可愛がっていた旧い仲間が公家に背を向け。最後は行方不明と  
なったと教えられていた公家は、それは子供達に話しておらず。

「……そうした方が、あやつも帰ってきやすいじゃろう」

どちらかと言えば、自身や自身の子供達のためにではなく、  
旧い仲間のためである沈黙を、躊躇いがちに答えた公家だった。

「……………」

なるほど——公家の厚意自体には気付いていた幼い子供は、  
そこに確かな形を得られたように、納得気に頷いた。

そうした話を、ただ複雑そうに、公家の実子は見守っていた。

\*



不審な化生についての問題は、もう少し考えますと言って、黒髪の子供が父たる公家の居場所を退出した後の事だった。

「……え？」

「……………」

既に夕闇が訪れた暗い廊下を、きびきびと歩く小さな人影の後ろに、とことこと付いてきた更に小さな人影があり。

「……どうして、ついて来るんですか？」

「……………」

相談していた公家の隣に始終座り、それだけでなくとも公家の手が空いている時は常にべったりと公家に甘えている幼い子供に、立ち止まって黒髪の子供は難しい顔で振り返った。

「……………」

黒髪の子供の不可解そうな表情に、幼い子供は少し躊躇いがちなながらも、

「……………これ」

昼間に、黒髪の子供に没収されかけたPHSとぬいぐるみを、何故かそこでそつと差し出した。

黒髪の子供は、無表情な幼い子供を困ったような顔で見返し、  
「……大切な物じゃないんですか？」

「うん……でも、あると多分、使っちゃうから」

公家に諭された事が響いていたのか、力無く答える幼い子供に、尚更困ったような表情を黒髪の子供は浮かべる。

「普通の使い方も、わたしはわからないし……ユウヤの言う事、正しかったと思うから……」

ぬいぐるみはともかく、PHSのような近代の複雑道具は最早お手上げといった状態の幼い子供に。

はあ……と、黒髪の子供は、頭痛を抑えるように片手で頭を抱えながら溜息をついた。

「貴女は確かに……ユーオン君の妹さんですね」

「——？」

くるりと黒髪の子供は、そこで踵を返すと、

「……ちよつと来て下さい。こんな物の使い方は、貴女なら、一度説明があれば大丈夫です」

様々な意味を含めて言った相手に、幼い子供は一瞬目を丸くし。さつさと歩いていく黒髪の子供を、またとことこと追いかける瑠璃色の髪の子供だった。

黒髪の子供が足を向けたのは、少し前には金色の髪の少年が貸し与えられていた、飾り気も家具もほとんどない一室だった。

「……兄さんの匂いがする」

「好きな時に使って下さい。ここはずっと空き部屋ですから」  
淡々と言う黒髪の子供の意図に、あれ。と、幼い子供はやはり目を丸くする。

「ここなら……悪魔、呼んでいいの？」

「ごく低級で気付かれない範囲なら。その二つの依り代には、それで充分でしょうし」

黒髪の子供は、部屋の灯りの近くに座した後で、灰色の猫のぬいぐるみとPHSの内、まずはぬいぐるみを手にとった。

「こちらの依り代はまさに、使い魔向きだと思います。自力で動けそうだから、簡単なお使いなら可能でしょうし、見たもの、聞いたものの情報を、主人に送る事も出来ると思います」

「……………」

「PHSは既に、少し特殊ですね。伝波系の悪魔を探した方が良いと思います。上手くいけば、アンテナを持った人や主人である貴女の声をこれに喋らせて、これを預けた人に伝える事も出来そうですし。アンテナからの情報や、貴女が見たものを、画面に映す事も出来るかもしれません。普通にPHSとして、梱とか、他にPHSを持つ人とお話も出来ると思います」

「……………」

幼い子供はまさに、ぽかーん……………といった様相で。てきぱきと、個々の道具の特性を考えた使い道と、操作法まで教えてくれる黒髪の子供を、まじまじと見つめる事になり。

「……………」

ただひたすら、尊敬。といった顔で、きらきらとすらした目で、黒髪の子供を見つめる幼い子供に。

「……………だから、道具も力も、使いようなんです」

何故か少し不服気にそっぽを向き、ぬいぐるみとPHSを幼い子供に返しながら、冷静に言う術師の子供だった。

「でも何で……………悪魔、呼んでいいの？」

根本的な疑問に立ち返った幼い子供に、術師の子供は少しだけバツが悪そうにしながら、

「どうせ呼ぶなら、害の少ないものにしてもらいたいですし。思ってたより貴女は、理非の判断も出来そうですし……………貴女に何かあれば、ユーオン君が悲しむと思いますから」

悪用さえしないなら、なるべく自衛の手段を持つにこした事はないと、物分りの良い幼い子供の姿に術師の子供は少し見方を変えたようだった。

そして——と。

黒髪の子供は物憂げな顔で、対面に座る、指輪のような形の首輪をつけた着物姿の幼い子供に、静かに切り出した。

「貴女がユーオン君と同じような、直観の持ち主なら……………あの、兄様達の記憶を奪うヒトへの対抗策はわかりませんか？」

「……………」

「貴女はあのヒトの事を、抜け殻だと言いましたが……………本当に、あのヒトが何者なのか、僕にもさっぱりわからないんです」

その空ろな相手は、そもそも本質そのものが無いのだと——無意識の領域、対象の本質……………心霊という存在を見ることを主とする霊的な感覚の持ち主には、天敵に近い相手であると、改めて幼い子供は何となく納得する。

「そんな状態で父上の手を煩わせれば、父上にまで何か、害があつてもおかしくありません。少なくとも父上に、相当大きな負担になる事は間違いないですし……」

それならなるべく、先に策を練っておきたいと、黒髪の子供は……父親がそれを決して放置しないとわかるために、なりふりかまわず情報を集める気になったようだった。

優しい公家に、あまり負担をかけたくない思いは同じだった幼い子供は、

「あのヒトは多分……記憶を奪う神様の一部だったヒトで……」

真剣に考え込みつつ、イメージを伝える言葉を必死に探す。

「神様から追い出されて、生きてないから、死ぬこともなくて……殺すことも出来ないと思う」

「——殺さないと霊障の解除は出来ないますか？」

う。という顔で反応した黒髪の子供に、ううん？ と、物騒な単語を平気で口にした幼い子供は、あっさり首を横に振る。

「ラピスが願いを変えるか、あのヒトの気が変われば、すぐに何もなくなると思うけど……あのヒト自体を消しちゃうのが、多分一番簡単だと思う」

その化生が使う躰は元々、弱小な人間の女に過ぎず。

中身を滅ぼす事は出来ずとも、霊障を引き起こす媒体の躰を抹消する事は出来ると、旧き処刑人は淡々と口にする。

「あのヒトは剣でしか戦えないし、それも人間の力で、受身が基本だと思うから……力があつたヒトなら、すぐに消せると思う」

「それはあくまで絶対、最悪の手段ですけど。あのヒトは——人間なんですか？」

「あのヒトの躰は、ラピスのお母さんのだよ。だからずっと、お母さんの霊と一緒にいたんだよ」

……と。幼い子供の無情さの理由に、そこで思い至ったように、黒髪の子供は厳しい表情を少し柔らかくした。

「それじゃ、抜け殻というのは……命無き死体が、どうしてか動き回つてるといふことですか？」

「あ、そっか……そう言えば良かったんだ」  
いわゆるゾンビやキョンシーの類ですかと、幼い子供には理解

不能な単語を黒髪の子供は口にする。  
「魂魄の魄が不自然に残り、死鬼化する形で命を無くした……

魔に殺されたか、自ら命を絶つたヒトなんですね」  
「うん。ラピスのお母さんは、ラピスを殺して、その後自分で

死んじゃつた気がする」  
……と。その悲愴で痛ましい事実、黒髪の子供は再び表情を

険しく厳しくした。  
「……色んな霊は見てきましたけど……霊として害はないのに、

そんな酷い事をして亡くなったヒトもいるんですね」  
本質的に悪意は見られなかった、以前から見えていた心霊に、

「ラピスのためだと思つて、そうしたんだと思うよ」  
意外そうな相手に、さらりと狂気を伝える幼い子供だった。

「それじゃ……死鬼化した死体を乗っ取ったのが、記憶を奪う神の力を使える、謎のヒトって事ですよね」

「中のヒトも命はないから、ユウヤ達の目でもどんなヒトかはわからないと思う。魂だけ、に近いのかな……？」

すっかり作戦会議の様相を呈してきた状況で、そこではっと、黒髪の子供は大事なことに気付き、

「そう言えばどうして貴女は……ユーン君と同じ、そこまで色々わかる直観を持ってるんですか？」

瑠璃色の髪の子供は本来、瑠璃色の髪の少女と生き写しの妹であるはずと、今更のように思い至る。

「ユーン君とラピさんは、血は繋がってないですよね？」  
そもそもからして、人間と化け物という違いのある者達を思い、

怪訝な顔で幼い子供を見つめる黒髪の子供は、

「まさか貴女は……ラピさんの……」

「……うん。わたしの躰は……ラピスがわたしにくれた躰だよ」  
その鋭い術師の子供には、隠し通せることではないと。

何の制限も存在しない中、幼い子供は少しだけ物憂げな顔で、まっすぐに術師の子供を見つめて現実を口にした。

「兄さんがわたしを見つけてくれて——ラピスが消えちゃって。だからラピスの躰を、わたしがもらう事になったよ」

「……………」

それが決して、祝福を受ける事ではないと知りながらも……  
負い目は窺わせない、確固とした口調の幼い子供であり。

「ラピスはわたしを助けてくれたから……わたしもラピスの、助けになりたい」

だからただ、その瑠璃色の髪の少女の幸薄さが辛いと——

物憂げに俯いた幼い子供に。黒髪の子供は複雑さを持って余す表情で、かなり長い間考え込む事となった。

そして黒髪の子供が、再び顔を上げた時には——

ある決意と共に、凜とした力強さを深い黒の目に湛えており。

「ラピさんがもし、思い直してくれたら……あのヒトの霊障も、解決出来ることなんですよね？」

「……………」

「もしかしたら——魔界からラピさんを呼べるかもしれません」  
自身の持つ力——呪術的な知識と、悪魔の使役に長ける者の二つの力を合わせれば。悪魔に魂を奪われた、魂だけの状態の相手に働きかける事が出来ると……確かにその深い黒の目は、幼い子供に訴えかけてきていた。

幼い子供はまるで、時間が止まったように、呼吸すらも忘れ、

「ラピスに……会えるの？」

黒髪の子供をじっと見つめながら、息を飲んでそれを尋ねた。

「確証はないですけど……試してみる価値はあります」

そして真剣な顔の術師は何故か——場所を変えましよう。その空虚な和室を、幼い子供を連れて後にしたのだった。

黒髪の子供と瑠璃色の髪の子供が、かなり苦勞し辿り着いた、目的とした場所は——何故か、御所の一角の屋根の上であり。

「……寒い……」

ぶるりと、着物の袖に両手を隠して呟く幼い子供に、

「使つて下さい。屋根が寒いのはわかりきってますから」

行き道のいったい何処で入手したのか、羽織れる物をあつさり手渡す行き届いた相手に、幼い子供はまたもぼかーんと尊敬の眼差しを向ける。

そしてもう一枚、かなり大きな薄布を畳まれた状態から広げ、

「これに、貴女が知ってる悪魔召喚の方陣は描けますか？」

「……うん、多分」

黒髪の子供から墨と筆を手渡された幼い子供は、感心気に頷き、

「ちよつとゴツゴツしてるから、時間かかると思うよ……」

瓦の屋根に布を敷き、地面に落書きをするように、円陣に近い模様を描き始めた。

「僕も気付かれない結界を考えますから、慌ててもらわないで大丈夫です」

「……それ、ユウヤがすると、しんどいと思うよ」

「？」

地面に向かいつつ、幼い子供は黒髪の子供をちらりと見上げる。

「気付かれないようにするの……多分、わたしも出来る」

「え？」

「それより、こっちの魔方阵……ユウヤが使つてくれた方が、いいと思う。ユウヤは人間の血沢山あるから、出来ると思う」

術師の黒髪の子供から、その屋根に來た目的を行く道で説明されていた幼い子供は、

「魂呼たまよびっていうのと、悪魔召喚、一緒にするんだよね？」

どちらも魔道ではある、呪術と魔術の合わせ技を提案してきた相手に、心強そうに尋ねる。

「ええ。貴女が元はラピさんなら、それ程強い縁のある媒介もありませんし、魂呼に加えて魂鎮の対象としても適応出来ます」

「二人でしたら、わたしは一つでも、違うものがくるかも……」  
いずれの媒介としても幼い子供の躰を使い、二つの魔道を同時起動して強い縁を持つ相手と呼ぶという案に、

「それは確かに、僕が両方するのが理には適いますけど……」  
基本的に体力に非常に乏しい黒髪の子供は、それでは本当に、それしか出来なくなると不服気な顔をする。

「結界もしんどいよ……わたし、ヨリヤお父さんには絶対に、気付かれないように出来るから」

「……？」

髪を束ねる黒いリボンを触りながら、何故か確信を持って言う幼い子供に、それを一番懸念していた黒髪の子供は、不服気でありながらも渋々頷き。

二つ以上の魔道、しかも未経験の別分野の術を同時起動する事も十分に可能な、優れ過ぎた幼き術師の子供だった。

魔方陣の準備が整うと、その中心に幼い子供をしかと立たせ、術師の子供は最終確認に入った。

「それでは——そちらの気配隠しも、大丈夫ですか？」

「……うん。誰ももう、多分覚えられない」

え。と、聞き捨てならない事を口にする相手を、術師の子供は怪訝な目で見つめるが、

「ラピスに会えて、話が出来たら……わたしも、どうするのか決められると思う」

公家にしみじみと温かく諭された事で、迷いを持ち始めていた気ままな子供の悲しげな表情に、それ以上術師の子供は糾弾を続ける事も出来ず。

そして——

死者の蘇生を願い魂を呼ぶ呪われし術と、人間にのみ可能な縁の強い魔を呼び出す秘儀を一同に介した奇跡の力を。

何一つ隙もなく、確実にその——一部では魔王と囁かれる程、強い天性を持った術師の子供による、危なげない起動に。

「……え？」

「……あ」

魔方陣から激しく強い、紅い光が一瞬放たれた後……——  
一部では魔王と囁かれる程の、強い『魔』がそこにいた。

幼い子供の頭上に浮かんだ、黒ずくめの人影は。

抱える膝を少しずつ解きながら、妖艶な笑みを浮かべる。

「あら……誰かしら、私を呼べる程の人間がいるなんて……」

呆気にとられる子供二人の頭上で、その黒のタイトな礼装に身を包んだ、空のように青い真直ぐな長い髪の女は、色の無い鋭い目をゆつくりと開いた。

「我が真名を……聖魔アスタロトと知つての狼藉かしら……？」

薄い琥珀色の、毛皮の襟巻を纏う以外、まさに黒一色の女は、微笑みながら殺意を秘めた紅い眼光をきらりと湛える。

想定外過ぎる術の結果に、啞然とした術師の子供が無言中、

「……母、さん？」

同じように啞然としながらも、その『魔』の正体を——

あっさりと看破した瑠璃色の髪の子供に、あらら……？ と、女はゆつくりと首を傾げ。

そして……。

「あれーっ！ よく見たら烏丸頼也君の次男君だーっ！」  
術師の子供が更に啞然とする固有名詞を、次に出したのだった。

きゃあきゃあと、それまでの伶俐な威かさは何処へやら……  
女は楽しげにふわふわと、自身の膝に頬杖をつき、子供二人を  
無防備な笑顔で見下ろす。

「そっかー君かあ、悠夜君かあー♪ そりやあたしの事だつて  
呼べるよねえ、噂のプチ魔王・悠夜君なら♪」

「え………——え？」

様々に聞き捨てならない女の台詞に、術師の子供は少し理性を  
取戻し、あまりに様相の変わり果てた——顔見知りだった女を  
ようやく思い出した。

「貴方は……まさか——」

「そうそう、可愛いラピちゃんの育てのおかーさんでーつす♪

正確には今は、聖魔アスタロト・流惟・檢、しかしそれは世を  
忍ぶ仮の姿、実際は魔竜の巫女という何とも悲運、ティアリス・  
アースフィュー・ナーガちゃんなのでつす！」

魔方陣の内にいる間は、召喚者の問いに正直に回答しなくては  
ならない魔は、必要以上の情報を楽しげに口にする。

「うわー花の御所だあ、頼也君と幻次君会いたいなあ♪ でも  
さすがに十五年前の謎の少女なんて、もー覚えてないだろーなあ」

「……父上達と、知り合いなんですか？」

瑠璃色の髪の少女によく同伴し、友人達とは顔見知りだった  
その養母は、友人側の両親と面識はないはずであり、

「うんうん、あたしが真面目に天使してた頃はねー。でもま、  
天使として会った事はほとんどないし、結局見知らぬ他人って  
言うしかないかなあ？」

そもそも決してここまでテンションの高くなかった、本来なら  
穏やかで静かな微笑の似合う女性の変貌ぶりに、術師の子供は  
それ以上言葉が見つからなかった。

「……あなたが、わたしの母さん？」

そして代りに、幼い子供が今度は問いを發する。

「お？ そんな君は、ティアリスの見も知らぬ新たな娘ちゃん？」  
楽しげに幼い子供を見下ろし、女はふんふんと様子を窺う。

「この躰は確かに、その躰の育てのおかーさんのだけどねえ。  
ちよつとワケありで、今はあたしが使つて、君の母さんには  
眠ってもらつてるよ」

「………」

幼い子供はまじまじと、毛皮の襟巻が目立つ女の全身を眺め、

「……ラピスを連れてつたのは、あなた？」

その母を縛る真実を——そこでやつと感じ取った。

女はふふふと、勘の良過ぎる幼い子供に楽しげに微笑む。

「ラピちゃんに命をあげたのは、あたしの部下の悪魔なのね。  
だから魂はあたしに献上してもらいました、わかる？」

「母さんは……ラピスを助けたくて、あなたの言う事をきくの？」  
「最初のキツカケはその通りかな。天使の情けでラピちゃんは  
成仏させてあげたけど、残滓でいいから傍にいてほしいって、  
ティアリスは言うし」

そしてそれを養女も受け入れたのだと、女は幼い子供に伝える。

それならと、幼い子供は決意を秘めた目で女を見上げた。

「ラピスを返して、母さん。兄さんと父さんはどうしてるの？」

「あー。ユーオン君は引き取ったけど、レイアス君は立入禁止。

だってあたし、余所にダンナがいる身なんでもーん」

「兄さんは——母さん達のこと、どう思ってるの？」

その質問に、女が少し考えてから、答えを返そうとした瞬間。

「——悠夜！？ それに……ラピのお母様！？」

瓦の屋根の上に、絶大な異変を唯一感じ取れた赤い髪の少女が、すたつと降り立っていた。

「鶉ちゃん！？ 何で……！？」

類稀な術師の父達ですら気付かず、そこに来ていない状態で、現れた従姉に術師の子供が血相を変える。

「あららん。あんまりゆっくり、お話は出来ないみたいだねえ」

二人の子供を守るように、女と子供の間に入った少女に、女は首元の襟巻を触りながらくすりと呟いた。

「新しい娘ちゃん。ラピちゃんを返せと言うなら——君は何を、代りにあたしに差出すのかな？」

「……………」

「猫羽ちゃん！？」

女のその言葉だけで、ある程度状況を悟った赤い髪の少女は、ダメ！ と瑠璃色の髪の子供を抱き上げていた。

「そのヒトは——猫羽ちゃんやラピのお母さんじゃない！」

「ツグミ……」

その強過ぎる魔の気配を感じ、全身に緊張を走らせながらも、幼い子供を守ろうとする赤い髪の少女に——子供はひしつと、少女の細い首にしがみついた。

そして改めて、少女の腕の中で女を見上げ、それを口にした。

「わたしは……あなたには何も差し出さない」

「——お？」

契約という概念に縛られる奇跡で、在ってはいけない身勝手、「プレゼント。わたしが生まれたお祝い、母さんからもらうの」

自らの存在そのものを礎とした契約を、子供は伝える。

「それはラピスのおかげだし……だから母さんは、ラピスに、お礼をしているの」

赤い髪の少女が現れた事で、言える言葉に制限がかかった中で、

「それって……猫羽さんがいて嬉しければ、言う事をきけて内容ですか？」

見も知らぬ娘と、女が一度口にしたにも関わらず。そう信じて疑わない凶太い養女に、術師の子供は啞然とするしかなかった。

幼い子供は確かに——それを感じ取っていた事もあったが。

「……わたしが何か差し出したら、ラピスは傷付く」

だからそれは譲れないと、まっすぐに女を見つめて言った。

「……………」

女は全ての表情を消して、冷徹な視線で幼い子供を見下ろす。



やれやれ——と。

女は長い髪をかき上げながら、空中で立ち上がった。

「新たな娘ちゃん、昔馴染の頼也君、幻次君の子供ちゃんに免じて。契約なき徒勞の召喚には目をつぶってあげましょう」  
これまでと一転した真面目な口調で、警戒する子供達の視線にくすりと女は妖艶な笑みを返し、

「私を母と呼ぶなら、いつでもうちまで遊びにいらっしやい。ただし——命を落としても知らないけどね？」

幼い子供の願いは聞かないが、代りのプレゼントと言うように。

何かの鍵を、ぽんと女は幼い子供の方に放った。

「……？」

それをキャッチした幼い子供が、不思議そうに首を傾げる前で、女の姿はやがて少しずつ薄まり始めた。

「——待って、流惟さん……！」

赤い髪の少女は、事情が全くわからないまま、ただその相手

——友人がとても慕った養母、少女達の前にはよく着物姿で、穏やかな笑顔で現れた女を思わず引き止める。

「……またね、鶯ちゃん？」

露出の多い黒の礼装に、確実に際立って目立つアクセントの、薄い琥珀色の襟巻の尻尾をひらりとなびかせ。

有り得ない程、高級な魔の召喚に成功した契約の儀を閉じ、その魔は夜の闇に還っていたのだった。

女の姿が完全に消えて、しばらくして。

黒髪の子供が不服気に、赤い髪の少女が抱える瑠璃色の髪の子供を見上げていた。

「……どうして鶯ちゃんにだけ、ばれちゃったんですか？」

「——ちよつと。悠夜も猫羽ちゃんも、何をする気だったの？」

茫然としつつも、捨て置けない現状にひとまず理性を取戻し、赤い髪の少女は二人の小さな子供を見つめる。

幼い子供は正直に、口に出せる範囲で事情を説明する。

「ラピスとお話したかったけど……母さんが出てきちゃった」

「……あのヒトは、本当に流惟さんなの？」

自身もそれを感じていながら、しかしあまりに変貌していた相手に、少女は納得いかなげにする。

「だからユーオン君達、助けに行つたんだと思うよ、鶯ちゃん」

「……本当、不穏事ばかりなんだから、ユーオンの周りは」

ようやく一つの事変が決着したららしい事も束の間……なかなか平穩に身を置けない少年に、少女は大きな溜め息をついた。

「悠夜も猫羽ちゃんも、無茶な事はしちゃダメよ。私達に何か、出来る事があれば手伝うから……」

心配そうに言う少女に、子供二人はちらりと顔を見合わせる。

じゃあと、真っ先に幼い子供は、遠慮なくそれを口にした。

「ヨリヤお父さんには……言わないでね？」

そして子供は、握り締める何かの鍵の、驚くべき力を語る——

\*

高度過ぎる初の悪魔召喚で、酷く体力を消耗していた術師の子供と、それからまともに話せたのは数日後だった。

「で……兄様達は、やる気満々みたいです」

「……うん。ツグミも、わたしとソウとクウが行きたいなら、ついて行かないきやつて諦めたみたい」

川辺を南下し、前を行く兄と従姉、そして帽子の少年の姿に、術師の子供は大きな溜め息をつく。

数日前に幼い子供が入手した謎の鍵は……勘の良い子供曰く、「母さんの部屋の鍵」らしく。

「これで開けた扉は、何処からでも魔界の……多分あのヒトの居城に繋がる魔法具だと思います」

大事をとりながらも、術師の子供は幼い子供から鍵を預かり、その特性をここ数日をかけて調べてくれたようだった。

「御所には、このタイプの鍵を使うのは正門か、倉庫の南京錠くらいで、直接鍵をさせる扉じゃないと転移口にはなりません。ジパングには元々、あまりそういう扉は少ないんですが……」

「うちにはあるよ。みんなで行くなら……うちの方がいいかも」さすがに御所の正門を魔界の入り口にする事は躊躇った術師の子供は、幼い子供の提案に、黙って頷いたのだった。

「それにしても……どうしてこんな事に……」

後ろを気にしながら前を歩き、幼い子供の実家に向かう兄達の姿に、術師の子供は難しい顔で項垂れる。

鍵を入手した直後、赤い髪の少女に、その鍵があれば魔界に行ける、どうしても行きたいと幼い子供が話をした後、少女が従兄と友人に相談したのが現在の状況の始まりだった。

「ソウは、強い奴が沢山いるのか！？ って楽しそうだし……クウは、わたしと一緒に、ラピスが元気か見たいって言うし」

「鶯ちゃんだけじゃ僕達に気付けたんですか？」

何らかの謎の方法で、悪魔召喚の際、見事他の術師の感知を遮断していたはずの幼い子供に、納得いかなげに尋ねる。

「多分……ツグミはもうずっとあのヒトの介入を受けてるから、わたしが更に介入するのは、無理みたい」

「という事は……やっぱりそれは……」

「わたしと水火がラピスから受け取った——記憶を奪う神様の力。都合の悪い事は全部、気付かれた時に忘れてもらうの」それは御所一帯くらいなら、自在に展開出来ると、幼い子供は悪びれも無く口にした。

「最悪ですね……貴女の直観なら、誰が何を気付いたかすぐにわかって、その場で全部抹消ですか？」

だからこそ悪魔召喚の儀を、並み居る術師から隠せた恐るべき幼い子供に、真つ当な感想を術師の子供は思わず呟いた。

「そんなに細かい事はわからないよ……それにユウヤみたいな、神様みたいに強いヒトは、多分ユウヤだけ狙って頑張らないと効いてくれないし」

「それ……僕の記憶も消せるって言ってますよね……」

ますます警戒を強める術師の子供に、ううんと幼い子供は、

「ラピスの中にいた神様は出来たと思うけど。わたしは水火と兄さん以外から記憶をもらったのは、昨日が初めてだよ」

そこまでする事以前に、この力はそもそも普段は使わないと、子供側の事情を説明した。

「あんまりこれやると……わたしも神様になっちゃいそうだし」

「……でもユーオン君達からは、記憶を奪うんですか？」

「だって——二人共すぐに、怖い事考えるから」

……と、少し俯いた幼い子供に、術師の子供は目を丸くした。

「考える心は変わらないけど、考えてる時間は少なくなりたいよ」

「それもあまり、褒められた事じゃありませんけど……何だか、切実そうですね」

幼い子供の兄や、先日出会った紅い少女を思い出しつつ、少し納得したように頷く術師の子供だった。

「でも結局……悪魔召喚は成功したけど、魂呼は不発でしたね」  
ぼつりと、残念そうにそう口にした術師の子供に、

「ううん？ ラピスも一緒に、あの時いたよ？」

不思議そうに返す幼い子供に、え？ と。術師の子供が思わず、立ち止まりかけた時の事だった。

「君達——揃いも揃って、何処へ行くんですか？」

京都の南部を縦走する川……京都の南の平原にも続き、元は、瑠璃色の髪の少女と友人達が、何度となく遊んだ川原で。

その抜け殻という女は、気配の一つすら感じさせず、一行の行く手に立ち塞がっており。

「イタイケな子供が、あまり危ない事をする……大人として、止めざるを得なくなっちゃうんですけどね？」

「……スカイさん、ですか？」

赤い髪の少女が、驚いたように発した声に、他の子供も頷き。そこにいる相手は、この一行の誰もが見知った存在だった。

「あいつ——この前来た旅芸人一座の、営業の奴か？」

「あー。今休暇中だから、ジパングでまた良い公演先が無いか探すって言ってたよー」

先日にその、黒が中心の姿の女を案内していた帽子の少年が、思い出したように手を打った。

「……！！」

「……！！」

そもそも、その黒い女の影響を何とかするためにも動いていた年少組二人が、現れた黒い女に表情を強張らせる。

「ダメですよー、イタイケな子供さん達。こんな京都の外まで、子供さん達だけで外出しちゃ。悪いこと言いませんので、何も禍事が起こらない内に、お家に帰りましょ？」

「……あんたが一番、禍々しく見えるのは気のせいかな？」

「つて蒼ちゃん！？ 年頃の女のヒトに何て事を！」

あはははーと、黒い女は営業スマイルで笑う。

「年頃と言つても、この髪が黒くなる前は子持ちでしたけどねえ。

まあ子供っぽいっちゃ子供っぽいので、否定は出来ませんが」

以前と現在の姿は違うのだとほめかす女は、瑠璃色の髪の少女の母の躰とはいえ、姿は少女と似ても似つかず、誰も女が少女の関係者とは思ひもよらないようだった。

女は改めて、笑顔のままそこにいる目的を口にする。

「君達今から、日帰り魔界探検とか行く気なんですよ？」

「——!？」

幼い子供のために、黙って出てきた赤い髪の少女達の目的を、女が何故知っているのか少女は警戒の顔をするが、

「ダメですよーそういうの、本気で死んじやいかねませんか？」

君達に何かあったら、親御さんとか凄く悲しむと思いますよ？」

知られている不可解はともかく、忠告は真つ当である黒い女に、

元々お目付け役として迷いつつ同伴した少女は言い返せず、

「ラピやユーオンもいる所だろ？ 何とかなるだろ」

「うんうん。どんな所でも、そこなりの良さがきつとあるよねー」

至って気楽な男子陣に、少しだけ頭を抱える。

追い付いた年長組の、背中に隠れるようにいた黒髪の子供は、くいくいと兄の袖の無い着物を引っ張りながら、

「注意して下さい、兄様……あのヒトは危ないヒトです」

「悠夜？」

硬い顔付きの弟の警告が正しいと示すように、そこで黒い女は

——腰に据えた飾り気のない長剣を抜き放ち。

「言つてきかないコ達は、力づくで止めるしかありませんか？」

にこりとあくまで笑いながら、先頭にいた剣士の少年に、その

切っ先を突きつけていた。

「……………」

ひゃああと隣で帽子の少年が驚く中で、剣士の少年は至って冷静に、自身の刀に手をかけると、

「俺にはあんたは、邪気持ちに見えるし……悠夜まであんたを

敵認定してるなら、遠慮はいらないな」

「そうこなくては。剣士ならお互い、剣で語りましょよ」

にやりと不敵に微笑んだ女を前に、剣士の少年は背後の者達に、下がれと一言だけ——僅かに笑いながら口にした。

「兄様——」

「ソウ……」

それが、剣士の少年を置いていくわけがない一行への足止めで、黒い女は彼らを傷付ける気はないと、年少組はわかったものの……これ以上どうしようもなく、立ち止まるしかなかった。

その黒い女と剣士の少年の、互いの剣一つによる攻防は——  
ヒトの身ではまさに、最上のものといつて良かった。

「凄いな、蒼潤君てば。私が今まで戦った中では、最年少かつ  
最上級の剣士で間違いないですね」

「……！」

無駄な言葉を発する分だけ、黒い女には余裕があったが。

それもそのはず、黒い女の剣は受け流しと捌きを基本とし、  
まるで剣を防具のように、縦横無尽に挑み来る少年に最低限の  
動きで応じる形が続いていた。

「すみませんねえ、大人はキタナイんです。私の目的は、君と  
戦えれば果たせてますしね？」

「この——！」

決着を全くつけようとせず、しかし隙も無い不真面目な達人に、  
腹立たしげに剣士の少年は一度距離をとる。

「何がしたいんだ、あんたは」

「だから言ってるでしょ？ 危ない子供を止めたいだけだつて」

「それはただの過保護だろ。大体何で俺達があんたに、そんな  
世話を受けなきゃいけないんだ？」

再び斬りかかってくる少年に、黒い女は平和に微笑み、

「ご尤もです。蒼潤君はとて真つ当ですねえ」

無責任なままの声と太刀筋で、少年の剣をただ受け流す。

「蒼ちゃん凄——い、かっこいい——！ でもスカイさんも凄——い！」  
「樞……何でそんなに楽しそうなのよ……」

すっかりその剣士達に見とれる帽子の少年に、年少の子供達を  
かばうように立ちながら、赤い髪の少女が溜め息をついた。

「援護しようにも、蒼は邪魔するなって怒りそうだし……」

「あの間合いだと、どの道援護も難しいよ、鶴ちゃん」

持久戦に持ち込んだ黒い女は、巧みに少年と距離を空け過ぎず、  
周囲が援護しにくい状況にも持ち込む周到さだった。

「でも何か、雨も降りそうだし……あまり遅くなれば、今日は  
諦めるしかないわね」

気が付けば周囲には、川辺だけを中心に暗雲が立ち込め、

「凄いや蒼ちゃん！ 雷雲を背に戦うなんて、これこそ勇者の  
カガミだよね！」

いつの間に剣士から勇者になったのか、まさにどす黒い雷雲と  
いった空の翳り方に、尚更帽子の少年のテンションが上がる。

黒い女と剣士の少年は共に、その黒い空を背にしながら、

「残念ですが——本気じゃない蒼潤君には負けないですよ？」

「……！」

一対一の剣戟であっても、女に特技を出し惜しみる気はなく。

そして一筋の稲光が、場を眩く照らした瞬間——

剣士の少年の前から、黒い女の姿は消え去っていた。

「……え？」

「——あれ」

その青い光が川辺を包んだ半瞬後に。

「あれ、ここ何処？ 猫羽ちゃん、他のみんなは何処？」

「……クウとわたししか、いないよ」

突然、夜に近い夕方のように暗くなった川辺は、帽子の少年と瑠璃色の髪の子供の姿しかなく、

「とりあえずこつちに来て——手を離さないでね、猫羽ちゃん」  
こくりと頷く子供を守るように、少年の顔付きに僅かな緊張が入るのも、無理はない状況がそこにあった。

穏やかながら力強い流れだった川が、それまでと一転して、寂しげな拙い流れへ変わり……暗い空には稲妻が走り、川辺に落ちる事はないが、場の不穏さを引き立てて余りあった。

「……あれ？ ヒトがいる……？」

そんな不穏で、何処か物悲しい暗がりの中で——

川辺をゆつくり、ひたひたと歩く、裸足の人影があり。

「……………!」

その姿に一瞬で、瑠璃色の髪の子供の全身に痛みが走る。

クスクスと——……その、夕闇の中では黒髪にしか見えない、

肩までのふわふわとした髪の女は、黒にしか見えない暗い目で。

帽子の少年の視線に気が付いて、ゆつくりと振り返った女は……ただ、幸せそうな顔で少年に笑いかけた。

「……………え……………？」

その童顔の女の、危うげに明るい笑顔は——少年は覚えがあり。

「クウ——……見ない方が、いい——……」

ぎゅつと繋いだ手を握り締める、幼い子供の声も届かず。

—アナタ……シルファの、お友達……？—

稲光が走った瞬間、照らされて色のわかった瑠璃色の髪と、深い青の目の女は——間違う事なく、同じ色の髪と目を持った少女に生き写しの、少女の実の母であり。

「ラピ………ちゃん？」

「……………!」

そこにあるのはただの映像に過ぎないと、わかった子供でも。

あまりに強い胸の痛みにも、言葉を発する事が出来ない子供の横で、少年はただしばらく——呆然と立ち尽くした。

本来の川辺では、突然女の姿が見え難くなるという異状に、それが記憶に介入された不正手段と知る由もない剣士の少年が苦戦する一方で。

「……かわいい……お友達、みんな、かわいい……」

「あなたは……ラピちゃんの、ご家族ですか？」

恐る恐る、裸足でクスクスと拙い足取りの、尋常でない様子の女に、幼い子供の手をひきながら帽子の少年は声をかけた。

「おかしいな……僕は悠夜君達みたいな霊感はないのにな」  
「……………」

それは霊ではなく、ただ黒い女の不安定な記憶に迷い込んだ、残像だけの世界であると子供にはわかっていたが。

「シルファのお友達、かわいいから……守ってあげたい……」

「えーと……シルファって確か、ラピちゃんの名前ですよね？」

声をかけた帽子の少年に、とても幸せそうに微笑んだ女は、少年の声が聞こえているように見えなくはなかった。

「どうしよ、猫羽ちゃん。何か凄いホラーな感じだよね」

あえて冗談っぽく言う少年は、全身の強張った子供を少しでも、落ち着かせてやりたいようだった。

それでも女の、次の声は――

「シルファのせい……」

「――え？」

「シルファが心配で……私は、あの人の所にいけないの……」  
「……え？」

その昏く歪んだ想いの声は、少年には聞き逃す事が出来ず。

「一人にするのは心配だから……一人は可哀想だから……」

「……お母、さん？」

それが誰かの実の親であるとわかる程、その声には悲しみと、狂おしい程の心配だけが満ちており。

誰にも知られず、消える事を願った誰かを待っていた女は。

「……ねえ。お願いが、あるんだけど……」

誰かそのものを消してしまう事が、救いであると結論する。

「……そんなの、おかしいよ……!？」

少年はただそこにある、取り返しのつかない大きな間違いに、その救いを受け取った者の全てを忘れて叫ぶ。

「あの子のこと……忘れてほしいの……」

誰かによく似た女の願いは、誰かを確かに導くものでも……似て異なる夢、交わる事のない心を映す、孤高な空の青い光と暗がりの空虚な川辺だった。

それがあまりに鋭い痛みで、無情な現実であったためか。

温かな所で生きてきた者達に、その重さを決して気取られず、誰かの闇を映さない事を……ただ誰かと、その実の母は望み。

「……あいたたた」

「——!?!」

剣士の少年から不意に距離をとり、厳しげな顔で立ち止まった黒い女に、真剣な少年は怪訝な視線を向ける。

「参りましたね……入り込んだつもりが、入り込まれました」

「——は？」

他者の深奥……記憶に介入するからには当然あるリスクと、特にその相手の自然感覚の強さに、黒い女は溜め息をついた。

「忘れてはもらいますが……下手したら少々、トラウマですね」

それは女の本意ではないと——女が自らの特技を振るった事で、巻き込まれて誰かの痛みを垣間見た者を思い、物憂げに呟く。

女と剣士の少年の攻防を、ずっと見守っていた側では、

「櫛……ちよつと、櫛!?!」

「——……あれ？」

ふっと我に返った帽子の少年の前では、黒髪の子供が必死に、少年の上着を引っ張って呼びかけており、

「悠夜君……あれ、猫羽ちゃん、どうしたの？」

「ヒトの心配してる場合じゃないよ！ 今まで何処か、変な所、引っ張られてたんじゃない!?!」

しばらく意識の飛んでいたような帽子の少年らしかったが、赤い髪の少女が、蹲る幼い子供の横で膝をついて、心配そうに子供を抱えている事の方が少年は気になったようだった。

そしてその状況は——真剣に帽子の少年を心配し声をかける、黒髪の子供だけではなく。

幼い子供を守りたい者にも、許容範囲を超えた瞬間であり。

「……——ソウ、危ない……!?!」

「——!?!」

痛む胸を押さえながら必死に顔を上げて、叫んだ幼い子供と同時に、黒髪の子供も赤い髪の少女も場を襲った異変に気付き。

「……!?!」

咄嗟に大きく退いた剣士の少年と、黒い女がいた場所へ——

「……あらら……」

「——蒼!?! 蒼!?!」

どちらの剣士の姿も隠す土煙を上げる程、極太い氷柱のような真っ白い氷の刃が、いくつも川辺に降り注ぎ、

「必死にしぼっても……これくらいか……」

くすりとその紅い魔は、氷を呼んだ腕輪を腕に戻したのだった。



黒い女と戦っていた少年だけでなく、下手をすれば場の者を全て、巻き込みかねなかった突然の強い氷の力に。

「兄様、大丈夫ですか!? お怪我は!？」

「別に無事だが……あの女は、いなくなったな」

被弾した氷も斬れる兄程の身のこなしでなければ、確実に回避不可能だった力を放った者へ、兄の無事を確認した後で黒髪の子供はきつと厳しい視線を向けた。

「危ないじゃないですか! せめて声くらいかけて下さい!」

「やだなあ。烏丸君なら大丈夫って、信じてただけ」

堤防から川原に下りてきた紅い少女は、悪びれもなく微笑む。

「エルフィから、うちに来るって聞いてた皆さんが遅いから、迎えに来ただけ。エルフィを苛めるヒトがいたから……」

残念だけどわたし、魔法は巧くないの」

「威張れる事じゃないでしょ。力の大きさに振り回されてたら、いつか自分の身だって危うくするわ」

淡々と紅い少女を厳しい目で見ると、赤い髪の少女に、紅い少女はただ、虚ろに整った微笑みを返し。

「とりあえず——邪魔者はいなくなったでしょ?」

場から黒い女が姿を消している事を、改めて一帯を確認し。

その弱小な相手を排除するにはそれが一番早いと、予め幼い子供から聞き知っていた紅い少女には、当然の行動だった。

「卑怯な大人と正々堂々と戦うと、しんどくない? 烏丸君」

「余計なお世話だ。だからってヒトの戦いに手を出すな」

「ごめんね。わたしには烏丸君より、エルフィが優先だから」

そして紅い少女は、何故かずっと何か考え込んだような顔で黙っていた帽子の少年に気が付き、

「猪狩君? 流れダマでも当たった?」

「え?」

再び我に返った帽子の少年は、

「あ、いや……うん、手助けしてくれてありがとう、竜牙さん」

あははと呑気に笑った少年に、そこでブーイングが起こった。

「手助けってレベルじゃないよこれ、糶!」

「責めるとは言わないけど、褒めるのもどうかと思うわ」

「え? でもこれでラピちゃんちに行けるし、結果良ければ、

良しとしよーよ?」

なかなかソリの合わない紅い少女と友人達の間でも、少年は気楽そうに平和に笑い、

「ねえ、猫羽ちゃん。竜牙さんが迎えに来てくれて嬉しいよね?」

「……………」

その紅い少女の迎えに、不穏さもありながらも、明らかに少し元気を戻した幼い子供に。心から安心したような声で口にした、いつになく穏やかな笑顔の帽子の少年だった。

\*

黒い女が心配した通りに——普通であれば、魔界に日帰りで行こうなどと考える輩は、余程の強者でなければ有り得ないが。

「本当……猫羽ちゃんの結界？ 全然気付かれないのね、これ」  
その幼い子供の力があれば、どんな悪魔の目もかいくぐり、一行は秘密裏に魔界に足を踏み入れる事が出来ると——それが魔界行きが決まった、一番大きな土台だった。

「あらら。烙人は凄く鋭い方なのに、全然起きないわ」  
物は試しにと、まず幼い子供の家人に気付かれないかどうか、力を使いつつ子供の実家に足を踏み入れた一行であり。

「調子悪そうだし、休ませてあげようよ。烙人さんは体弱いし」  
「そう？ これでも、猪狩君のお薬のおかげで、最近は随分と調子良いのよ」

居間でうたた寝をしていた家人をそつと素通りし、紅い少女と幼い子供の居室に、招き入れられた友人達だった。

「外見はジパング風なのに……中に入ると、何か凄いな」  
内装は西の大陸風の屋内に、剣士の少年が素直な感想をもらす。  
「わたし達の部屋の扉を使うなら、わたしがその後、皆さんが帰るまで、扉が閉まらないよう見張ればいいのね？」

魔界に行くための入り口を作れるという鍵は、それで出来た入り口は扉を閉じれば消える上に、魔界側からは鍵を使えない、要は帰り道を作れない一方通行の欠点があると。一通り試したらしい黒髪の子供は難しい顔で説明した。

「何があってもこの扉は死守して下さい。それは貴女が多分、一番適任だと思います」

皮肉気にも聞こえる台詞に、紅い少女はくすりと頷いた。  
「……水火に鍵も預けるし、閉まったらもう一度、水火が扉を開けるのはダメなの？」

不思議そうに尋ねる幼い子供に、いいえと聡明な黒髪の子供は頭を横に振り、

「開け直した場合、最初に繋がった所と、次は違う所に繋がる可能性が高いです。向こうの僕達にはその扉が何処にあるか、わからなくなるかもしれません」

「そうよね。別の地点に扉が出来ても、うまく探し出せるとは限らないしね」

何気なくも切実な命綱の事を、一行が相談しているような中。  
普段なら、こうした時には、

「それってまさにスリルとサスペンスだね！ っていうかもし本気で扉が消えちゃったらどうする！？ 僕達魔界暮らし！？ 魔界ってお水とか空気とか大丈夫かな！？」

などと、想像力がひた走る帽子の少年は、しかし——  
始終淡々と、何処か覇気の無い様子で、紅い少女と幼い子供

——元は瑠璃色の髪の少女の居室をぼけっと見回しており。

「……クウ、大丈夫？」

「え？ あ、ごめんね、大丈夫だよ猫羽ちゃん」

あははと笑う相手に、幼い子供はただ憂い気な表情を浮かべた。

その様子を横目に、黒髪の子供は幼い子供を、異大陸仕様の室内を珍しそうに見て回る兄達の後ろで手招きする。

「さつき、あの川辺で、二人共何処へ引つ張られたんですか？」  
帽子の少年の様子が変わったのが、そこからだと黒髪の子供は当然の如く気が付いており、

「あのヒトと、ラピスのお母さんがごっちゃの、ヘンな所だと思っ……もうお母さんはいないけど、記憶だけは残ってる」

「貴女はともかく、どうして櫛まで？」

「あのヒト、クウの事、気に入ってる」

読んで字の如く、それで女の気が満ちる所に入り込めたのだと、淡々と語る幼い子供だったが。

「櫛は何があったかは覚えてないみたいだけど……それでも、あんなに凹んじゃうなら……」

いつも通りに笑っているような少年が、しかし確実に何かの大きな衝撃を受け。無意識からそれを消せ切れないうちにある事を感じた黒髪の子供は、痛ましげに少年を見つめる。

「魔界でラピスさんがいないってわかったら……大丈夫なのかな」

「……悪い事になるとは、限らないよ」

突然魔界などに行く目的、そこにいる友人に会いたがる者に付き添う事になった兄達の後ろ姿に、黒髪の子供は俯き。

幼い子供は一見は気楽に、碧い目の灰色の猫のぬいぐるみを抱えながら、強い意思を持った目で思いを口にした。

「近くに行ければ——絶対わたしはラピスを見つめる」

「……………」

「ラピスがどうするかはわからない。記憶も無いかもしれない……でも、ラピスの魂は確かに母さんの所にいる」

先日の召喚の際、それは確信を持っていた幼い子供であり、  
「ラピスの魂が帰ってきたら……心を呼び戻す事、ユウヤなら出来る？」

「……それは……」

父である公家の憂い気な顔を思い出せば、黒髪の子供にはその問いは当然、頷き難いものでありながらも——

「……その時があれば、考えればいい事でしょう」

それでも何故か、はっきり拒絶する事は黒髪の子供には出来ず。

基本的に、始終無表情で淡々としている幼い子供は、しかしそこでとても嬉しそうに微笑んだ。

「ユウヤは——えらいね」

そもそもここまで付き添う必要も、本当は無い黒髪の子供に、  
「自分の事もみんなの事も、ちゃんと考えてるね、ユウヤは」

「……………」

「わたしはわたしの事しか考えてなかった。ユウヤを見習えば、わたしに出来ることも、もっと見つかるかな？」

ともすれば小悪魔に見える顔でも、素直な賞賛を湛える相手に、

「……貴女は自分のために、ヒトの事を考えてると思いますよ」  
その兄にも思った事を、嘆息しつつ口にした黒髪の子供だった。

何の変哲もない小さな黒い鍵が、部屋の外の廊下から部屋の主の手で、ドアノブの下に差し込まれた後には。

差し込む事は、強い『力』の持ち主にのみ可能という制限があるが、差し込んだ後の開閉は誰にでも出来るようであり。

「とにかく誰もいない所に繋がるようですが……実際に何処に入るかは、猫羽さんが決めて下さい」

「……うん。もうちよつとやってみよう」

扉を開け閉めする度、扉の先には、冷たい石で出来た建造物の一角らしき光景が入れ替わり立ち代わり現れ、

「凄いな。どうなってるんだ、これ」

「考えても仕方ないでしょ。言つとくけど、西の大陸風の扉は全部こうなるなんて思っちゃダメよ、蒼」

当たり前だと応酬するような友人達を横目に、帽子の少年は相変わらず何処か、物静かにしていた。

「広いお城だな……」

何回も扉を開け閉めする事にそろそろ疲れてきた幼い子供が、溜め息混じりに再び扉を開けた後に。

「——あ」

「……いい所、あつた？ エルフィ」

こくりと頷く幼い子供の前の、扉の先に広がったのは、暖炉と煙突のある、おそらく上方の階の何処かの一室だった。

それじゃと紅い少女は、幼い子供に代わってドアノブを持ち、「行つてらっしゃい、皆さん。くれぐれも身も心もご注意を」心配など欠片も窺えない虚ろな微笑みで、剣士の少年を先頭に、扉に入っていく一行を見送り。

「さてさて……どれくらいの時間、持つかしら？」

廊下と扉の間に敷いた座布団に座り、自らの体で扉の閉鎖を防ぎながら……おもむろに、愛用の武器らしき白い三日月型の柄の片手剣の、手入れを始める紅い少女だった。

扉に入り、向こう側に出てみれば。

元いた場所の廊下は全く、入った先からは見えなかった。

「今回の出口は、この柱時計の下の棚のドアみたいね」

「えらく小さい所から出てきたな。帰りこれ、入れるのか？」

「体の一部さえ入れば、後は通れてしまうと思います、兄様」

ジパングとはかけ離れた建築様式の、冷たい石の床に褐色のシンプルな模様の絨毯がひかれ、大きな木製の古い柱時計や、薪のない暖炉、数人がかけられる長椅子があるその部屋は、

「いわゆる客間なのかしら？ それとも私室？」

「そんなに広くないし、個人用のものだと思うよ、鶯ちゃん」窓はないが、暖炉から覗ける煙突の先に、四角く切り取られた紅い空があり。

どう考えてもそこが——これまで一行のいた青い空の下とは違う、異世界であることを示していた。

『宝界』と『魔界』。一行がいた宝界という世界は、様々な世界に通じる中継地点として、強い『力』を持つ化け物にのみ、世界間の移動が可能とされていたが。

「ホントに来ちゃったのね……魔界……」

「何だ、鵜。怖気づいたのか？」

「つて、蒼ちゃんは全然怖くないの？ 僕達、ジパングからもほとんど出た事ないんだよ？」

それが突然、異世界に——それも特に性質の良くないと噂の、危険な化け物の巣窟に足を踏み入れる事になった少年少女達は、その理由となった幼い子供をまじまじと見つめる。

「猫羽ちゃん、これから何処行こう？ ここつてラピちゃんのお母さんのお城なんだよね？」

「うん……でも、気配が多過ぎて、母さんが紛れちゃってる」  
広大な城中に、早速アンテナを伸ばしてみたらしい幼い子供は、悪魔などの力の主が集まるのが主に下層とはわかったものの。気配一つ一つを、普通より情報多く感じてしまう性質のため、かえって許容量を超えたようだった。

「ここに長くいたら、見つかる心配はないですか？」

「ここは上の方だけど、元々あんまり、ヒトはいないみたい。ラピスみたいな気配と、いくつか悪魔と、悪魔じゃないヒトの気配が近くにする……」

え。と、あまりに早々の目標の気配に、全員が目を丸くする。

「ラピちゃん近くにいるの？ 猫羽ちゃん」

「……似てるけど。違うかもしれない……」

その台詞に様々な意味がある事までは、世界を超えてすら続く制限に、幼い子供はそれ以上口には出来なかった。

「ヒトが少ないなら、今の内に早く行かない？ それはずっと続くとは限らないでしょ」

「悪魔の一人や二人、会ってみたいけどな」

「兄様……ジパングにも悪魔はいると思うので、それはまた、次の機会に」

そして一行は、ゆっくりと歩き出した幼い子供を囲むように、数歩だけ遅れて後に続く。

「そう言えば——」

声は小さく潜めながらも、思い出したように赤い髪の少女が、幼い子供の後ろ姿を見つめた。

「ユーオンはここにはいないの？ 猫羽ちゃん」

「……わからない。いるとしたら……下の方なのかな」

ちらりと振り返りつつ、残念そうな顔付きで答える幼い子供に、そうとだけ赤い髪の少女は軽く息をつき。

先日召喚した悪魔の養母が、確かに引き取ったと言っていた金色の髪の少年の気配は、幼い子供も瑠璃色の髪の少女の次に気になり、探していたものだった。

その私室の扉を開けて、出た先は中空で方形の回廊であり、  
「うわ、開けっぴろげですね……下の方から見えないように、  
気をつけて通らないと」

「でも誰も、気付かないようになってるんだろ？」

「そうですね……気をつけるにこした事はないと思って」

あくまで豪胆な剣士の兄に、慎重な黒髪の子供は少し苦笑う。

「階段上るから……誰かは多分気付くけど、すぐに忘れるよ」

「？」

身を隠すために、この城一帯に忘失の暗幕を張り巡らせている  
幼い子供を、黒髪の子供以外は知る由もなかったが、

「悪魔の城にあからさまに侵入して、全然気付かれないって、  
本当に信じられない」

呆れながらもひたすら感心したような、赤い髪の少女だった。

回廊の一角に設置された階段に、事もなく到達した一行は、  
一応は足音を潜めて長い階段を上る。

「……………」

「……クウ？」

前を剣士の少年、後ろを赤い髪の少女と黒髪の子供が行く中、  
帽子の少年に手を引かれる幼い子供は、無表情でも心配そうな  
声色で少年を見上げた。

「クウ……ずっと、元気ない」

「え？ 僕？」

半分以上の空だった帽子の少年はごめんねと苦笑い、たははと  
幼い子供の方を見つめ返した。

「そうなんだよね……何だか僕、自分でもよくわからないけど、  
さつきから不思議なくらいに元気が出なくて」

「……………」

一応自覚はあったらしい帽子の少年と、連れ立って歩きながら、  
幼い子供はぎゅゅと思わず少年の手を握る。

「ラピちゃんにこんな顔見せたら、心配するかも。どうしよう  
……ひよっとして僕、原因不明のウツとかになったのかな」

うぐぐと少年は、それは困ると空いた方の手を掲げて握り締め、

「ナントカの不養生ってどころの話じゃないよね、でも全然、  
理由がわからないから対策もわからないよ。それって正直一番  
困るパターンかも……いや、ウツって限ったわけじゃないけど、  
とにかくよくわからないのが怖いよね」

「……理由はちゃんとあるよ……クウ……」

ただ、それがわからなくされてしまった——あははと苦笑いを  
続ける少年に、瑠璃色の髪の子供は一瞬、泣き出しそうな程に  
青い目を潤ませる。

それでもそれ以上は、制限された言葉を続ける事が出来ず。  
それからしばらく帽子の少年は、何処か物憂げな微笑みを、  
幼い子供の手を引きながら浮かべ続ける——

その最上階に続く階段の先、広大な城の主たる女の、貴賓と  
しては慎ましい造りの寝所に辿り着くまでは。

天蓋付きの広いベッドと、壁にかけられた大きな鏡、小さなサイドテーブル、長椅子と箆筒だけが設えられたその寝所で。

「……………」

周囲の様子を見たいと階段に残った剣士の少年を後に、東西に存在する二つの扉の内、一つから立ち入った一行の中で。

一番に部屋の内に入り、目的としていたものを確かに確認し、息を飲んで立ち止まった幼い子供の隣では、

「あれ？ 枕の上で何かが眠ってる？」

幼い子供の次に、広いベッドの一角に、その薄い琥珀色の——体躯の細めな、しかしさも毛皮といった全体像の、ふわふわで大きな尻尾を持つ何かに帽子の少年がすぐに気が付き。

「……………」

突然その聖域に立ち入ってきた複数の侵入者に、少年の声で気が付いたらしい化生は、びくりと顔を上げる。

「え？ 小さな……………子供の狐？」

「……………」

幼い子供の手を引く少年の姿に、瞬時に総毛を逆立てたその

薄い琥珀色の——ともすれば襟巻にも見えそうな細身の仔狐は。

全く言葉を発せなくなった幼い子供の目には、明らかに先日

……………召喚した悪魔が、肩に乗せていたものと同一とわかり。

「——あ！ 待って！」

「……………」

侵入者に怯えるように素早く身を起こし、もう一方の扉側に走り逃げた仔狐に、後から入ってきた者達が目を丸くする。

「櫛？ どうしたのよ？」

「——鶉ちゃん、あっち！ 行こう、追いかけて！」

何故かはいつと幼い子供を赤い髪の少女に渡し、帽子の少年は、仔狐が逃げていった扉の方に走り出した。

「櫛、何処行くのさ！？」

慌てて外にいる兄を呼ぶ黒髪の子供に、帽子の少年は一度だけ——……………何故かとてもなくきらきらとした顔で、同行者達に振り返った。

「可愛いもふもふがいたよ！ 捕まえよう！」

——え！？ と……………幼い子供以外の誰もが、呆然とする程に。

それまでの覇気の無さが嘘のように、そしてここが悪魔の城と忘れ去った明るさで、少年は扉から駆け出して行き。

「ちよつと……………待ちなさい、櫛……………」

一行が万一別行動になっても、城全体をカバー出来る暗幕は施してあるため、大きく慌てる事はなかったものの。

それなりに衝撃を受け、慌てて少年を追った友人達だった。

「もう、何考えてんの、櫛の奴!？」

「凄く速さだな……下手したら本気ではぐれるぞ、これ」

帽子の少年があまりに全速力で走って行ったため、幼い子供を赤い髪の少女が、黒髪の子供を剣士の少年が背負って、一行は帽子の少年を追いかける。

「猫羽さん……一瞬しか見えなかったけど、さっきのって……」  
「……うん。あれ……ラピスだと思う」

背中の上同士、あまり細かい話は出来ないながら、幼い子供と黒髪の子供はひそひそと顔を見合わせる。

「何でまたそんな——確かにあの時、襟巻みたいにあのヒトと一緒に連れてきましたけど……」

魂呼も成功していたという幼い子供の言葉を、今更のように黒髪の子供は納得しつつも、

「わからないけど……あれ、多分ラピスのお父さんを殺した、強い火の狐の抜け殻だと思う……」

何度となく観ていた昏く赤い夢の中で、確かに知っていた炎の獣と重なる、しかしそれよりずっと弱小で火の力も無い化生に……幼い子供も首を傾げる。

「炎は……お父さんが、持っていたのかな?」

『神』を封じられていた炎の獣が、一人の人間の男を殺し、そして悪魔の女性の手で獣も殺され。

獣がその後どうなったかは、子供は知らない領域だったが。

「神様はラピスの中に来たけど……お父さんは狐の中に行って、今度はラピスが狐を食べたのかな……?」

「……すみません。正直、わけがわかりません……」

獣から悪魔の女性に遷った『神』が、女性から命を分けられた瑠璃色の髪の少女に移り、『神』が消えた獣には、獣が殺した人間の男の命が残り……命の内には炎の適性を持っていた男がその力を受け取り、新たな炎の獣として、記憶の無いままこの城の主——悪魔の女性の上司の支配下にあった事や。

「ラピスのお父さんも……あのヒトと一緒にいたのかな?」

その上司、先日召喚した悪魔こそ、遠い日に炎の獣を使役し、その内に『神』を封じた、獣の本来の主人であり。だからこそ封印が解けるタイミングに、悪魔の女性を派遣出来た事は……さすがの現状把握に優れた子供も、全ては探知出来ず。

「ラピスは……お父さんの代りに、狐になったみたい……」

そして炎の獣の主人が、その内の人間の男を解放し……残った狐の抜け殻に男の娘、瑠璃色の髪の少女の魂を納めて獣の命を与え、自らの傍に留めた事を、おぼろげに幼い子供は悟る。

「よくわかりませんが……」

黒髪の子供は痛まじげな顔で——最も大切な事だけを尋ねた。

「あの仔には……ラピさんの記憶や意識はあるんですか?」

それはたとえどちらでも、哀しいはずの事だと慮るように。



その仔狐が自らの友人の変わり果てた姿と、知るはずもない帽子の少年が、逃げる仔狐をただしばらく追いかけた後に。

「ここ、元来た部屋と同じ階の回廊かしら？」

「そうだな、似たような景色ばかりだけどな」

階段を降りる事をやめ、ひたすら回廊を逃げる仔狐は、この階層と元いた最上階が最も安息の領域である事を示しており。

「待つて、もふもふちゃん！ ちよつとでいいから触らせて！」

いつになく強引に、仔狐を追い続ける帽子の少年の、更に後を追いかけていた友人達は、諦めたように一度立ち止まった。

「最初来た方に帰れば、挟み打ちに出来るんじゃないか」

「そうよね……これ以上無駄に、体力も消耗出来ないし」

背負っていた子供二人を地面に降ろし、回廊を逆向きに向かい、まだ一週はしていない少年と仔狐が、回り戻ってくるのを待つ方針に切り替える。

「これだけ騒いでて、本当に気付かれないのかしら……」

心配そうに赤い髪の少女が、広い回廊をぐるりと見回した姿に、まるで呼応するように――

回廊から繋がる数々の扉の一つ……少女達とは垂直の離れた方向に位置した扉が、そこでゆっくりと開き。

「……え？」

ほとんどヒトがいないというその階層で、数少ない一人が、その扉から出てきた姿に最初に気が付いたのは――

ある強い違和感に、大きく首を傾げた黒髪の子供だった。

「まずい、誰かいるわよ……！？」

七時の方向にいる少女達と、零時の位置にある扉から出てきた人影が、すぐに鉢合わせする事はなかったのだが。

少女達とちょうど対側……三時の方向の回廊を走る仔狐と、帽子の少年が、零時の人影とぶつかるのは時間の問題であり。

「さすがに鉢合わせしたらまずいんじゃないの！？」

「……気付かないはずだけど……でも……」

焦る赤い髪の少女の足元で、瑠璃色の髪の子供も強く首を傾げ、

「あのヒトには……見つかる気がする……」

と言うよりも――侵入者の少女達の存在に気付いたからこそ、出てきた人影に気がつくように……。

しかしその人影が何者であるか、幼い子供には全くわからず。

「あのヒト……誰？」

「あれ……誰だっけ？」

本来ならわかるはずの相手がわからないと訴える、同じ強い違和感に呆然とする、子供二人の視線の先に。

黒翼を背に、銀色の髪で赤い目の死神が冷然と顕現する――

＊

「待つて、もふもふちゃん！ ちょっとでいいから触らせて！」  
「……………！」

逃げ回る仔狐をしつこく追いかけて回す、ともすればただの、いじめっ子と見えてもおおしくない状態の帽子の少年は。

「どうして逃げるの！？ 僕達、怖くないよ！？」

その仔狐を決して、この城の主以外の誰にも触れさせないと決めていた、銀色の人影は……それでも不可解にも感じる程に、少年を大きな脅威と感じられなかったようだったが。

仔狐の悲鳴に目覚めた人影は、同時に謎の者達に気付いた。

「……………何だ……………こいつら……………」

気が付いた傍から、相手が誰かわからなくなるといふ不可解に、袖の無いシンプルな黒衣の人影は眉をひそめながら。

眠りが必要な軀を鞭打って起こし、おそらく今現在城にいる、どんな悪魔も気付いていない侵入者の元へと足を向ける。

「……………侵入者なんて、どうでもいいけど……………」

冷え切った声と軀を、黒いバンダナで僅かにだけ赤く温め。

悪魔に比べ、大した力を持たない人影がそれでもそうして、不可解な侵入者に唯一気付ける、現状把握の能力を以て。

その回廊に人影が出向いたのは……………たった一つの理由だった。

「……………え？」

重厚な扉から出てきた人影の、暗い澱みを纏う伶俐な眼光に、そこでようやく、帽子の少年は足を止めて立ちすくみ。

少年が追いかけていた仔狐は、人影の背後にさっと逃れると、人影が出てきた扉の奥へと消えてしまい。

「……………狐こはく魄はくに、近付くな」

仔狐を庇うように、黒い羽を持つ人影は扉の前に立ち塞がり。誰かもわからない相手を、ただその——赤く染まる目で睨む。

「……………櫛！？」

そして人影は、腰の短刀をきらりと抜き放つと。少し離れた場所にいる赤い髪の少女……………それも誰かわからない相手の声を横目に、帽子の少年に容赦なく短刀を突きつけた。

「アンタ達……………この城の者じゃないな」

銀色の短い髪を黒いバンダナで包み、バンダナで半ば隠された暗く赤い目に映る者達は。映った傍から消されていく意識も、その自らが曖昧な人影にとって——

ここ最近の不安定で、保てない己の結果と観えたようだった。

短刀を突きつけた相手の同伴者が、反撃に出る事を面倒に、その銀色の人影は感じたようだった。

「……さつさと消える。侵入者には……俺は興味ない」

「……え？」

あくまで人影の目的は、帽子の少年に追いかけていた、薄い琥珀色の仔狐の保護だけであり。

「次に現れたら、その時は……殺す」

それを再び侵すのであれば——決して容赦はしないと。

帽子の少年だけでなく、他の同伴者にもその後、伶俐な赤い眼差しを一度だけ向け。

「——櫛！ 大丈夫！？」

パタンと、出てきた扉の奥へと人影が消えた数瞬後に、少年の同伴者の一人、赤い髪の少女が駆けつけていた。

赤い髪の少女は、手にしていた少女の主な武器……遠隔での攻撃も可能な物を、帽子の少年に何かあればすぐに使うべく、駆けてくる傍から構えていたが、

「鷓ちゃん、櫛、とりあえず退こう！ こっちに戻って来て！」

帽子の少年の無事を確認し、武器を収めた少女の姿も確認し、黒髪の子供は、最初に入ってきた部屋の扉を開けて叫んだ。

「櫛、動けるかい！？」

「……大丈夫だよ、悠夜君！」

赤い髪の少女に手を引っ張られ、少しの間だけ呆けながらも、すぐに我に返ったように帽子の少年は応える。

「一旦退却だな。これ以上深追いすると、さつきの奴と本気で戦闘になる」

黒髪の子供と幼い子供を守るべく、そこに残った剣士の少年は、あくまで冷静に状況を見て口にした。

「多分勝てない相手じゃないが——あの仔狐を守るためなら、アイツ、命がけで俺達を殺しに来るぞ」

「兄様……」

「…………」

それだけ真っ直ぐな剣気を持つ敵がそこにいると、事も無げに見切った剣士の少年の言葉に、子供二人は顔を見合わせる。

「……まさか、さつきのヒトって……」

「…………」

半ば確信を持って、幼い子供の方を怪訝に見る黒髪の子供に、うむむと……一しきり幼い子供は、頭を悩ませた後に。

「……あ、そっか」

忘れてたと、あまりにあっさり、ある呪いの存在を思い出し。

「うん……あれ、ユオン兄さんだ」

ちょうど、赤い髪の少女と帽子の少年が帰り着いたその時に、黒髪の子供以外が驚愕する事実を、あっさり口にしたのだった。

最初に入った部屋の柱時計から、難無く魔界を脱出してきた一行の姿に……手入れしていた片手剣を片付けたばかりだった紅い少女は、くすりと微笑みながら首を傾げ。

「あらら？ ……まだ一時間、たつてないけど？」

お帰りなさいと、全員が戻ってきた事を確認した上で、すぐに魔界の扉を閉めた紅い少女だった。

紅い少女と幼い子供の部屋で、自身のベッドに座る二人と、床に座る男子陣と、幼い子供の隣でベッドに座らせてもらった赤い髪の少女は——ようやくほっと、呼吸を落ち着かせる。

「……どう？ ラピには会えたの、エルフィ？」

「……ダメだった。……兄さんに、邪魔されちゃった」

あらら？ と更に、目を丸くする紅い少女の前で、  
「本当にあれ、ユーオンだったの？ 猫羽ちゃん」

まだ緊張の抜けない、納得もいかないという表情で、赤い髪の少女が不服そうに幼い子供を見つめた。

「気配も全然違っし、顔も違っし、何か羽まで生えてたし……」

「忘れてた……兄さん、バンダナすると、ヒトが変わるの……」

はい！？ と目を見張る赤い髪の少女に、黒髪の子供がさっと補足に入る。

「凄く強い呪いのアイテム、持ってたみたいだよ、鵜ちゃん。気配も姿も別人にするような……羽については、僕にもあまりよくわからないけど」

何それ！？ とひたすら、赤い髪の少女は不服げにする。

「確かにあの剣気は——ユーオンって言われたら、納得出来るな」  
剣士の少年はその場で唯一、楽しげな顔であぐらをかき、

「それも『銀色』の方だろ。魔界暮らしていつそう、剣気にも磨きがかかったんじゃないか？」

時により金色の髪が銀色に変わり、その時は何の流血も厭わぬ死神となる少年の事を、改めて場の者に思い出させる。

「でもどうして、ユーオン君が僕達に剣を向けるのさ？」

「あらら。そんなにヒドイ目にあつたの？ 猪狩君」

うんと気楽に頷く帽子の少年に、紅い少女も気楽に笑いかける。

そうした者達を前に、幼い子供は少し難しい顔付きで、

「兄さん、わたし達が観えてたけど、気付いてはなかった……」

でも凄い無理して、あそこに出てきた……」

現在『銀色』が外に出る事が、どれ程負担の大きい事であるか、後から感じ取った幼い子供は僅かに声を震わせる。

「それだけあの、謎の仔狐を守りたかったんだろ」

「……仔狐？」

何故そこまでして、その化生を『銀色』が守ろうとするか——

その意味は気付けなくとも、あつさり状況を見切った剣士の少年の言葉に、紅い少女が少しだけ怪訝そうに表情を消した。

それでも——と、腹立たしげに両腕を組みながら、赤い髪の少女はその不服を真つ当に追及する。

「ちよつと小動物追いかけただけで、普通、短刀まで抜く？」

「……うん。兄さん、変わったと思う」

うんうんと納得気に頷く幼い子供は、しかし、

「いつもの剣も抜かなくて……一番初めの時に殺さないなんて、キラ兄さんらしくない」

「つて、猫羽ちゃん……それは……」

「キラ兄さんは敵なら、わたしだつて殺そうとしたよ……でも、今は違うんだね、兄さん」

密かに少し感動しているらしい幼い子供に、心からくりと、大きく肩を落とした赤い髪の少女だった。

まあ、と紅い少女が淡々と口を挟む。

「何を守ろうとしたかは知らないけど、次は確実に本気で来るでしょうね、ユーオンなら」

いいの？ というように幼い子供を紅い少女は見つめた。

「ユーオンだけ結界から除く事は出来ないの？ 猫羽ちゃん」

「そうだよ。僕達だつてわかつたら、抜刀はないよね？」

「……」

現在の所、彼らの侵入に気付いたのはその相手だけであるため、ごく真つ当な提案に、しかし幼い子供は困ったような顔をする。

「出来るけど……わかつたら帰れて、凄く怒ると思う……」  
「やっぱりねと、くすりと紅い少女は笑った。

「そうよね。どちらにしても、命がけで追い返すわね」

「でも、事情を説明したらユーオンだつてわかるでしょ？」

ラビに会いたいだけなんだからと憮然と言う赤い髪の少女に、

「……」

「簡単に会える所にいないなら、多分止められるよ、鶴ちゃん」  
尚更困つたように黙り込む幼い子供に、黒髪の子供が助け舟を出した。

「そうですよね？ 猫羽さん」

「……うん……兄さんを止めて……あの仔を捕まえないと……ラピスには会えないと思う」

一つ一つ、口に出る事を探すせいか、一見脈絡のない内容に、

「あ、やっぱり！？ 何だかあの仔、捕まえてつて訴えかける何かがあるんだよね！」

生き生きと帽子の少年が、幼い子供には考えもつかない方向で、拙い言葉の後押しをする。

「ダンジョンのお約束だよ！ 次の場所に進むには何らかの試験かアイテムが必須っていう！」

「そういうモンなのか？」

「そんなんで小動物怖がらせたわけ？ 榎」

「だつて可愛いよ、ちっちゃいよ、もふもふだよ！ みんなは抱っこしたくならないの！？」

すっかり元の調子を取り戻した帽子の少年に、黒髪の子供が、困つたように笑いつつ、現実的な相談に話題を戻した。

「どうしますか？ これ以上……深追いするべきでしょうか？」  
それをするのであれば、相応の危険が伴うと示すように。

「……………」

幼い子供は灰色猫を抱えながら、その現実を誰よりも知るため、ただ黙り込んで俯く。

「ユーオンも山科さん達も、両方危険な目に合わせる可能性が高いわね、エルフィ」

さらりと紅い少女が、子供が最も苦悩する現実を代弁する。

「これ以上は……無理じゃないかしら？」

「……水火……」

あくまでこの状況は、姉に会いたい幼い子供の、我が俣の上に成り立ったものであると——引き際の判断を促すように。

俯く幼い子供を気遣うように、静まった場の空気に、

「……無理じゃないだろ」

不服そうに最初に口を開いたのは、剣士の少年だった。

「危険なんて承知の上だし、付いてきたのは俺達の自己責任だ。たまたま最初の敵が、ユーオンだったってだけの話だし」

「兄様……」

「あの仔狐がいるって言うなら、俺がユーオンの相手をするから、その間に誰かが捕まえればいい。俺も一度、本気のアイツと、闘ってみたかったからな」

「ちよつと、蒼——」

無表情でもあくまで不敵な従兄に、赤い髪の少女が顔を顰め、

「蒼かユーオンに何かあったら、どっちにしても最悪じゃない」

至って真つ当な判断をそこで口にするものの、

「俺は負けないし、アイツに俺を殺させたりしない」

その相手の兄弟子でもある剣士の少年は、真面目くさった顔でそう宣言した。

「その間に悠夜達が手薄になる方が心配だ。仔狐を捕まえれば、事はすぐに済むのか？」

「……わからない……でも、ラピスとお話は出来ると思う」

やつと顔を上げた幼い子供に、僅かに剣士の少年は笑った。

「まさに試練だね……僕も何だか、ドキドキしてきたよ」

「樞……何でアンタ、そんなに気楽なのよ……」

剣士の少年がいない間は、黒髪の子供はまず体力が拙いため、自身が一行の護衛役を引受けなければと、責任感を持っている術師の一人の赤い髪の少女が頭を抱える。

「でもまあ……私も、ラピには会いたいし」

「……鵜ちゃん」

「蒼も樞も、結局はそうよね。猫羽ちゃんのためというよりは……何だか、そうしなきゃいけない気がするの」

「……ツグミ……」

「……………」

憂い気に赤い髪の少女を見る幼い子供を、無機質に紅い少女がまっすぐに見つめる。

「私達が危険だって行くのを躊躇う所に、ラピがいるなら……」

やっぱり、大丈夫なのかどうか、会っておきたい」

たとえその友人の現状をわからなくされた状態でも……それは当たり前的事と、消えない思いを赤い髪の少女は口にした。

本日潜入した城の回廊と最上階を、構造を凶に起こし作戦を考えると、少年少女達は、幼い子供の家に泊まる事となった。

「……限界かもしれないですね、結局は」

「……………」

台所を占拠し、何やら色々話合っている年長組を横目に、縁側に座って話す幼い子供と黒髪の子供だった。

「ラピさんに関する何か、覆い隠されているという事自体が、兄様や鶯ちゃんは無意識に違和感を持つてるのかもしれない。櫛は櫛で、あの仔がラピさんだって何処かで気付いてるのかもしれない」

「……みんな……ホントの事を知りたがってる？」

「知りたいと言うより……誤魔化せないだと思います」

急遽初訪問の友人宅に泊まってまで、魔界の城の攻略を目論む兄達の姿は、これまでにない熱心さと弟はわかっており、

「みんな、ヒトの事が気になるヒトばかりですから……」

うん……と、ゆっくり頷くように見える幼い子供は、ぽてっと突然抱えていたぬいぐるみを取り落とした。

「——つて、眠たいんですか、猫羽さん」

「あ……ごめん……」

眠たげな目を擦り、ぬいぐるみを拾おうと庭に降りた瞬間——  
幼い子供の周囲が、一瞬の青い光と共に闇に包まれていた。

……あれと、ぬいぐるみの姿すらも見えなくなった暗闇で、逆に意識のはっきりした幼い子供は、ぐるりと辺りを見回す。

「……わたしに……まだ、用があるの？」

「……………」

子供をこの暗闇に呼び込んだ者に、すぐ気が付いていた子供は、闇に溶け込む黒い人影に淡々と語りかけた。

「ここは……あなたの夢の中？」

「……そうですね。そう捉えてもらうのが一番近いでしょうね」  
何故か営業口調の人影は、女らしさを排し、凜とした本来の、  
剣士たる面持ちでそこに在った。

「夢は無意識と無意識の狭間にある、忘我の世界ですから。私は元々、そこから奥を覗くのが得意だったんです」

だからこそ一時期同居した『神』はヒトの夢を覗く力を得て、黒い女も代りに『神』の力を流用し、忘我のカギを得た相手に年中無休で介入出来る事を、幼い子供は感じ取る。

「夢はいつでも——何処でも、そのヒトの傍にありますからね」  
それは幼い子供も例外では無いと、伝えるように笑う。

「どうして……わたし達の邪魔をするの？」

幼い子供は、ずっと気になっていた事をそこで口にする。

「邪魔にしても、止まらないって……わかっているよね？」

昼間に剣士の少年に剣を向け、一行を足止めた黒い相手は、それで彼らを止められはしないとわかっていながら——

わざわざ酔狂に彼らに関わる黒い女に、その真意を尋ねた。

「そうでしょうね。私が何をしたところで、蒼潤君や鶴さん、  
櫛君の事は止められないでしょう」

「……………」

「私はただ——貴女に困ってほしいんですよ、猫羽さん」  
だからこうして現れるのだと、飾らず真意を覗せる女に——

「あなたは……誰……?」

心から不思議そうに、幼い子供が首を傾げたその時に。

「——猫羽さん！ 大丈夫ですか!？」

降り立った庭で倒れかけた幼い子供を、必死に支え呼びかける  
黒髪の子供の声で、幼い子供は我に返った。

「……あれ」

不思議そうに黒髪の子供を見つめた幼い子供を、ひょいっと、  
縁側に来た紅い少女が抱き上げる。

「……エルフィ、どうしたの?」

強固な結界の内でも起きたその異状に、紅い少女の表情は硬く、  
「攫われちゃった。でも……問題ないと思う」

既に相手の真意を感じていた幼い子供は、あっさりそう返した  
ものの、紅い少女は何か思うところがあるようであり。

「あのヒト……何処にいるかわかる? エルフィ」

にこりと綺麗に微笑み、自らそれを尋ねた紅い人形だった。

翌朝から、魔界の城のリベンジを目論んでいた少年少女達に、

その残念な知らせはあっさりと伝えられた。

「え? 竜牙さんと烙人さん、明日は朝から出かけるの?」

「ごめんなさい。そういうわけで扉の番は、明日は出来ないわ」  
一度目の潜入時は、魔界行き扉を見張ってくれた紅い少女は、

作戦会議中の一行にそれだけ言うと、台所を後にした。

「それじゃ、誰がこっちに残るかよね……」

「誰か一人はさすがに、見張ってないとまずいな」

いくら結界の強固な家内とはいえ、不意に扉が開まる何らかの  
事態が決まるとは言えないと、一行は頭を悩ませる。

それならと、黒髪の子供が真っ先に手を上げた。

「体力的には、僕は足手まといになりそうですし。猫羽さんは  
案内と結界に必要ですし、僕が残って扉を守ります、兄様」

「いいのか? 悠夜」

「悠夜君がいらないならいいで、何かちょっと心細いよね」  
うんうんと、赤い髪の少女と幼い子供が同時に頷く。

「元々、別行動が主体の作戦ですし。僕は猫羽さんからこれを  
借りて、ここから猫羽さんや櫛と連絡をとるようにします」

そう言ってPHSを掲げる相手に、帽子の少年が首を傾げる。

「あれ? 魔界って伝波届くの? 悠夜君」

「本来は届かないけど、このPHSだけは特別仕様だよ、櫛」  
にこりと笑い、アンテナのないPHSを黒髪の子供はしまった。



「兄様は『ピアス』を連れて、ユーオン君がもしも出てきたら足止めをして下さい。猫羽さんの方の用事が終わればピアスにそれは伝わるので、ピアスが動き出したら、一緒に戻ってきて下さいね」

そして剣士の少年には灰色の猫のぬいぐるみが渡され、少年は少し不服気にそれを受け取る。

「闘いの途中で、相手に背を向けるのか？」

「猫羽さん達の方に何かあった時にも、ピアスが兄様に助けを求めるはずですから……ピアスは喋れないので、動いた時にはとにかく注意してほしいんです」

それは仕方ないと、剣士の少年はようやく納得したようだった。

「ひとまず一番いいのは、蒼がユーオンを屋上に誘い出して、その間に私と櫛が最上階に、二つある両方の扉から入る事よね」

「そこにまた、あの仔狐がいるならな」

最上階の部屋にすぐに入らず、階段を調べていた剣士の少年は、屋上に繋がる階段が近くにある事も気が付いていた。

「そう上手くいくとは限らないし——素早い仔狐をどうやって上手く捕まえるかだしな」

「でも今度は、あの仔にも気付かれないようにするんだよね？」  
元々瑠璃色の髪の少女の魂を、忘失の暗幕の対象外にしていた  
幼い少女は、こくりと頷いた。

「いざとなったら私も力を使うし、こっちは事は心配しないで、蒼はとにかく気を付けてね」

「わかってる。ユオンはともかく、『銀色』なら多分、本気で殺しに来るしな」

「ホントに危なくなれば、兄さんも気付くようにするよ、ソウ」  
そのためぬいぐるみを剣士の少年の元に置き、少年達の様子を観れるようにした幼い子供だったが、

「そうならなつたで、今度はユオンが気に病むだろ。俺も情けないし、そんな事はないようにする」

あくまで対峙する相手の事を考えて言う剣士の少年を、潤んだ目で見上げる幼い子供の頭を、少年はぼんぼんと撫で叩いた。

そうした作戦会議の模様を、面白げに遠目で見守っていた、  
紅い少女と紫苑の髪と目の男だったが。

「何て言うか……血は争えないお人好しっぷりだな、アイツら」

「……あら。青の守護者達を知っているの？ 烙人」

「青だけじゃなくて、黒、赤、白、みんな会った事あるけど。  
子供世代まで会ったのは、青の奴らが初めてかな」

何故かそこで、ちらりと紅い少女を見る紫苑の男は、

「水華は赤の奴らと仲良かったんだろ。会いに行かないのか？」

「……………」

赤の守護者の姪とも言える紅い少女に、苦笑しつつ尋ねていた。

「エルフィが安全になって、猫を被り切れる余裕が持てればね」

淡々と答えた紅い少女に、今の姿の方が普通猫だと、半ば呆れつつ返した紫苑の男だった。

\*

元々金色の髪の少年と養父と、紫苑の男の雑魚寝部屋だった所に、剣士の少年とその弟と、帽子の少年が狭苦しく休み。

紅い少女と幼い子供の部屋で幼い子供と共に赤い髪の少女は休み、翌朝紅い少女が家を出た後で、不思議そうに幼い子供に尋ねた。

「竜牙さんとは一緒には寝ないの？ 猫羽ちゃん」

「……水火は怖い夢見るの。兄さんもそうだけど」

すっきり寝心地の良い相手を得た幼い子供は、これまでよりは良い寝起きで、昨日までの着物とは違う、瑠璃色の髪の少女のお下がりの身軽な服装に着替え、慣れ親しんだ寢床を後にする。

赤い髪の少女も、夜の間借りていた異国の寝巻から、元通り動きやすいタイプの着物姿へと戻る。

「それでは——くれぐれも、気を付けて下さいね」

黒い鍵を紅い少女達の部屋の扉に差し、ドアノブを持つ黒髪の子供が、PHSをもう片方の手に持ちつつ、これから出かける兄達を憂い気に見つめた。

「ごめんね悠夜君、一人でこっちにいてもらうなんて」

「……何かあったら、伝話してよ、櫛。何とかして駆けつけるようにするからさ」

大丈夫だよーと笑う帽子の少年に、黒髪の子供は溜息をつく。

先に扉に入った年長者達に続き、最後に魔界の扉に入る前に、幼い子供はじつと、黒髪の子供を無表情に見つめた。

「……？ 行かないんですか？」

「……うん。そう言えばわたし……ユウヤに言い忘れてた」

はい？ と首を傾げる相手に、幼い子供は儂げに微笑み、

「ユウヤ、色々と沢山助けてくれたのに。まだありがたうって言うてなかった、わたし」

「……そんな、もう帰って来ないみたい那不吉な台詞、ここで口にしないで下さい」

苦労性なのか更に溜息をつく黒髪の子供に、ぬいぐるみも無く身軽な両手で後ろ手を組む幼い子供は、小悪魔のようにそこで軽く微笑んだ。

「ここから先は……兄様達と貴女と、ラピさんの問題ですし」

「うん。そうだよね」

「大体、貴女とは三元中継になるんですから、今からしっかりと喋って下さいよ」

共に行動する帽子の少年と、PHSを持たされた黒髪の子供、ぬいぐるみを持たされたその兄、全ての情報の集積地点となるはずの幼い子供に、心せよと言うように難しい顔付きの黒髪の子供であり。

その不安に応えるように、黒髪の子供が手にしたPHSから、  
「大丈夫。多分わたしに何かあっても、ここでは喋れるよ」

まるで腹話術のように、口を閉じて声を届けた幼い子供だった。

柱時計から出て来た前回とは違い、今回の出口は、階は同じ  
何処かの客室の、洋服箆笥の開き戸だった。

「女物ばかりだな。しかも子供服か？」

「部屋もメルヘンな感じだね。どんなヒトが使ってるのかな？」

「ヒトじゃなくて悪魔でしょ、普通に考えたら」

まだ二度目にも関わらず、すっかり慣れた様子で少年少女達は  
行動を始める。

回廊に続く扉を開けると、まず辺りの様子を一行は窺った。

「ここは……ユーオンが出てきた側とは、ちょうど逆ね」

「さすが猫羽ちゃん、だから今回はこんなだね」

目指す最上階に続く階段は南北にあり、北側の零時の部屋には  
先日の相手がいる可能性が高いため、南の階段が間近の六時の  
部屋は絶好の位置取りだった。

「それじゃ、俺は北に行けばいいな」

「気を付けてね、蒼。くれぐれも無理はしないで」

灰色猫を肩に乗せつつ、ひらひらと後ろ姿で手を振る従兄を、  
不服げに赤い髪の少女は見送りつつ、帽子の少年と幼い子供を  
連れて南の階段に入る。

「……あれ」

そこで不意に、幼い子供は――

「水、火……」

思っていたよりも早く強い、本当は四元中継の、後もう一つの  
情報源からの映像を受け取る事になった。

「――猫羽ちゃん？」

階段で突然立ち止まった子供に、前後を囲む赤い髪の少女と、  
帽子の少年が不思議そうに足を止める。

そのアンテナからの、戦闘開始の情報は――……アンテナが  
元々付いていたPHSと、PHSに宿らされた伝波系の悪魔の、  
主である子供の両方に届き。

「……君が私の相手をするの？ 竜牙――水火」

「……」

アンテナを始終持ち歩く赤い少女が、何処とも知れぬ川辺で、  
腰の長剣を抜き放った黒い女と対峙しており……自らの意思で、  
アンテナに力を与え、情報を伝えんとしている事を幼い子供は  
感じ取った。

「やっぱり、水火……」

そのために昨夜、赤い少女が黒い女の居所を尋ね、朝早くから  
剣を手に家を空けた事を、幼い子供は確信する。

紅い少女は、力を使うための黒の魔法杖でなく、あえて白の片手剣——元は魔法杖だった武器を、製作者直々に片手剣へと造り直してもらった物を、静かに取り出した。

無表情に剣を構えた紅い少女に、黒い女は楽しげにする。

「わざわざ剣で来るの？ 力を使った方が圧倒的に有利なのに」

「……エルフィは、貴女を殺す事を望んでいないから」

力を使えばその結末は必然だと、あくまで無表情に紅い少女は黒い女と向き合う。

「貴女がエルフィ達の方に、気を向ける余裕が無くなるくらい……わたしが貴女を痛めつけたいだけなもの」

「怖いね。結局剣でも殺す気で来るんでしょ、君は」

「貴女がエルフィに手を出すからよ。貴女の目的は、いったい何なの？」

そこで紅い少女は、あえてあるスタイルの人形となった。

「ばかラピの置き土産にしては、エルフィばかり狙ってない？

もうあいついないでしょ——エルフィがどう動こうが、実際あんたに関係なくない？」

「そうだねえ。結局最終的には、シルファが決める事だしねえ」

瑠璃色の髪の少女が戻る事を願う子供の目的は、黒い女が少々妨げる必要はないのだと、既に少女の母からも解放されている黒い女も納得して頷く。

「でもエルちゃんて遊べば、こうして君が出て来てくれるでしょ」

「……やっぱり……要するにあたしを挑発してたってわけか、あんたは」

にこりと笑う黒い女に、敏い少女は嫌そうな顔付きをする。

「ばかラピの考えそうな事だわ。あんた今は、あいつを主人に見立てて、その空っぽな魂を動かしてるわけ？」

「そうだねえ。私は元々、誰かを守るために存在する誰かだし

……ラピスちゃんの唯一の心残りが、水華だったからね」

元々、瑠璃色の髪の少女を『神』から解放するために失われた少女を再現する人形に、黒い女は憐れむように微笑みかける。

「君が本当に水華だったのか、それともただの人形なのか……

これから君がどうして行くか、ラピスちゃんは心配してたよ」

「……余計なお世話だし。あたしは、エルフィさえ望む通りに生きていけるならそれでいいし」

「そうだろうね。君はあくまで……誰かを糧に、誰かの望みを叶えるためにいる、何にでもなれる生粋の『魔』だからね」

その黒い女が言う通りに——現在、失われた少女を再現する

紅い人形は、女の望みを再現しているのだと。

『魔』として造られた躯体にいつしか宿った心霊は、純粋な

『魔』であると、アンテナを通して幼い子供も改めて悟る。

「でもさ。何になるかくらい——君が決めているんじゃない？」

「……？」

「その答えは……君はもう、知ってるはずなんだけど」

そして黒い女は、その先は剣で語らんとばかりに——同じく剣を構える紅い少女に、容赦なく斬りかかった。

「猫羽さん！？ 大丈夫ですか！？」

「……………あ」

アンテナ以上に強い感度で訴えかける声に、幼い子供はそこでやっと、魔界の城の階段へと戻ってきた。

「水火さんの事は僕が様子を見ますから、猫羽さんはそっちに集中して下さい！」

「うん——ごめんね、ユウヤ」

「猫羽ちゃん？ 気が付いたの！？」

黒髪の子供の声は聞こえていない赤い髪の少女が、背負っていた幼い子供が意識を戻した事にすぐに気が付いた。

「蒼とユーオンの闘い、もう始まったの？」

「ううん……それはちょうど、これからみたい」

既に最上階に辿り着き、部屋の東西の扉に向かうべく、南側に赤い髪の少女と帽子の少年は待機しており、

「でも——母さん、今、部屋にいるね」

「そうなの。困った事になっちゃった……流惟さんの目の前でちよろちよろしたら、さすがに気付かれるかと思って」

その最上階の寝所には、仔狐と共に城の主がいて、外からも明らかに感じられる強い気配に赤い髪の少女は溜め息をついた。

そうして部屋の外の回廊の、南側に待機する一行をよそに、下の階でも、剣士の少年と銀色の死神の対峙が始まる。

剣士の少年が、零時の方向にある部屋の扉に辿り着く前から、銀色の死神は気怠そうに部屋の中から出てきていた。

「……………結局、また来たのか、アンタ達は」

今度は文句無く、剣士の少年も見覚えのある、黒い柄で刃は三角の青銀の宝剣を手に、死神は侵入者の剣士を暗く赤い目で冷たく見据える。

「狐魄に手を出して……何がしたいんだ、アンタ達」

守れなかった義理の妹の代りに、その獣を守るしかない死神の揺ぎ無き殺気は、全て目の前の剣士に向けられる。

剣士は一つだけ死神に、気になっていた事を静かに尋ねた。

「オマエはここで——この城でいつたい、何をしてるんだ？」

「……………」

「仔狐を守るために来たわけじゃないだろ。オマエの目的は、ここでは果たせそうなのか？」

真摯に尋ねる剣士に、さあなど——死神は正直な所を答える。

「俺は——……………殺すのは得意だけど、助けるのは苦手だ」

「……………」

古くから続く行き場無き呪いを、淡々と口にする死神に、

「……………自分でそう思ってるだけだろ、オマエは」

その『銀色』と、初めてまともに話をした兄弟子は、いくらか嘆息するようにそれだけ呟き。ただ冷たい赤い目で問答無用に斬りかかってくる死神に、自身の刀を抜き放った。

「……え？ 蒼ちゃん達は、屋上には向かわなさそう？」

最上階でひたすら待機する帽子の少年達と、人界に留まった黒髪の子供に同時に、幼い子供は観たままを伝える。

「兄さん、自分が不利ってわかってるから……ソウとマトモに闘わずに、場所を味方にしたいみたい」

純粹に剣技のみで対峙する広い場所は、避けたいらしい死神に、

「アイツ……ほんつとーに、闘いとなると見境ないのね」

「でも仕方ないよね。ユーオン君、体弱いもんね」

真っ当に対峙すれば長くは戦えず、消耗も大きい死神を詳しく知らないはずの帽子の少年も、慮るように呟いた。

「ユーオン君、かなり無理してるんでしょ？ 猫羽ちゃん」

「うん……兄さんは、あの仔を守りたいだけだから」

そのためであれば、どんな事でもするという死神に、

「わかってくれるといいな。僕達は別に、あの仔を傷付けたいわけじゃないって」

「……クウの言う通りだね」

たとえそれが、仔狐の願いに反する事だったとしても——ただ温かな思いでここまで来た者達を、何の暗幕も無しに今の兄が観た時にはどうした思いを抱くのだろうと、それだけが子供は気になった。

そんな子供を、PHSを通じて黒髪の子供が現状に引き戻す。

「部屋の内の様子はわかりますか？ 猫羽さん」

「何となくは……母さん、仕事があるけど、何か探してて……あの仔はずっと、枕で眠ってる」

「それならその内、流惟さんは部屋を出られるかしら？」

「蒼ちゃんに頑張って、時間を稼いでもらうしかないのかな。ごめんね蒼ちゃん、ユーオン君」

律儀に謝る帽子の少年に、その音声が届いている黒髪の子供は、呆れたように大きく溜め息をついた。

「危険なのは櫛達も同じなんだから、油断しちゃ駄目だよ」

PHSの画面には、アンテナから紅い少女の戦局が届いており、紅い少女が僅かに押されていると幼い子供に伝える。

「……………」

最上階の己の寝所で、仕事も置いて何かを探している悪魔は、昨日何者かの来訪があつた事は銀色の死神から伝えられているようであり。

「……わたし達だって、母さん、多分わかってる」

元はその悪魔から与えられた鍵に、幼い子供は真意を測りかね……悪魔が探しているものすら感じ取った中で、不思議そうに首を傾げるしもなく。

しばらくして、ようやく悪魔が部屋を後にし、北の階段から下に降りていった中で。

下の階で物騒な闘いを起こしている者達に気付かないように、幼い子供は、より強く意識した暗幕を張り巡らせた。

悪魔が出て行った事を確認した後、すぐに東西二つの扉から別々に侵入した少年少女は、どちらの扉の鍵も固く閉め切る。

「悪いけどこれで、逃げられないわよね」

獣には開けられるはずのない、鍵のかかった扉を後に、そつと赤い髪の少女と帽子の少年が、静かにベッドの方へと近付く。

「……………」

幼い子供は悪魔が探していたものの方が気になり、眠る仔狐は年長者に任せ、サイドテーブルの方へと向かう。

「……………」

そこには確かに——……………幼い子供に、瑠璃色の髪の少女がまだ在るはずと知らせ、だからこそ探し求めていた……………先日までは確かに、瑠璃色の髪のこの牀の傍らにあった少女の大切な物がぽつんと安置されており。

「やっぱり……………母さん……………」

それをわざわざこのタイミングで探し、放置していく母の……………その母に宿った悪魔の望みすら、実は同じだと子供は悟る。

それを同じように望みながらも、叶う見込みも少ない事を、知っていた彼女にとつて……………そうして瑠璃色の髪の少女自身に、この先を選ばせる事しか出来なかった哀しみを。

サイドテーブル上にある、ごく小さな巾着を子供は手に取る。

「……………」

手に取るだけで自然と、子供の頬を濡らしていく理由なき涙に、

「やっぱり……………ここに、あるんだ……………」

小さな巾着を広げ、子供はそこに在るものを、感じただけでなく全てを確かめるために明るみに晒す。

—つまない物も入ってるけど、お守りになるといいな—

今まさに、広いベッドの方では、仔狐を捕獲しようと少年と少女が呼吸を合わせている中で。

幸薄くも、常に微笑んでいられた瑠璃色の髪の少女を確かに支えてくれた、誰かが込めてくれた温かい思いがそこに在った。

—ラピちゃんにいいことありますように—

上質の天然の琥珀石から造られた、小さな狐の形をしている、厄除けのお守りとしての巾着の本体と。

一緒に詰められていた、折り畳まれた紙に拙く書かれた……………少女がおそらく、最後まで気付かなかった少年の心があった。

—ラピちゃんはずっと、仲良く一緒にいられますように—

捕まえた！ と帽子の少年が、歓声をあげた横で—

瑠璃色の髪の子供はただ、紙を握り締めながら立ち尽くした。

全く感知出来ない謎の侵入者に、突然全身の自由を奪われた仔狐は、しばらくじたばたと力の限りに暴れ回っていたが。

「ごめんね、怖くないよ！ 大人しくしてね！」

「猫羽ちゃん！ 捕まえたけどこの仔、どうすればいいの！？」  
仔狐をなるべく傷付けないために、薄布にくるむ形で捕まえた帽子の少年と赤い髪の少女は、ベッドの足元に近い位置にあるサイドテーブルの方の、幼い子供の後ろ姿を必死に見つめる。

「……………」

少女達に背を向けたまま、呆然と立ち尽くしている子供は……辛うじて、巾着の中身を元に戻し、決して失くさないよう腕に引っ掛ける理性だけはそこで取り戻し。

「……………離して……………」

——え？ と。あまりに小さく拙い声が、聞き取れなかった赤い髪の少女と帽子の少年は。

その時不意に、くたっと動かなくなった薄布の内の仔狐にも気付き、少女は怪訝そう、少年は不思議そうに、仔狐と子供を交互に見つめる。

瑠璃色の髪の子供は——ただ、全身を襲う衝撃を堪えながら。

体は涙している事も、本来の自身が望んだ心もわからずに。ただそこに在る記憶が、理性で願った事だけを、呪うように唖れた拙い声で口にする。

「離して……………鶇、ちゃん」

「……………え？」

「ちよつと……………猫羽、ちゃん？」

ゆつくりと、赤い髪の少女と帽子の少年の方に振り返った、瑠璃色の髪の子供は……………。

「私に……………これ以上、近付かないで……………」

切なる己への怒りと——哀しみを湛えた顔で彼らを見つめる。

「……………ラピ？」

「……………ラピちゃん？」

その仔狐を捕まえれば、瑠璃色の髪の少女に会えると子供が口にしていた事の、本当の意味を——

誰にも消しようのない程、真っ直ぐに向き合う事になると、赤い髪の少女と帽子の少年は知る。



ずっと音声を拾っていた、魔界の城の最上階の異変に。

その聡明過ぎる黒髪の子供は、すぐに気が付いていた。

「猫羽さん！？ もしかして、貴女——」

「……うん。ラピスに体、取り返されちゃった」

PHSから響く呑気な声色に、黒髪の子供は強く頭を抱える。

「ラピスの記憶が見つかったから、思わず触っちゃったら……」

コハクも捕まったから、ラピス、こっちに来たみたい」

「それなら今の貴女は、ラピスの意識があるって事ですか!？」

「うん。もう止まっちゃった時間だけど……今、わたしの体で

喋ったのは確かに、ラピスの最後の心だよ」

そこにあるのは魂だけで、少女本人ではなかったとしても。

訴えられる心は確かに、少女のものであると子供は伝える。

赤い髪の少女と帽子の少年に、己が誰であるかを看破された

瑠璃色の髪の少女は。

脇目もふらずに、扉の鍵を開けて部屋から飛び出していった。

「——何処行くの!？」 猫羽——いや、ラピちゃん!？」

「櫛はその仔をお願い! ここから動いちゃダメよ!？」

わけがわからないながら、何処からか友人がその妹に何故か  
憑依したのだと術師である赤い髪の少女は悟り、必死に子供を  
追いかける。

しかし拙い人間の気配——それも既に死した者、更に気配を  
作る基の霊核も無い相手は、鋭い靈感を持つ赤い髪の少女でも、  
その位置を探る事が全く出来ず。

とにかくがむしゃらに階段を下りていった赤い髪の少女を、  
まだ回廊に隠れていた瑠璃色の髪の少女は、黙って見送る。

「ツグミ、行っちゃった……まだわたし、上にいるのに」

「櫛に伝話します! すみません猫羽さん、しばらくPHSは  
空けて下さい!」

それなら、同じ階にいる帽子の少年に連絡をとる方が良いと、  
世界を隔てた位置にしながら的確過ぎる援助の手を出す黒髪の  
子供に、幼い子供はまたも尊敬の嘆息を洩らす。

黒髪の子供が帽子の少年に伝話する間、幼い子供の意識は、  
灰色猫とアンテナから伝わる両方の情報を改めて観ていた。

「……狐魄に何をした、アンタ達」

銀色の死神はただ、届き続ける誰かの悲鳴に、自らを守る力の  
制限を無遠慮に解き放ち、

「馬鹿、卑怯者、力なんて使うな! 正々堂々と剣で闘え!」  
それが死神自身にもとても良くない状態であると、多少なりと  
焦った兄弟子は、あえて罵倒するように声を荒げる。

「あれま。エルちゃん達も随分、苦戦してる模様だねえ」

「——!？」

ざっと大きく、黒い女から距離をとった紅い少女は、息を強く切らしながら黒い女を睨む。

「ラピスちゃん、ちよつとばかり、帰ってきたみたいだけど？」

水華は話したくはないのかな？」

「うっさいな……今そんな事言つても、どーしよーもないでしょ」

紅い少女に出来る事は、こうして黒い女の相手をし続ける事で、黒い女による介入を僅かにでも軽減し——瑠璃色の髪の少女の友人達が少女に関わりやすくする事だと、剣を構える。

「ええ!？ ラピスちゃんまだ、この階にいるの!？」

P H S から連絡を受けた帽子の少年は、薄布にくるんだ仔狐を大事そうに抱えながら、部屋を取り囲む回廊へと出る。

そんな少年を、まるで待ち受けていたかのように——

方形の回廊の角に隠れていた瑠璃色の髪の少女が、がばつと帽子の少年に襲いかかった。

「——ラピスちゃん!？」

「返して! 狐魄は私のだから、返して!!」

仔狐を包んだ薄布ごと掴み、帽子の少年から取り返そうとする瑠璃色の髪の少女に、P H S も取り落としていた少年は慌てて抵抗する。

普通であれば、幼い子供の腕力など問題にもならないが、

「ラピスちゃん、どうしたの!？ どうして猫羽ちゃんと一緒にラピスちゃんがいるの!？」

全身のリミットを外したような相手に対して、混乱の強過ぎた帽子の少年は、仔狐の保持だけには意識を集中出来ず、何度も仔狐を抱える腕を解かれかける。

「違う——……こんなの私じゃない!! お願いだから返して、ここから帰って、誰も近付かないで——!!」

「でもそのお守り、ラピスちゃんのもでしょ!？」

必死に仔狐を奪わんとする、少女の腕にかかる小さな巾着に、贈り主の少年は当然ながら気が付いていた。

「大事にしててくれたんでしょ!？ だからここまで、持つて来てくれたんじゃないの!？」

その媒介を身辺に置いていたのは、短い時間でありながら、少女の魂と記憶を宿す程に強い想い入れを受けた依り代を……そんな事は露知らずとも、少年は少女の想いだけを受け取る。

「僕達、ラピスちゃんに会いに来たんだよ! 僕も鶴ちゃんも、蒼ちゃんも猫羽ちゃんも!」

「……………!!」

瑠璃色の髪の少女の片腕を掴み、少女の深い青の目をまっすぐ見つめて真摯に叫ぶ少年に、少女はぐつと声を詰まらせる。

突然PHSから応答が途絶えた黒髪の子供は、必死に帽子の少年に呼びかける。

「櫛！？ 櫛つてば！ もう——どうしたっていうのさ！」

仕方ないので一度通信を切り、改めてPHSの現在の持ち主に呼びかける。

「今、どうなってるんですか、猫羽さん！？」

「……ラピスがクウから、コハクを取り戻そうとしてる」

「櫛は無事なんですか！？」

「うん。兄さんはソウが止めてくれてるし、ラピスにはクウを傷付ける気はないもの」

そこではたと、黒髪の少年は大切な事に気付く。

「鶯ちゃんはどうしてるんですか！？ まだ戻ってない！？」

「わからない……ツグミだけは、何も持ってなかったから……」

現在、体を使えない状態の幼い子供には、目の状況以外には、アンテナや灰色猫、PHSから届く情報しか把握出来ず、

「じゃあラピさんは、狐に戻れなければそのまま、それってつまり猫羽さんは外に出られないままですか！？」

「そうかも。困ったね、ツグミを探せないね」

あつげらかと答えるPHSに、それだけじゃないです！ と怒ったように黒髪の子供は応答した。

「狐を渡せばラピさんはまたいなくなっちゃうし、かと言って渡さないと、猫羽さんが消えちゃうじゃないですか！」

「……何で？ わたしは悪魔を使えば、違う依り代で動く事も、お話も出来るし……ラピスがそうしたいならそれでいいよ」

その少女の躰に在る以上、存在は保たれ、ただ活動媒体が少し変わるだけだと、幼い子供は実に達観したものだ。た。

「何か違いますそれ！ どっちにしてもラピさんも猫羽さんも幸せじゃない気がします！」

「そうなのかな……うーん……」

「それにみんな哀しみますよ！ とにかくまず今のラピさんを止めないと！」

思わず黒髪の子供は、そこで魔界の扉に入るために、子供の代りに扉を守る仮初めの使い魔——式神を創ろうとしたが、

「……つて、着信！？」

応答の途切れた帽子の少年から改めての連絡に、黒髪の子供は慌ててPHSを本来の機能に切り替えた。

「悠夜君！？ 僕だけど、ラピちゃんが上に逃げちゃったから、

追いかけるね！ 鶯ちゃんや蒼ちゃんには、心配しないでつて伝えて！」

「上……つてまさか！？」

最上階の更の上層は屋上であるとすぐにも思い至った子供は、逃げた者の意図を考えて血相を変えるが、

「大丈夫だから二人で話させて！ ラピちゃんは猫羽ちゃんを傷付けるような事は絶対にしないよ！」

それだけは確信を持って伝えると、帽子の少年は通信を切り。瑠璃色の髪の少女の後を追ったらしい少年に、黒髪の子供は、何とか魔界入りだけは思い止まったのだった。

その長い階段を、幼い体で必死に駆け上がる、瑠璃色の髪の少女の息苦しい胸には――

ただ一つの、最後の心が、繰り返して少女を追い立てていた。

――私なんか……

魂しかない少女の心は、その記憶と理性にのみ支配される。

――私なんか消していいから……

独りきりで消える事を拒んだ心を、最早拗う事は出来ずに。

――誰にも知られずに……消える事が出来れば……

ただそれで、少女は良かったのだと――

少女自身、最後まで気付かなかったある間違いを願いつける。

「……………でも、ラピス……………」

少女の内に潜む幼い子供は、その間違いを間違いとは知らず。

「死んだら……………ずっと、独りだよ……………」

その真の願いだけを汲み上げ――確かに子供が味わってきた、救い無き暗闇の世界をぼつりと呟く。

呼吸は保ちながら、全く目を覚まさない薄い琥珀色の仔狐を大切に抱え……帽子の少年は、その紅い空の下へと辿り着いた。

「……………ラピ、ちゃん？」

「……………」

四方を柵の無い縁に囲まれる屋上の端に、俯きながら立った、瑠璃色の髪の少女は――

「……………もう……………ここには来ないって約束して……………くーちゃん」

その幼い体に舞い戻ってから、初めて少年の愛称を口にし。

顔は全く上げないままで、少年のそれ以上の動きをあっさり、次に続く言葉で封じた。

「これ以上近付いたら……………私は、このコノ事を殺す」

それを口にする程、少女が追い詰められている現実――

少年はただ、悲しげに立ち止まり、じっと少女を見つめる。

「このまま帰れば、くーちゃん達は……………元通りだから」

「……………え？」

「私のこと……………みんなには、忘れてほしいの……………」

「そんなの、おかしいよ……………ラピちゃん!？」

少年はただそこにある、取り返しつかない大きな間違いに、その救いを受け取った者の名を、全ての制限を忘れて叫ぶ。

「忘れる事なんてないよ！ ラピちゃんは確かにずっとここに——僕達と一緒にいたのに！」

「でも私はそうしたい——……私は、ここから消えたいの……」

「どうして！？ 何でそんな事言うの、ラピちゃん！？」

顔を伏せて口を引き結ぶ、瑠璃色の髪の少女は——

それを尋ねる少年の顔を見られないのだと、俯き続ける。

「私は……くーちゃん達に、おかしいって思われたくない」

「ラピちゃん……？」

「くーちゃんみたいに笑っていたい……くーちゃんにもずっと、笑ってほしい……」

それが少女を、長く支え続けた……少女と同じく血縁が無い、それでも明るく強く——優しく生きる少年への想いだった。

「私はただの人間だから……みんなの足手まといだから……」  
たとえ自らが死者であると、思い出せなかった日々にも、

「いつか……くーちゃん達とは、一緒にいられなくなるから」  
その思いは常に、優しい混血達に囲まれる少女は忘れられず。

「いつか消えるなら……私が消えたって、くーちゃん達には、  
ずっと気が付かないでいてほしい……」

優しい彼らが何一つ、気に負う事がないままで、

「またいつでも……会えたら笑ってほしかったの……」

その気軽さが続く事が、たった一つの少女の願いだった。

君にはわかるでしょ？ と。

空ろな黒い女は、肩で息をする紅い少女に悲しげに笑う。

「君があえて、失われた誰かを再現するのは……誰かがもう、  
ここにいないって、知られたくないヒト達がいるからだよね？」

「……」

「そのヒト達と共に在る間だけでも、人形になり切れれば——  
君の望みも叶うし、そのヒト達の悲しい顔も見ないで済むしね」

何を意固地になっているのかと、その兄弟子は静かに尋ねた。

「オマエが守るべきものは別にあるだろ？ ここで倒れて……  
俺を止められたところで、何になるんだ？」

「……」

ぎり、と——動ける限界はとっくに過ぎていた銀色の死神は、  
それでも鳴り止まない悲鳴に耳を塞げず。

それなら自らの命に換えても、悲鳴の主の望みを叶える事が、  
とっくに一度破綻した死神の末路だった。

……そこで新たな、誰かの悲鳴が——

時間の止まりかけた銀色の死神に、届く事がなければ。

馬鹿馬鹿しい——と。

紅い少女はあっさり、黒い女の感傷を否定するように言った。

「別に、水華はずっとここにいろし……本人が外に出られなくなっただけだし」

既に光を失った羽を、しかしずっと留めていた紅い少女は、

「あたしは正直、このあたしをやるのが一番楽しいけど。でもそれだと——キャラが被るでしょ？」

つまらなさに、透明な羽をはためかせつつ、女を見返した。

「あたしと水華が別人なのは変えられないし。最初に生まれたあたしは今の水華だったし……それなら別に、状況に応じて、使い分ければいいだけじゃない」

「……使い分けれてるかな？ 君は無意識に、水華であるなど、自分を抑えてるんじゃない？」

「……………」

だから、誰かが真に望む時にしかその姿を現さないのだと——紅い少女が自らに課す制限を、とっくに知っていた女は笑う。

「別人である事を示さない——水華が消えると思ってるから」

その二人の少女の差異が、一見あまりに大きいために、

「水華が君になったんだって、君は思いたくないんだよ」

それは別のものであると、互いを残したい願いを叶えるために。

でもねと——黒い女は、鋭い霊的な感覚を持つ女ならではの、既に気が付いていたある真実を口にした。

「君のその羽は……確かに君のものなんだよ、水火」

「……………」

「命の無いその体に、君の羽が植えつけられて……それで体心が生まれたのは、羽がその体に合ってたからだよ」

それでもなければ、羽が光を失った後も、活動を続ける事は出来ない……人造の生き物である少女に宿った、確かな命の在り処を女は伝える。

「君は羽に操られていた人形であると同時に——その羽の主の、生まれ変わりなんだよ」

「……………」

「魔である体を守るため、新たに生まれた魔の心が君なだけで。君達は同じものだから……別に、キャラが被っていいんだよ？」

だからただ、羽が光を失ったのは、前の記憶を失っただけと。

必要であれば、以前の力も再び受け継ぐ事が出来るはずの、紅い少女に——笑しげに微笑んだ黒い女に。

「……………バカバカしいったら」

同じくらい楽しげに、不敵に微笑んだ紅い少女は……ずっと構える白い三日月の柄の剣に、限界の近い最後の力を込める。

ちょうど同じ頃、馬鹿馬鹿しいと——全く同じ台詞を、同じ剣士である少年が口にした事を、知る由もないまま。

「やめだ、やめ。余所が気になってばっかりの奴と、真面目に闘うのは時間の無駄だし」

「……………」  
何が起きたか、明らかに集中力に低下を来たした銀色の死神に、  
剣士の少年は肩を竦めて刀を収めていた。

「……………」  
銀色の死神自身、何故その、見も知らぬ相手の小さな悲鳴——  
城の何処かのトラップに引っかけたらしい誰かが、そこまで  
気になるのがわからず、不服げながらも剣を収める。

「……………アンタ達は、これからどうするんだ」  
「——？」

悲鳴のした方に向かうため、剣士に背を向けた死神は、最後に  
それだけを静かに尋ねた。

「狐魄を……連れていくのか」  
「さあな？ その辺りは俺にはさっぱりわからない」

「……………」  
この後はただ、同伴者と合流する予定の剣士の少年に、死神は  
暗く澱む赤い目を僅かに揺るがせ、

「……………早く……仲間を連れて、ここから帰れ」  
既に感じ取り始めていた……誰かの昏い願いの行き先に小さく  
息をつき、その場を後にしていた。

……終わった、と。

今もはらはらと、PHSから拾った音声と、画面に映る紅い  
少女の戦いを見守り続ける黒髪の少年に、不意にその終止符は  
告げられていた。

「……………ソウが勝つて……兄さんが、ツグミを探しにいったよ」  
「——本当ですか!？」

「水火も頑張ったよ……なるべく時間、引き延ばしてくれた」  
そのために誰か達が十分に話を出来た事に——ただ、感謝する  
ような声で呟く。

PHSの小さな画面の中では、音声までは拾えないものの、  
紫苑の髪と目をした男が座り込んだ紅い少女に代わるように、  
黒い女に両端に鎌がつく武器を突きつけており。

「……………いい年して、子供、苛めんな」  
「失礼な。剣士相手に長物を取り出す鬼に言われたくないです」  
元の他称は、戦う武器職人だった男は、体の不調を押しつつ  
自らの武器を久々に取り出し……さすがに疲れが来ていた女を、  
そのまま牽制し続ける。

「全く……烙人の助けが入るようじゃ、あたしもまだまだだわ」  
くすりと、少し困ったような顔で、微笑んだ紅い少女だった。

様々な所で、色々な誰かの小さな闘いが終わっていく中で。俯いたままの瑠璃色の髪の少女に、帽子の少年は……どんな声をかけて良いかわからず、ただ自身の素直な想いを口にした。

「……ねえ。僕達と一緒に……ジパングに帰ろう、ラピちゃん」  
「……………」

それが出来れば苦勞はしないのだと、少女は俯き――

「……もうくーちゃん達の知ってる私は、ここにはいない」  
僅かにだけ顔を上げて、少年が抱える仔狐をじっと見つめた。

それでもあくまで、事の次第を口にはしない少女は、  
「くーちゃん達とは、ずっと一緒にはられないから……」

既に時の止まった心は変えられず、同じ望みを口にする。

「そんな私なんか……もう、消えちゃえばいいの……」  
何よりも……消え残る醜いだけの姿を、忘れてほしいと。

けれど少年は再び――どうして？ と。

困ったような儂い笑顔で、俯く少女に笑いかけた。

「それって……僕達とずっと、一緒にいたいって事だよね？」

取り返しのつかない大きな間違いに、今も気付けない少女に

……少年にとつての真実を、泣き出しそうな笑顔で伝える。

「僕達の知ってるラピちゃんが、もういないって……だから僕達に、忘れてほしいって言うなら……」

いつか消える身であれば、消えた事に気付かないでいてほしいという少女の望みは、

「ラピちゃんがない事を……無かった事にしたいんでしょう？」  
それは消えたいという望みと真逆の……生を希む願いであると。有り得なかった夢が続く事が、少女の本当の願いだった。

俯いたままの少女は――廻り続ける心を、不意に停止させる。

「そんなの僕にはとづくに、無かった事だから……」

ある昏く赤い夢を知らず、今もそこに立ち続ける少年は、  
「どんなラピちゃんだって……帰れるなら、一緒に帰ろうよ」

それでも今の、仮初めの少女が消える真実だけは無意識に悟り。

腕の中の仔狐を、大切なものを守るようにぎゅっと抱き締める。

「ずっと一緒がいいって、ラピちゃんが思ってくれるなら――」

「……………」

「それなら僕と……ずっと一緒にいてくれる？」

心からの笑顔で、それを朗らかに口にした少年を、僅かに顔を上げて見てしまった少女は……ぼふっと、全身で赤面し。

「……何だ？ 熱でもあるのか、猫羽？」

灰色猫に連れられ、屋上まで上がってきた剣士の少年の前で、真っ赤なままだと倒れ込んだ瑠璃色の髪の子供だった。



\*

それから、最上階の寢所に凶太く待機していた一行の元へ、そこで待てと帽子の少年に言った赤い髪の少女が帰って来れたのは……かなり時間がたってからの事だった。

「……どーなってるの、コレ？」

赤い髪の少女が絶句した通り、そこでは異様な光景が少女を待ち受けていた。

「良かった。ツグミ、ケガはない？」

「猫羽ちゃん……体は大丈夫なの？」

うんと頷く瑠璃色の髪の幼い子供は、灰色の猫のぬいぐるみを抱え、すっかり元通りであり、

「ラピスも帰ってきたよ——ツグミ」

嬉しそうに言う子供の視線の先には……ベッドの足下に座った帽子の少年の隣に、無表情でぴたりと首に手を回しくつつく、薄い琥珀色の狐の耳と尻尾を生やす、謎の着物の人影があった。

「……やっぱ、あれ、ラピなの？」

無表情に赤い髪の少女を見返しキョトンとした、少女の友人と生き写しで髪が白、目が紅と色が違う、狐魄と呼ばれる狐娘に、少女は啞然と現状を受け入れる。

「全くだ。魔界なんて行くから、ラピもラピ狐になるんだろ」

長椅子にどんと座る剣士の少年は、事態がわからないながらも少年なりの解釈を既に適用しており、帽子の少年もあははと、苦笑しながら少女に知るだけの状況を伝える。

「コハクちゃんだけだと、ラピちゃんの記憶はないみたい……それは帰った後に悠夜君と相談してみなさいって、鶯ちゃんが帰る前に、ラピちゃんのお母さんが教えてくれたよ」

「……そうね。多分今のこのコ、真つ白な使い魔みたいな感じ。その分色々、正直になってるみたいだけ……」

ぴったり帽子の少年にくつつき、無表情でも満足そうな狐娘に、「何かでも……幸せそうね、ラピ」

「うん。思い出したら辛いだろうって、母さんは言ってた」

心無きままの魂には重過ぎるものと、あえて離された記憶……小さな媒介の巾着を腕にかけながら、幼い子供は淡々と呟いた。

「でも……思い出した方が幸せなことも、一杯あると思う」

「そうだね。僕も出来れば、ラピちゃんに思い出してほしいな。ラピちゃんとまた話したいし、みんなで遊びたいしさ」

……と、赤い髪の少女が僅かに痛ましげな顔をするのに対し、帽子の少年は儂げながらも楽しそうに微笑む。

「魔界を出たら、コハクちゃんも狐に戻るんだって」

主となった帽子の少年には、その魔を普通の場所で人型に保ち、使役する事は難しいようであり、

「それなら常時もふもふだね。肩乗りだ毛皮だ、温かいよ♪」  
そこで心から嬉しそうに笑った少年に、思わず安堵しつつも、がくりと肩を落として苦笑した赤い髪の少女だった。

既に事情は聞いていながら、一行が連れて戻って来た仔狐に、黒髪の子供はしばらく難しい顔をして考え込んだ。

「ラピさんの心を……戻すかどうかって事だよな？」

昨日のように、紅い少女の部屋に集まった一行は、ベッドで寝ている紅い少女を起こさないように小声で相談するが、

「大丈夫だよ。水火は起きても怒らないし、一度眠れば、全然いつも起きないし」

何故か黒いリボンを外して髪を下ろし、小さな巾着の飾り紐になるように取り付けている幼い子供は、同室者に対してかなり遠慮のない事をおつさり口にする。

襟巻のように薄い琥珀色の仔狐を肩に乗せる帽子の少年に、黒髪の子供は躊躇いがちに、考えていた事を口にした。

「それはラピさん自身に……選んでもらえばいいと思う」

「——と言うと？ 悠夜君」

「柵にラピさんがいる所を教えるから、直接きくのはどうかな」  
「悠夜……それって……」

仔狐が現状に至った理由の詳細はわからないでも、その中身がこの世界にない事を確信した赤い髪の少女が眉を顰めるが、

「それがいいだろ。結局ラピ狐の問題だしな」

淡々と言う剣士の従兄に、確かにそれ以上は難しいと項垂れる。

少年少女達を覆い続けた暗幕は、今は在っても無くても特に問題ない状態となっているようであり、たった一つの内容以外特に制限は受けず、一行は相談を続ける。

「僕もそれでいいよ。ラピちゃんが嫌がる事はしたくないし」  
肩の襟巻をさわさわ撫でながら、帽子の少年は笑って言う。

「ラピちゃんの嫌だは当てになんないから、難しいけどさー」

「……多分、今度会うラピさんは、何も嘘はつけないと思うよ」  
そこに在るのは、何にも飾られない心そのものと知る術師の子供は、

「良くも悪くも……本当の気持ちを教えてくれるよ」  
それがどちらに転ぶ事になるか——確かに安らぎを得たはずの相手に、面持ちを少し硬くする。

「……クウ。これ」

幼い子供がベッドから降り、くいくいと床に座る帽子の少年の服を引っ張った。

「え？ これ、どうするの、猫羽ちゃん？」

幼い子供から手渡された、黒いリボン付きでペンダント化した小さな巾着を、不思議そうに少年は見つめる。

「……受け取ってくれそうなら……ラピスに返して」

誰かの残滓を宿し、幼い子供に『忘失』を与えた黒い媒介と、仔狐の記憶を宿す琥珀石を、惜しげなく手放した子供だった。

夜が遅くなってしまったものの、二度泊まるには着替え等の問題もあり、暗い川辺を少年少女達は帰路についた。

花の御所に滞在する目的は果たしたものの、挨拶も何もして  
いない幼い子供は、赤い髪の少女に手をひかれ、共に御所へと  
青白い月夜の道に向かう。

「ねえ……ツグミはずっと、何処をさまよってたの？」

「さあね。結局アイツ——最後まで私に気付かなかったし」

魔界の城で一時期はぐれ、最後に戻って来た赤い髪の少女は、  
自身を最上階の近くまで連れ戻してくれた相手を思い出してか  
不服気に息をつくが、

「ごめんね……兄さん、知ったら絶対怒るから……」

その相手の暗幕を解除しなかった幼い子供は、バツが悪そうに  
ぼつりと呟いた。

しかし赤い髪の少女は、そこで困ったように笑うと、

「無理もないわよね。色んな心配事や辛い事があり過ぎるから  
……これ以上負担かけるのも、今はきついだらうし」

幼い子供の判断は正解であると、少女が誰かわからない事で、  
かえって気楽に話していた相手を思い出して苦笑する。

「ラピの事……アイツ、落ち込んだんじゃない？ 猫羽ちゃん」

「……………」

前に行く少年達の後ろ姿を見ながら、少女もぼつりと呟いた。

「私は正直——どう受け止めていいか、今もわからない」

「……………」

「何があったかもわからないし……このまま、今までのラピに  
もう会えなくなったら……何かを後悔する気がする」

その相手が、今に至った理由——直接手を下した者の事も含め、  
それだけは口に出れない状態が維持されていた。

「欄に任せるしかないけど。何も出来ない、言えないって嫌ね」

「……もう、それは届いてると思う、ツグミ」

少女達その温かな心やりで、どれだけ相手が救われていたか  
知る幼い子供は、

「何かしようとしたら、わたしや兄さんみたいになるから……」

それはお勧めしないと、無機質に口にしていたが。

「猫羽ちゃんやユーオンは……これで良かったの？」

これ以上を望むかを含めて、真摯な目で尋ねた赤い髪の少女に、  
「兄さんは——わたしやラピスが幸せなら、元気になると思う」  
だから現状ごと変えたかった子供は、どんな形でも良いと笑う。

「兄さんのことは、変えられないけど……ラピスも同じ思いで  
わたしを助けてくれたから、わたしもラピスに会いたかった」

その我が侘にここまで付き合ってくれた者達を、揺るぎない  
信頼と親愛で幼い子供はまっすぐに見上げ。

「ありがと、ツグミ。ツグミ達のおかげで、諦めずに済んだよ」  
子供の兄とよく似た、何処か儂い顔で微笑む相手に——

赤い髪の少女は青白い月光を背に、私こそと静かに笑った。

ある天上の水辺に、一人の少年が降り立った時。

「……………来て、くれたんだ……………」

少年を、一人きりを選んだ少女が出迎えたのは、まるでその運命の時を望んで待つていたかのようなだった。

少女が一人きりだと知って、そこに降り立った少年は、

「ここでずっと……………待つてくれたの？ ラピちゃん」

どれだけ長い時となっても、一目でいいと再会を望んだ少女に……………薄い琥珀色の襟巻を身に着ける少年は、儂げに微笑み。

「……………連れて行って、くれるの？」

そのために少年が現れた事——咎人の少女と共に在りたいと願ってくれている少年に、少女は泣き出しそうな顔で微笑んだ。

少年は少女の大切だったものを、少女に返す事で受け取り。

その後一言、命に刻まれる言葉を口にした。

「ずっと——一緒にいてくれる？」

少女はただ、嘘偽りの無い心でそれに応え。

「……………くーちゃん……………大好き……………」

何よりも求めていたもの……………少年の笑顔を映し続けていく。

C r y    p e r s .

—sin-eating—

C 3 ・ 外 伝      了

C r y p e r s .

—strayer—

C 3 ・外伝余話

八歳の頃からの友人が、『魔界』に行ったという話を聞いた時から……天才と言われる従弟程ではないが、強い霊感と力を持ち、呪術という魔道を修める少女は嫌な予感を隠せなかった。

「離して………鶯、ちゃん」

「………え？」

友人が元気であるか、ただそれを確かめるため、魔界という異郷の城に赤い髪の少女は足を踏み入れたが。

そこで目にした、少女に振り返った瑠璃色の髪の友人は。

「………これ以上、近付かないで………」

「………ラピ？」

初めて出会った頃に近い顔で、昔と似た言葉を口にし。切なる己への怒りと——哀しみを湛えた顔で少女を見つめる。

—私なんかと……仲良くしない方が、いいよ—

その頃は実際は、もっとトゲトゲと拒絶された気がするが、幼い少女がつるんでいた従兄、街の少年への相手の態度は、それだけ訴えたかったのだと………彼らは無意識にわかっていた。

今は全く人の出入りのない書庫で、ある本を最初に見つけた夕陽色の髪の剣士の従兄は、難しい顔で先日に口にした。

「ふむ。魔界に行くと誰でも悪魔になるって、書いてあるな」

「それ！ 貸してその本、蒼！」

過去にそうした知識も、一通り教えられた少女は、それ以上の解読をあつさり諦めた従兄から本を奪いとる。

「悪魔になつちやうってどーいう事、蒼ちゃん！？」

「鬼やら魔物やら妖獣やら……カタチは色々あるみたいだが、そいつらしい姿になるみたいだ。そうなる奴ばかりじゃないが、なる確率の方が高いみたいだな」

「じゃあラピちゃん、ひよつとして悪魔さんになつちやうの！？」

どーなんだろ、鵜ちゃん！？」

書庫までついてきた街の友人、帽子の似合う白金の髪の少年は従兄にしがみつくように、手にした本の内容を確かめる少女の動向を見守る。

「……………」

少女は努めて冷静に、古書の内容を確かめていく。

誰も見下げ、蔑む存在である『魔』とは。

その本質は、ヒトの望みを叶えるために存在するものであり

……それなら何故蔑まれるのか、そこには書いてあった。

『魔はヒトを糧とし、ヒトの形に留まらず、ありとあらゆる手段を以て、ヒトの望みを叶えるものである』……要するに、願いを叶えるためにどんな怪物にもなるし、どんな事でもするイキモノになりますって書いてあるわ」

そうした本性を頭わにする世界が魔界であると、難しい顔をしながら言う少女に、少年は震え上がった。

「じゃあ下手したら、ラピちゃん今頃怪物さん！？ どうしよ、

会った時にわからなくて無視しちゃったら傷付くよね！？」

「落ち着けよ。そいつらしい姿になるなら、ラピならそんなに酷い事にはならないだろ」

自然に冷静な従兄は、意思の力が己の姿、在り方を左右すると実感があるようであり。また己の周囲の者についても、簡単に自らの形を失つたりしないと信頼しているようだった。

「逆にユオンの方が心配だ。アイツすぐ、周りに影響されるし」同じ剣の師につく弟子であり、彼らの友人の兄貴分である者の事を口にする従兄に、少女も全く同意で強く頷いた。

「ラピはああ見えて頑固だしね。ユオンなんかは……悪魔になつたらなつたで、別にいいやって割り切っちゃいそう」

従兄と少年は、確かにと揃ってそこで頷いた。

ただし少女は——その友人の、昔からの弱点も知っており、唯一それだけはずっと気にかかっていた。

「……人間捨てたいとか、ラピなら言っちゃいそうだけど」

弱いものを疎む心……それ故に、時に自らを拒む哀しい友人を。

—私なんか……消えちゃえばいいの……—

友人がどうしてそんな風に思うようになったのか。

出会った時からそうだったとしか、少女には言えなかった。

「ラピ……！ 待つて、何処——！？」

目指す者がもしや多少の『魔』になっているかもしれないと、彼らも少しは覚悟して魔界を訪れていたが。

一緒に連れて来た友人の妹に憑依するという、予想を遥かに超えた現れ方をした友人は逃げるように、相手を見つけたその城の最上階から駆け出て行ってしまった。

「ここで見失ったら、もう——」

とにかく追いかけて出たものの、茫然としている少女は全く普段の冷静な思考が出来ず、友人の気配も追えていないままで当てずっぽうに階段を駆け下りる。

「もう………何だか、会えない気がする………！」

相手が幸薄い生い立ちである事は、少女も感じていたが。

それを覆す程現在は優しい環境に恵まれており、特に少女も顔見知りの養母は友人を大切にし、こんな親バカなら素敵だと少女が思う程だった。

「ユーオンも流惟さんもラピも、みんなどうなったの………！？」

最初の回廊まで降り着いた少女は、すっかり友人を見失ってしまった事を認めるしかなく、そこで一旦立ち止まった。

少女がいる南の回廊とは対極の、北側では激しい剣戟の音が響いている。

「あのバカ。もう既にボロボロじゃないの」

そこで闘っているはずの、銀色の髪の少年——友人の兄貴分と、若くして達人の域に達する剣士の従兄を少女は感じ。

この城で友人と会うため捕まえる事が必要と言われた仔狐を、ただ守ろうとしているらしい銀色の髪の少年は、普段は金色の髪をしており。余程の事が無い限りは、命を削る負担を軀体に強いる銀色の髪にはならず、記憶や力を制限された金色の髪の少年が主体的に動いていた。

「でも……蒼に任せておけば、大丈夫そうかな」

だから今、銀色の髪の少年が消耗し切っているのは、従兄と闘っているからだろうと——そう判断した少女に余計な心配をかけずに済んだのは、銀色の髪の少年には幸いな事だった。

どうして銀色の髪の少年が闘うのか、少女にはわからない。

何故瑠璃色の髪の友人が現れ逃げたのかも、何もわからず。

「これ以上………追いかけた方がいいのかも、わからない………」  
どうすれば彼らの力になれるか、少女はただ、混乱していた。

「……一度、悠夜に相談してから、上に戻った方が良さそうね」

この城に来た転移の扉が現在地の近くだったため、その扉——ある客間の洋服箆笥を指し、少女は部屋の一つに入った。

入ってきた時も思った事だが……その客間は非常に明るく、可愛く飾り立てられ、とても悪魔の城の一室とは思えなかった。

「えーっと……どの箆笥だっけ？」

クローゼットも全部で三つあり、蔦のような桃色のバラの花の飾りがあしらわれ、似たり寄つたりの様相をしており、

「これだっけ？」

まさかそのような所に、可愛いものが大好きでお洒落と見える部屋の主の、趣味の畏が仕掛けられているとは……まだ混乱が残る少女は、警戒する事すらも出来ず。

「……ええ！？」

両開きの扉を開けた瞬間、まるで扉から手が生えるように、引き込むような強風と黒い光が少女を捉えるように出現し。

それと同時に、底抜けに明るい幼女のような声が場に響いた。

「禁断の扉によっこそ！ 此処こそはリリトちゃん屈指の秘境、無限の可能性を秘めたコスプレ王国なのです！」

「ええええええ！？」

「イタイケで可愛いお嬢様、一名様ご案内〜！」

嘘！？ としか叫ぶ間もなく。何が何やらわからない内に、少女の意識は突然遠くなくなってしまい――

後には、ぱたんと扉を閉じたクローゼットが残るのみだった。

\*

約半年前……金色の髪の少年に出会った頃の少女は。

瑠璃色の髪の友人と金色の髪の少年が、養子の兄妹であるということは全く知らなかった。

―オレはどこかで……ツグミに、会った事がある気がする―

今思えば、現状把握に極めて優れた勘の良さを持つ少年が、そんなことを口にしたのは――瑠璃色の髪の少女という、同じ知り合いの存在を感じていたのかもしれないと、夢現に少女は思い出していた。

―オレはツグミと一緒にの方がいい―

金色の髪の少年はそんな、真意のわかりにくい事を度々口にするので、これまでの少女は話半分に適当に流すのが常だった。

その反面、滅多に喋ることのない銀色の髪の少年は、何かを話す時には実に率直であり、

―殺さなくちゃいけない奴がいるんだ―

それでも率直なわりに言葉足らずで、結局理解に難渋するが、―殺さないとあいつは連れていかれる―

それが誰の事だったのか……今の少女には少しわかる気がした。



謎のヒト喰いクローゼットに取り込まれ、意識を失っていた少女が目を覚ましたのは、それからわりとすぐの事であり。

「——あれえ？ もうお気が付きい？ 謎のお嬢さん♪」

「……………へ？」

真つ暗な部屋の中で、唯一寝台の灯りだけが明るい、枕元に大量のバラの造花がまかれた広いベッドに少女は横たえられ、  
「つて……………!？」

隣で寝転んで肘をつき、少女を覗き込むようにしていた幼げな誰かの姿に、少女がある者の名を口にする前に、

「誰か全然わかんないけど可愛いーっ！ 絶対あなた、可愛いヒト間違いなしだあーっ！」

がぼつと幼げな誰かは少女に抱き着き、少女がそれ以上言葉を口にするのを物理的に封じ込めていた。

この悪魔の城に潜入するにあたり少女達は、少女達の存在に気付かれるそばから忘れられ、気にされなくなるという特殊な結界に守られている状態だったのだが。

「この、弱小ながら超上級悪魔たるリリトちゃんすら誤魔化す力なんてえ♪ でもとりあえず可愛いっばいから許すうー！」

「こ、このヒト、まさか……………!？」

目の前の誰かは、少女がそこにいる事は辛うじてわかるが、それが顔見知りとまでは思い至れないようだった。

「写真とったらさすがに残るかなあ、誰かわかんないけど一番可愛いの着せたいいなあ♪ さあさあ、言う事をきくのだー！」

「ちよ、ちよつと……………!」

誰かの腕の中でジタバタと暴れる少女を、少女より身長も低く見た目も年下そうな幼げな相手は、いともあっさり組み伏せ、少女の着物の細帯をひらりと解いてしまい、

「リリトちゃんの別荘に侵入して、秘蔵箆箆を覗いた罰だあ！

あなたは今から、リリトちゃんの着せ替え人形なのオ♪」

「えええええ!？」

暗い部屋の明るいベッドで、爛々と目を光らせる部屋の主は、少女が少し前に、臨時に加わらせてもらった旅芸人一座の……異国のふわふわの髪の人形のような、花形の一人であり、

「何で——<sup>るん</sup>淪さんがここに!？」

そしてそれ以上に、今まさに間着の襟を開き、少女から着物を脱がさんとする力は並々ならず、少女は心底の危機感を持った。

「や、やめっ……………!！」

「やめなーいっ！ 抵抗するなら眠ってもらっちゃうぞ♪」

相手の縄張りであるためか、呪術師である少女の力も使えず。他に身を守る術を、殺傷能力の高いものを持つ少女が、知人を相手にその使用の判断を迫られた……強い葛藤の直後に。

ボタンと大きな音をたて、鍵のかかった扉が蹴り開けられ、

「……………そいつに触るな……………淪」

扉の外の明かりを背に、銀色の髪少年がそこに立っていた。

ぴたりと——……少女を押さえつける力を和らげ、開かれた扉の方へ振り返った部屋の主は、

「きやああ、今日は時雨ちゃん出てるんだ、レアキャラだあ♪どーしたのお、ついにはちゃんと遊んでくれる気になったあ？」

あまりにあっさり少女を解放し、ベッドからぴよこんと降り、暗い中でも足一つ踏み外すことなく、銀色の髪の少年の元へと駆けていった。

「……あなたは元々、レンの彼女だろ」

とても嬉しいな相手に対し、少年は無表情に、冷たい青の目で抜き身の剣すら手にしている危険な状態だったが、

「やあーん、そんな冷たい時雨ちゃんがやっぱ超好みいー！せっかく時雨ちゃん出てるなら寄ってってよ、休暇中だけでもいいから遊んでよう♪」

ベッドに残された少女が慌てて着衣を直している間に、今度は銀色の髪の少年にくっついていてるらしき部屋の主だった。

「……………」

少年は無言で、くつつく相手を引きはがしたらしく、暗い中でベッドの方に近づく少年の後ろ姿にちいっと声がかかる。

「時雨ちゃん絶対押したら落ちるし！今度こそ見てるお！」

少年を止める気はなさそうな相手は、捕らえた娯楽を失っても、少年に悪印象は与えたくないようだった。

「……………」

ベッドの脇まで来た少年は、回廊で従兄と闘っていた時には身に付けていた黒いバンダナをしておらず、思わずほっとした少女が知るままの、無機質な表情の銀色の髪の少年であり、

「……やっぱり……さっきの奴らの仲間か」

しかし少年からは少女は、結界の存在のために、少女の存在はわかっても知り合いとわからないようだった。

それなら何故……と。少女は、ベッド上に座り込んだまま、

銀色の髪の少年を不機嫌そうに睨む。

「……私に何の用があるの？」

少女が誰かわからないなら、従兄と闘っていた少年がどうしてここに来たのか、少女には全くわからず。しかもそれは少年も同じようで、さあ？と無表情のまま無責任に首を傾げていた。

そうした無自覚で、危うい相手と少女は知っていたが、元々

言葉数の少ない少年は不意に少女の手をフッと掴み、

「最上階まで送るから、さっさと帰れ」

「え！？」

強引に少女を引き起こすと、不機嫌な顔の部屋の主の前を通り、突然手をひかれてわたわたとする少女を引っ張り部屋を出た。

「あなたの仲間はそこにいる……狐魄もそこにいる」

そこまでの動きは全く自然で、戸惑う少女が抗う余地もなく。

そこはどうかやら、城内ではかなり下の階層であつたらしく。

部屋を出てからは、少女の動揺を感じたのかすぐに手を離し、ついてくるよう黙って背中中で促して歩き出した少年に、

「……どうして？」

今度は少女は、はっきり言葉に出して尋ねた。

「私達は侵入者なのに……助けるの？」

「……」

少年は立ち止まると、ちらりと少女の方を振り返り。

それでも無言のままにいる少年に、少女は強く眉をひそめ、

「アナタは、あの仔……狐魄を守りたいんじゃないの？」

そもそも少年が従兄と闘う理由となった、謎の仔狐について、そこで尋ねずにはいられなかった。

「……」

振り返った状態から、少年はまっすぐ少女と対峙する形となり。

「あんた達は……狐魄が何なのか、知らなかったのか」

少女が本当に尋ねたかった事を感じたらしい勘の良い少年は、淡々と、何処か遠くを見つめるように口にするのだった。

「……」

黙り込む少女には、実際はある回答が喉元まで来ていたものの。

それを認める事が嫌だったのか、少女自身からは口に出来ず、

「……狐魄は……俺の知り合いの、抜け殻だ」

それも感じたように、青い目を伏せながら少年は曖昧に言った。

その後は少年は、有無を言わずに背を向けて歩き出し。

少女が意識を失う少し前には、ボロボロに感じられた少年の気配は、何かの力を使って少し持ち直したようであり。無言で長い階段を上がる後ろ姿には、体力的に危なげな様子はあまり見られなかった。

「……」

少年が持ち直した力が、少女が以前に少年に渡した水の護符の賜物と少女は気付かなかったが、

「……もう、意味、わからない」

それでも少年の姿が何処か危うげに見えるのがどうしてなのか、それも少女にはわからなかった。

何から何まで、わからない事だらけだと――

恨めしげに少年の背を少女が見つめていた時。

「……——え？」

「……」

じーっと……踊り場で立ち止まった少年が、自然な無表情で、何故か少女を見つめてきていた。

「あんた達は何で……ここに来たんだ？」

「——？」

「狐魄はあんた達と行きたいみたいだから、それはいい。でも……あんた達の目的は、それで良かったのか？」

その時の少年はおそらく、最大に優しげな無表情だった。

少年のその表情に後を押されるように、少女はあるがままの葛藤を、静かに口に出した。

「私達は……友達に会いに来ただけだ。でもそれは、迷惑な事だったのかもしれない」

「……………」

これ以上近付かないでと——悲鳴のような誰かの声だけが、今の少女の耳には残り。

誰かに近付くなど、命を削って闘った目の前の少年の事も、今の少女は直視する事が出来ずに目を伏せる。

しかし少年はあっさり……無表情のまま首を傾げ、

「……………何で？」

まるで金色の髪の少年の時のような、平和な声色で口にした。

「何であんたは……そう思うんだ？」

「……………」

少年より二段下で立ち止まった少女は、改めて少年を見上げる。

心から不思議そうな無表情の少年に、少女は躊躇いを忘れるように話を続けた。

「友達の気持ちかわからないの。……ううん……今まで何も、訊かなかつたから……わかるはずなんてないよね」

それが何よりの気持ちの棘だった事を、口にして初めて、少女自身が気が付いていた。

「もつと色々、話しておけば良かったって。もしかしたらもう……話す事も出来なくなっちゃったかもしれないから」

「……………」

まだその事実を少女は認めていなかったが。敏腕術師としての少女は冷静に、事態を悟りつつあった……少なくとも少女は、これまでと同じ状態の友人に会う事は出来ないのだと。

それはじわりと……気丈な少女の視界を滲ませる推測で。

推測を推測に留めるための如く、黙り続けている少年は……それでもまっすぐ少女の黒い目を見ながら、静かに言った。

「あんたが訊かなかつたなら。それは必要なかったんだろ」

「……………？」

「訊いてほしくないって、あんたならわかるんじゃないのか。」

それなら……それで良かったんだ」

無意識に相手の心を感じ取る、鋭い感性を持つ少女達に——それこそが誰かの救いだったのだと、少年は伝えるように。

「でも……それでも、話さなきゃいけない時だってあるわ」

「……………」

「話せないんじゃないかって話したくない子が相手なら、尚更……私達から、無理に訊いても良かったのかもしれない」

目先の望みを叶える間柄だけが、救いではないと俯く少女に。そうだなと少年は、何故か僅かに……綻んだ口元で頷いていた。

少女達はそこから再び、歩みを再開したが。

黙って階段を上るのが段々と気づまりになっていた少女は、そのまま話を続ける事にした。

「昔からそういう子だったの。傍目には凄く直球なんだけど、本心の裏に、本当に大事な本心があるっていう感じ」

「……………」

少女の住む街、島国ジパングの中心地京都の南に引越し、京都にジパング語を習いに来ていた幼い友人は、

「私は、みんなと遊びたくなかないもの」

従兄、帽子の似合う連れと少女が街を出歩き、友人を見つけて声をかける度にそんな風にトゲトゲと返し、不機嫌そうな顔を隠しもしなかった。

そんな返答は紛れも無く、幼い友人の本心と少女達はわかり、  
「どーしてー？ 何で僕達と遊びたくないの？？」

それなのに怖いもの知らずに尋ね返す連れに、その先の本心を友人が口にする事は、思えば何度かあった事だった。

「だって……………私といたら、みんなも……………」

その頃の友人は、ジパングの隣人とは言葉も通じず、珍しい色の髪をしているせいか悪魔憑きなどと呼ばれる事があり。

少女達をそこに巻き込みたくないという、拒絶こそが友人の親愛表現だったのだと、苦笑いしながら少女は語る。

「その子の兄貴も似たような奴なの。兄貴と違って、その子は段々、違うやり方を覚えて丸くなっていったけど」

「……………」

何度となく街で出会い、時に幼い友人に酷い事を言う相手を撃退し、それ以外は当り障りない声掛けを続けていく中で、

「……………みんなは今日は、どこに行くの？」

明らかに幼い友人の態度が徐々に軟化し、しかしそれを自分でブレーキをかけようとするかに見える意固地な姿に、ますます少女達は相手を構いたくなるパターンとなっていた。

「お淀で鬼ごっこするんだよー。ラピちゃんも来る？」

「何で。別に面白くないよ、そんな事したってー  
相変わらずわかりにくい言葉をそこで翻訳すると、身体能力が彼らほど高くない自分がいても話にならないと、幼くも冷静な見立てで遠慮する友人だった。

もしも相手が、彼らの声掛けをただ待ただけの自ら動けない子供だったら、少女達はその内関心をなくしていただろう。

しかしあえて梃子でも動かさなければならぬらしい相手を動かす事は、とても面白く……………一度動けば、その後の瓦解は速かった。

「……………鵜ちゃんって、呼んでいい？」

その程度の事をはにかみながら尋ねてきた友人の姿は、今でも少女は、何故か忘れられなかった。

養父母と共に様々な地域を旅する友人は、旅先の土産話や、特産物などをよく、養母と共に持つてくるようになった。

「話してみれば本当に、色々なことを知ってる子だね。私達が純粋な人間じゃないって初めからわかってたみたいで……でも全然怖がったりしなかったし」

「……あんた達は、化け物の力を持つてる事は隠すのか？」

「怖がられたらいけないなって、大っぴらには出来ないわ」

少女達は術師として名の通った家系でも、術師である事すらも、弱小な人間からは時に迫害や糾弾の材料にされる事もあり、

「普段は意識してないけど……はっとするような時はあるの。」

私の事というよりは、私の周りの事の方が多いけど」

特に強い力を持つ身内——同じ子供である従兄弟達は、決して平坦なばかりの道程ではなかった事を少女は思う。

「アナタは、隠さないの？」

普段は金色の髪をしている少年と、目の前の銀色の髪の少年は、あまりそうした事に気を使うようには見えず、

「隠しても——すぐばれる」

無表情のままつまらなさそうに呟いた少年に、思わず少女は、初めて現れた頃の少年を思い出して口元を綻ばせた。

「それは、そうでしょうね」

全身を厚いケープで覆う程度しか、自身の異形さを隠す方途を知らないらしい少年には、尖った耳や珍しい目の色からも到底、化け物である事を悟られないのは無理な話だった。

「……………」

再び黙って階段を上り始めた少年の後ろ姿に、少女は改めて違和感をはつきりと認識する。

—何だか……随分……—

青白い月夜に、初めて話をした時に比べて銀色の髪の少年は、

—銀なのに……穏やかな感じ—

居候先で流血沙汰を起こすような苛烈さしか見せなかった頃と、表情の冷たさこそ変わらないが雰囲気は明らかに丸くなり、

「——まずい……」

突然また階上で立ち止まり、振り返らずに両手を組んで何かを悩んでいる姿など、これまでにない力の抜け方に見えた。

表情のないまま首を強く傾けている少年に、少女は後ろから声をかける。

「どうしたの？ 気分が悪いんじゃない？」

心なしか少年は顔色も白っぽく、血の気がひいており、

「……この道は、これ以上はまずい」

しかし少年が悩んでいるのは、全く違う事のようにだった。

「違う道があるけど……今は、思い出せない」

「ここから先は通れないってこと？」

少女達が上がってきた方形の螺旋階段は、まるで巨大な四角い柱の外壁を斜めに登るような構造で、踊り場につくたびに柱の内部の部屋を通って次の階段に抜けたのだが。

「もう少し先の部屋には、誰かいるの？」

言葉足らずの少年の先を促し尋ねる察しのいい少女に、少年は小さく頷いた。

「それなら確かに……ここから出る道を探さないとだけど」

上層まで中空の建物の芯のような階段からは、城の他の場所に繋がる連絡通路はたまにしか現れず、

「しばらく無さそうだから、一度戻らない？」

「……………」

これまで上ってきた時にあった連絡通路までは、かなり後退を強いられる事になるのが少年は気に食わないようだった。

少年は何故か、眠たげにも見える様相で顔を僅かに顰め、

「……繋がってる所は、あるはずなのに」

「——見えてないだけってこと？」

現状把握に極めて優れた少年には、少女が気付けない隠された通路も本来はわかっていたはずらしく、

「これ以上……覚え、られない」

俯きながらぼつりと……今の少年に出来る事の限界がそれだと、少女を見ずに少年は呟いていた。

その少年の様子が、とても拙く見えた少女は、

「やっぱり気分が悪いんですよ。少し休まない？」

「……………」

少女の声に顔を上げた少年は、不服そうな顔をすると思いきや。

「少し待てば、この道も安全になるかもしれないし……そんな悪い顔色じゃ、いい案だって浮かばないでしょ」

「……………」

少女の言葉を黙って待つ少年は、無表情ながら妙に素直そうな面持ちだった。

そのため逆に、少女が少し呆気にとられながら、

「……それで、いい？」

そうした様子の少年の真意がわからず、一応確認する少女に、少年はあっさりコクンと頷いていた。

そのまま少年は階段に座り、相も変わらず表情のない顔で、小さく息だけをついた。

「さつき闘ったばかりなんだし——疲れてるんじゃない？」

立ったまま丁度少年と視線が合う下段にいる少女は、ひたすら無表情の少年に、何故か不服げに尋ねる。

「いい勝負だったみたいだし。自分以外の事であれだけ闘えるヒト、そんなにいないと思うわ」

剣士の従兄がどれだけ腕が立つかを知っている少女にとって、それは少年への賛辞だったが、

「まさか。最初から最後まで、俺だけがずっと負けてた」

淡々と少年は、暗い青の目で少女を僅かに見上げて呟いた。

「俺は、殺す気だったのに……向こうには全く、俺を殺す気はなかったんだから」

それは紛れも無く、根本的に苛烈な少年の真情であり——

だからこそ少年は、そこで初めて、僅かな微笑みを浮かべた。

「あんたも……あんたの仲間も、強いな」

「……」

儂く微笑む少年のまつすぐな目線に、完全に不意をつかれた少女が思わず口を引き結んだ前で、

「俺は殺さないと勝てないけど……あんた達は、殺さないでも勝てるんだ。……そのやり方を探して頑張れるんだ」

今度は儂いどころではなく、完全に笑った少年の顔は、少女がよく知る金色の髪の少年以上の純粹さに満ちていた。

「……!?!?!」

思わず啞然とし、少年をポカンと見つめてしまった少女に、「?」

不思議そうに少年は、今も誰かわからないはずの相手の少女を、優しいな笑顔で見つめ返し、

「有り得ない……!?!?!」

殺し合いを厭わず、呪いの力で封印まで必要だった『銀色』の安らかな視線に、少女は思わず視線を逸らしてしまっていた。

少女の従兄に負けた事が、心から嬉しいらしい少年は。

だからこれだけ素直に微笑んでいるのだと、鋭い感性を持つ少女には重々伝わったのだが……。

「こんな無防備っぷり、有り得ないしコイツ……!?!?!」

それはとても、色々な意味で――

あまりの変貌に、思わず自身の顔も緩みそうになった少女は、そんな顔は何故か見せたくなく、そっぽを向くしかなく。

苛烈な形ではあれ、仔狐を守ろうとした少年を少女は悪くは思えず。それはそんな思いを無遠慮に映す笑顔で――

思えばここまでの少年の無表情も、悪魔の城という地にあり、警戒心に満ちた少女を映したものであつた事に思い至る。

金色の髪の少年もそうした所はあつたが。それ以上に自らと

他者の境界が曖昧である銀色の髪の少年を、直に感じた少女は、――時雨ちゃん絶対押したら落ちるし!?!――

それは本当の事……この少年なら、自らの内面に関わらずに、強い好意を向けられたら、その思いを映し返すだろうと。何の

因果かここで誰かの台詞を思い出し、少年に振り返った。

「どうして――そんなに素直なの?」

「?」

少年はキョトンとした平和な顔で、少女を不思議そうに見つめ、「……私が誰かもわからないのに。少しは警戒しなさいよ」

少年のそうした曖昧さは、少女は別に悪い事とは思わないが、それでもさすがにもう少し線を引けと……理由もわからずに、感情的に言いたくなつてしまった少女だったが。

「何で?」

「何で?」

少年はそこで、もう一度微笑むと穏やかな様子で首を傾げ、

「あんたみたいなのが、俺は多分一番……」

……一番何だつけど。表情を消し、少年の声はそこで止まった。



少女を常に覆う、正体を隠す忘失の暗幕には関わりが無く。常に多くの情報を得過ぎて自らが曖昧な少年が、記憶容量にも限界を来たしつつあった事は、僅かな者しか知らず。

「い、一番、何よ!？」

「さあ……わからない」

観ようとする優先的な情報以外には、強い思いから拾っていく少年の許容量は、今この少女を無事に送り返す事以外の余分に割ける余裕は……少年自身のものでも、強い思いが拾えない程差し迫っているものだった。

少年はこれまでの笑顔を消し、無表情に戻って俯くと、

「……凄く、言いたかったことの気がするけど」

声色だけは何処か残念そうに、小さく呟いた後に立ち上がった。

「行こう。このままここに居るのも、良くなくなってきた」

「え？ もう進んでも大丈夫なの？」

「進んでも止まっても良くない。上がりながら違う道を探す」さりげなく不穩事を伝え、少年自身の緊張感を無表情さに湛え、そこで何故か少年は、腕に巻いていた黒いバンダナを解くと、再びぎゅつと目の半分を隠すような形で額に巻いていた。

「……………」

バンダナが巻かれると同時に、少年の青い目が赤く染まり。

どちらかと言えばあつさりした顔立ちが、一見は人懐っこくも鋭さと暗影を内包する、端整な別人のものへと変貌する。

「……アナタは、ここではずっとその姿なの？」

気配までが変わり、背にも謎の黒い翼を生やす少年は、まるで悪魔の城で悪魔と化したような印象を少女に与えるもので、

「この方が——ここでは動きやすい」

淡々と答えた声の調子は、元々の銀色の髪の毛の青い目の少年と、何ら変わる事はなかったが……それでも少女も再び、警戒心の火を点された形となるのは避けられず。

再び階段を上り出した少年に、少女も黙って続いた。

またしばらく、沈黙の時間が始まるのかと思いきや、

「誰かに会えば、あんたは一人得上に行け」

「え？」

少女に振り返らずに、少年は冷たい声で言った。

「この階段だけで最上階は行けないが、今の状態のあんたなら、うろついても誰も見咎めない」

「それって——」

「俺がいない方がこの先は、安全に行ける」

はつきり要点を口にする少年に、咄嗟にムっとした少女は、

「ここは流惟さんの城なのに、アナタは安全じゃないの？」

これまではあえて抑えていた、少年側の事情を知る言葉を口にしてしまい……考えてみれば、この状況で最早正体を隠し通す必要もないと改めて思ったのだが、

「あいつを城主にしたい奴全員が……俺の敵だ」

その違和感も忘失してしまう暗幕に少年は、尋ねられた事への答えだけを冷静に口にした。

しかし少女は、そこではつきり、

「嫌だし。アナタを囮にするみたいなやり方、気に入らない」

事情はよくわからないまま、わかった部分への反論を口にした。

「別に違うだろ。絡まれる可能性があるのが元々俺だけだ」

「でも私に関わってこの下の方まで来ちゃったから、アナタも危険なんじゃないの？」

「……………」

「アナタが元々いた所は、そんなに危険そうには見えなかった。

流惟さんがアナタや狐魄を、危険な所に置くとは思えないし、それならこれは……………やっぱり私のせいだわ」

もしも何かの危機が現在、少年達に迫っているのだとすれば、それは少女も戦うべき時である——まっすぐに、バンダナを着けた見知らぬ顔の少年を少女は見上げる。

少年は少しだけ、何処か辛そうにそこで目を伏せ、

「あいつは……………狐魄を心配、してたのかな……………」

ぼつりとそんな事を呟いていた。

「どうして？ 心配してなければ、あの仔を近くに置いたり、アナタに狐魄を守らせたりしないでしょ」

「……………」

「流惟さんはとても優しいヒトだと思う。たとえ悪魔みたいに なっても……………きつとその理由は、悲しい事なんじゃないかしら」  
今の少女は、何故友人の養母が変貌したかも納得が出来ていた。

—もしもラピに、何か悪い事があったとしたら……………—

『魔はヒトを糧とし、ヒトの形に留まらず、ありとあらゆる手段を以て、ヒトの望みを叶えるものである』……………一言一句、少女は思い出せる文章を反芻する。

—流惟さんは絶対、とても悲しんで……………止めようとしたはず—  
願いを叶えるためにどんな怪物にもなり、どんな事でもするモノが『魔』ならば、友人の優しい養母がそこに陥った契機はそれ以外には考えられなかった。

「……………もしも、あいつが……………初めから悪魔だったとしても？」

少年はそこで、詳しい事情は口にしないまま、

「狐魄も最初から、利用するために傍に置いたのかもしれない」  
躊躇いがちに尋ねる少年に、何故か少女が強気に言い返す。

「私が知ってる流惟さんは絶対、悪魔なんかじゃなかった……………  
悪魔の資質を持つてたとしても、悪魔である自分を起こされる  
何かがあったはずよ。元々そんな、手段を選ばないようなヒト  
じゃないわ」

「……………」

まだ俯いたままの少年は、その相手に対する不信に何より、  
少年自身が苦しんでいるように少女には見え、

「万一今の流惟さんが、狐魄を利用するようなヒトだとしても  
……………それも、狐魄の幸せに繋がる事なんじゃないかしら」  
どんな形に見えたとしても、その根底は決して揺らがないうと、  
ヒトの深い部分への感性を持つ少女は淡々と口にした。

俯く少年が、そこで何かを口にする前に、しかし——  
少年は赤く鋭い目に強い警戒を乗せて、少し前方の踊り場を  
全身の緊張と共に見上げた。

「……そーだなあ、少年」

そこには何故か——涼やかで清雅な女性のものながら、まるで  
男のような口調の音が響き、

「あいつの事は多分……甘く見ないで正解だぜ？」

踊り場から続く、階段と階段の間の連絡部屋の扉から、まさに  
踊り場へと出てきた黒い人影があつた。

「……?」

立ち止まった少年の前に現れた、にこにこ緩くも不敵に笑う  
その人影に、少女は思わずポカンとしてしまう。

「女の子……?」

人影は鎖骨までの黒い髪を、耳にかかる髪が残るくらい雑に  
一つに束ね、高い襟の上衣とふわふわの短い下衣を身に着け、  
少女と一見大きく年齢の変わらない出で立ちであり。

「……キレイなヒト……」

白い肌を引き立てる、黒が中心の容貌と、鋭く整った黒い目の  
顔立ちは、緩い表情でも何故か言葉に出来ない威厳を伴い……  
そのためなのかはわからないが、少女も少年も共に黙り込んで  
階上の相手を見上げる事になった。

人影の横では、妙に大きい鳥がしわがれた声で、突然人語で  
人影に語りかけていた。

「……!?!」

しかしその内容は人影以外に伝わらないように偽装されている  
らしく、ふんふんと鳥を相手に納得する人影に、少女は大きく  
警戒心を強める。

「……気にするな。あんたにはアイツら、気付いてないから」  
それだけ少女に伝えた少年には、人影と鳥の会話が現状把握の  
特技からいくらかわかったようであり、

「アンタ——……アンタがこの城の、本来の主か？」

人影に向かってそんな事を尋ね、それに人影はどうやら大きく  
驚いているようだった。

「ががーん。ナッチャンと話しただけでそこまで言われるとは、  
オレもどうやら年貢の納め時？」

どうやらナッチャンと呼んでいるらしい鳥を下がらせ、人影は  
相変わらず、男のような口調で少年に対峙する。

「ていうかナッチャンは、普通にこいつの眷属とも言えるのに  
……少年、オマエ、いったい何者なんよ？」

この期に及んで、にまーと形容するしかないような緩い笑顔を  
浮かべる相手に、バンダナの少年は何故か不敵に微笑み、

「そのスパイ以外の奴に、アンタの存在を知られたくなければ  
——さっさとその道を、俺に譲れ」

少年達に立ちほだかるかのような人影に、それだけが要求だと、  
少年はあっさり言っただけでいた。

ふうんと人影は、改めて面白そうな顔付きで少年を見返し、

「オレの弱味を微妙に握っというて、それだけでいいん？」

「違う時に出会えば、今度はもう少し違うだろうな。でも……それもどうせ俺にはどうしようもない」

ほえ？ とそこで、大きく首を傾げる人影に少年は淡々と言う。

「俺にアンタを捕まえる力はないし……アンタ達の事は、俺は邪魔したくない」

その時の少年の真の表情は、バンダナに隠されて少女はわかるわけもなかったが……何故か少年はとても、緊張感の中でも、状況を楽しんでいるような様子だった。

ふんふんと、よくわからないまま人影は一通り頷き。

「さすがは……あいつが養子にするだけはあるって事？」

そして人影は——少女が啞然とする事を、あっさり口にした。

「ところで少年。オマエを……オレに出来ないか♪」

それはまるで、男前な口調の綺麗な相手から少年への求愛で、

「……今は、それはきけない」

少年はポカンとしながら、咄嗟にそんな返答を口にし、

「今はって何よ、今後ならいーわけ！？」

思わず叫んでツツコミを入れてしまった少女だが、人影は一瞬不思議そうに首を傾げただけで、少女には気付く事はなく。

「よーやく出会えた……オレに相応しそうな奴なんだけどな」  
ただ、不吉とも言える不敵な顔で、にやりと微笑んでいた。

突然過ぎるこの状況に、少女は混乱を隠せなかったが、

—何あのヒト……流惟さんの知り合い……！？—

それだけ何とか把握し、本来の城主という少年の言葉も冷静に、分析を試みる。

—それならあのヒトは悪魔……？ でも……—

少女の鋭い感覚はそれを否定し、どちらかと言えばその人影は人間に近いとすら感じ、余計に戸惑う。

「アンタは……この城主の事を知ってるのか？」

少年は改めて人影に、最初に抱くべき疑問を尋ねた。

「ただの親戚ってだけじゃなくて……それ以上を——」

この道を譲る話の他に、それだけは聞いておきたいとまっすぐ人影を見上げる。

「そーだなあ。ホントならただの親戚で、それもあんまり深い付き合いにはならなさそーだったけどな」

人影はそこで、不思議なくらいに優しげな顔で微笑み、

「ホントにホントなら、あいつは妹か従妹……だったかも、な？」

心からの親愛を込めた声で、そう少年に告げ……少年はそれを訳はわからないまま、嘘ではないと受け止めたようだった。

「あいつはね、運命を変えるために現れた魔性の者なんよ——オマエの運命も、何か変えてくれるといいな、少年」

気安いながら何故か、何処か宣戦布告のような響きを持って、人影は再び綺麗に微笑んだ。

少女はそして——その微笑みに、またも不吉なものを感じ。  
二度感じたその予感が決して気のせいではないと、無意識に  
少年の背のケープを、黒い羽の間からひしつと掴んでいた。

「……？」  
少年は不思議そうに、ちらりとだけ少女を振り返り、

「……話は終わりだ、そこをどけ」

少女を最上階まで送る、その本分に立ち返ったように、冷たい  
声色で人影に言い放った。

「仕方ないな。この城ではオレも、ちよいと動きにくいしな」  
くくくと人影は、心から楽しげに少年を見て笑い、

「また会おうぜ、少年。今度はもーちつと、広い場所ですか？」

少年がそれに答える隙間もなく、ばさりと、傍らの大きな鳥が  
翼を広げた瞬間に隠れるように消え去り……場にはその後は、  
鳥すらもすぐに飛び去り、静寂が戻ったのだった。

「……」

くると辺りを見回しながら、少年は安全を確認したのか再び  
階段を上がり始めようとし、

「ま——待って！」

少年のケープを掴んだままの少女は、思わずそう叫んでしまい、  
「……？」

少年は相変わらず素直に、少女の声にすぐに従い、足を止める。

「……まだ何か、心配なのか？」

少女を安心させたいかのように、バンダナをわざわざ外して。

元の顔に戻った少年に確かに少女はほっとしつつ、それでも  
先程から続く不吉な予感は拭えず、

「……さっきのヒト……アナタの知り合いなの？」

しかしその嫌な感じの正体がわからず、ただ不安げに尋ねる事  
しか出来なかった。

「いや……向こうは俺を知らないし、俺もよくはわかってない」

少年はそこで、驚く程に安らかな顔で儂く微笑み、

「でも……俺が力になりたかった知り合いだと思おう」

その遠い笑顔に余計に、少女の不安は煽られていた。

オマエをオレにくれと——そこにある本当の意味と、それを

この少年が受け入れてしまいそう……根源的な不安が。

「あのヒトは……アナタを何処かに連れていく気がする」

「——？」

「これ以上、関わらない方がいい——そんな気がするの」

そうかな？ と少年は不思議そうな無害な目をして笑い、

「アイツは多分、俺に悪いような事はしないよ」

少女からは不自然に感じる程の、強い信頼と共に言い切った、  
これまでで一番危うげに見える少年の姿だった。

その黒い鳥に巢食う緋い蛇が、自らの依り代を求めている事

——そして鳥と蛇の両方に少年が持つ縁を、少女は決して知る  
わけはなくとも……ある運命の訪れを感じたように。

連絡通路をいくつか通過し、やっと客人棟に入ったと少年は息をついた。

「ここからは多分、今までよりずっと安全だ。後はもう、この階段を最後まで昇ればいい」

少年は少女が思う以上に気を張っていたようで、少年にすれば初対面のはずの少女にそこまで肩入れをする少年は、つくづく危なげだと少女は苦い顔をする。

「……ねえ」

「？」

最上階に徐々に近付き、少女から緊張が和らいできたことを見事に映す、少年の和らぎを感じつつ——更にもう一つ現れた変化、目まぐるしい少年に思わず少女は声をかける。

「どうしてそんなに、楽しそうなの？」

今や年齢相応の、大人しげな笑顔を湛えている少年は「？」と首を傾げつつ、少女から自身がそう見えるらしい理由を適当に応える。

「狐魄の悲鳴が消えたから。あいつがきつと、楽しいんだ」

その顔がまたあまりに、安らいで見えた少女は——思わず、ふと浮かんだ思いをそのまま尋ねていた。

「アナタにとって——狐魄って何だったの？」

「……」

それはおそらくこれまでで最大の、少年がその無表情な顔に、殺せない痛みを浮かべた瞬間だった。

「大切な奴だった……多分、この世界で一番」

「——え？」

曖昧なこの少年にしては珍しく言い切った姿に、何故か少女は、ちくりと胸の何処かをさされたように息を飲む。

「あいつの所には、俺の居場所があったから……でも、それはもう無くなったんだ」

少年の声には、義理でも妹に対する強い思い——それだけでは説明し切れない感情が宿っているように思え、

「アナタはそれじゃ……そこにいたかったの？」

何故か少年を直視出来ずに尋ねた少女に、少年は苦しげに笑い、ああ。とあつさりそこで答えた。

「……」

黙り込んだ少女の思いは、少女自身すら理解出来ないものを、少年が理解出来るわけもなく、

「……それなら本当に、狐魄を手放していいの？」

難しい顔で口にした少女に、それも、ああ。と穏やかに答えた。

「俺にもあいつの居場所が無くなったから。だからあいつは、帰ってきたがらなかったんだ」

もしも少年のその想いに名前をつけるとすれば。

少年が遠い日に見失った心……少年の代わりにそれをくれた義理の妹は、妹分自体が、自身に似た少年にそれを見出したと少女は知るはずもないが、

「そんなの——……それで、納得出来るものなの？」

それを自己愛と呼べば、確かに世界で一番大切な相手だった。

少女が思い返すのは、約一年前に、突然義理の兄が出来たと嬉しそうに笑って話した友人の姿で。

「何かねえ、弱々の引きこもりなりに、強くならなきゃって必死な所がカワイイんだあ。私もあんな感じだったのかな？」  
あの頃はゴメンねとそこで少女に言うので、何が？ と少女が尋ねると、友人は珍しく苦笑った。

「だって私、鴨ちゃん達に甘えてばかりなんだもん」

「……何処が？ と少女は、心底不思議な気持ちでまた尋ねる。

何故なら少女は常々、その友人について、

「ラピってしつかりしてるよね」

幼い頃に実の両親を失いながら、いつも笑顔を絶やさずにいる相手……トゲトゲとしていた頃ですら、運命を恨むような姿は一度も見せなかった友人を知っていた。

「ていうか、そんなにしつかりしなくていいのに」

友人が恨んだとすれば一人、その運命を招いたと考えている、友人自身だけで——

せつかくお兄さんが出来たなら、甘えられるといいのに。

養父母の愛を独占出来なくなった状態にも関わらず、とても嬉しそうにしている友人に、少女はそう願った。

だから少女は、それを少年に伝える。

「……狐魄は、アナタに会えて良かったんだと思う」

「——？」

少年はぴたりと立ち止まると、数段先から少女を振り返った。

少年は表情の隅に、また痛みを浮かべて少女を見つめ、

「俺がいなければ、狐魄はいなかった気がするけど？」

「それなら狐魄がいるのは、アナタのおかげじゃない」

「……——」

失われてしまった誰かの代わりに、そこにいる誰かの抜け殻を、それもそのまま受け入れた少女に。

それを受け入れて良いかわからず、痛みを抱え続ける少年に、

精一杯の心を伝える少女を、しばらく苦しい眼差しで見ると、

少年には出来ず。

そんな少年に、少女はあえて軽い口調で言った。

「何か凄く、残念な顔してる」

「え？」

無意識に少しでも、少年が背負ったものを軽くしたいような、そんな心がそのまま通じたのかどうか。

「そっか……そうだな」

残念なのか。と少年は、自身を占める想いに形を得たように、儂げに笑った。

「俺はあんた達の事も、あんた達が狐魄を連れて行く事も——多分、忘れるから」

「……………」

「それは確かに……残念だな」

忘失の暗幕に包まれ続ける少年に、少女は少し目を伏せる。

この先、これで良かったのだと思えたとしても、その痛みは残り続けると……残すしかない無念だと知るように。

ほらと少年は、そもそも少女が最初に来た階層についた事を、階段の踊り場から横目で示した。

「ここまで来れば、後はもう行けるだろ」

「……………」

そこは少年の居室もある階で、これ以上は昇る気のない少年を少し不服そうに少女は見つめる。

「どうして……………ここまでなの？」

「？」

「狐魄の顔、見ていかないの？」

「……………」

心配なんですよ？ と咎めるような顔の少女に、

「俺は、あんた達とは違うから」

無機質にその断絶——ここまでの穏やかな姿の少年に、少女が忘れたかと思いかけた少年の定めをあつさり告げた。

少女の従兄である剣士を、ともすれば殺す事も辞さなかった天性の死神の、冷然とした青い目に戻りながら。

「違うって……………何が、違うの？」

……………それを尋ねてはいけない。尋ねてしまってから少女は、少年より上に昇っていた足を止めたまま、冷たい表情の少年を俯くように視界に入れて少し後悔した。

この自らが曖昧である勘の良い少年は……………感じ過ぎてしまう多くの情報を、感じている自らと共に曖昧にしておくことが、少年自身を守る最後の砦でもあり。

それを声に出させてしまえば、強調された情報は少年を縛る。

「……………」

少年自身、少女達と少年は違うと言葉にした時に、そこには壁が存在すると自らに感じたようで……………問われた事には誠実に答える少年が、躊躇うような沈黙を訪れさせていた。

つい先程までの表情であれば、目の前の銀色の髪の少年は、記憶喪失だった金色の髪の少年とは髪と目の色が違うだけで、ここに来て本当に中身は同じに見えつつあったのだが。

—オレは別に、違う誰かになってるわけじゃない—

それを伝えられた時には少女は、彼らは別人だと感じていた。その理由もおそらくは……………少年が今感じている答えと同じで。

少年はやがて、冷たく無機質な顔のまま俯き、声を絞り出す。

「……………俺は、狐魄が望むなら、またあんた達を殺しに行くから」それが少年には、可能な限りの優しい現実だったかのように。

少年は金色の髪の少年とは違い、少女達に仇なし得ると——だから自分に関わるなという、誰かとよく似た心を告げた。

けれど少女は……………不思議な確信があった。

少年が従兄に敵わなかったのは、実力や体力事情だけでなく、「それは……………アナタがそう思ってるだけだと思っわ」

敵わない事そのものが、この苛烈な少年の希みだったはずだと……………迷いだらけの少年を従兄と同様に看破していた。



そもそも少年が口にしたもしもの状況は、到底有り得ないと、少年も少女もわかっている。

少年が守りたいものが、少女達の排除を本心から望むはずはない。それなら少年が少女達を排除する未来などない。

それでも自身が有害であると、あえて少女達に対し口にする少年は、本当に感じていた冷酷な現実の代わりにそう言うしかなかったのだと……少女は全て察したわけではなかったが。

少女によぎるのは、少し前に、少年が今いるこの城へ旅立つ直前に少女と話した金色の髪の方の少年の言葉で。

―オレが誰なのか、もう探さなくても良くなった―

少女達という頃には、金色の髪の少年はずっと、自身が何を求めているのかを探していた節があり。銀色の髪の少年はその答えを何処まで覚えて――知っていたのか……そして少年は、何を得てその言葉を口にしたのかと、少女はその時からずっと気になっていた。

―じゃあ、今度帰った時には、訊いてもいいの？―

そこで苦しげに微笑み、頷いた少年はいったい何者なのか。その時どうして少年は、少女達を避けるように一人でいたのか……それは先程に少女が尋ねてしまった事と、本質的には同じ問いかけで。

またその問いへの答えが、そのまま少年の正体についての、少年自身の答えでもあるはずだった。

……自分は、少女達とは違うものであると。

だから最早、自ら少女達に会おうとしなかった少年の答えは。

「俺は……」

ぽつりと口にした少年の声を、少女が聞き取れなかったのは、それも少年の希みだったのか――

―俺は……ヒト殺しだから―

少女にはそう聞こえた気がし……しかしそれを答えにすれば、少女達と同じ世界に住めなくなるのは、少年だけではなく。

少年の近しい者。今この忘失の暗幕を張り、少女達と行動を共にしている幼い誰か……処刑人の過去を持つ者も、少女達に線がひかれる事になってしまう。

それに気付くわけではなくても、少女は少年のあまりの声の拙さに胸を衝かれた。

少女達の正体がわからない少年が躊躇った理由は、本当に、無意識のレベルであったとしても――

「あんた達の前では……俺は殺したくない」

呟き、剣を小さな装飾具に戻して腕に引っ掛けると、少年はくるりと少女に背を向けていた。

「ありがとう……狐魂を、助けてくれて」

ずっとその悲鳴に気付きながら、自身は何も出来なかったと。僅かに俯きゆつくりと去っていく少年に、少女は息を呑む。

どんな言葉をかけたとしても、それは覆らない。

少年はもう振り向かないと、悟らされた少女の中で、何かが堰を切って溢れ出した。

「でも私は……」

今伝えておかなければ、その青い目には二度と巡り会えない気がする——不思議な確信だけが少女を後押しした。

「私はアナタのこと——嫌いじゃない」

……びたりと。

去っていく少年の足音が、時間が止まったように凍りついた。

少女は自分でも理由のわからないまま、震える声で続ける。

「……待ってるから。狐魄と、一緒に」

少年は、少女達の正体には気が付けない。気が付くそばから忘れさせられていると知りつつ、それでも少女は……。

「……………」

背を向けて立ち止まり、俯いたまま黙り込んでしまった少年は、その忘失を込みで少女が観えていると、少女はわかっていて。

一瞬の気付きと、直後に襲う忘失の暗幕の最中にあっても、そんな刹那の心だけで少女を助けに来た少年は……。

「……………」

その僅かな心で十分な程に、少女を助けたいと思っている。それは最初から、自身の台詞に赤くなる少女には伝わっていた。

「アナタは——アナタだって、帰ってきていいんだから」

その少年が少年自身の言う通り、危険な存在であることは、それも少女はわかっている。

最初からそうだったのだ。少年はここにはいけない——いるはずのない、本来なら出会う事は出来なかった誰かであり。少女に馴染みの深い世界の言葉を使うなら、心霊……彷徨える死者に近い者なのだ。

けれど少女も、少女の周囲の者達も、それをあえて無視した。

在るべき世界に戻れというのは、この少年にはあまりに酷と……それなら、気付かないでおく事が唯一の、少女達が少年に渡せる思いだった。

そうして少年の事を追求しないでいてくれた少女、ひいてはその周囲を想うように、少年は背を向けたまま顔を上げ。

「……誰にも、会う気はなかったけど」

去りゆく自身の意志とは矛盾する、拙い希みを口にしていて。

「……でも、あんた達に会いたかった」  
それは、ヒトの深い所を感じ取る少女には紛れも無く——  
帰りたいと。そう願っている少年の無自覚な本心で。

「俺はあんたのこと……—だと思っ」

その時少年は、自然に安らかに笑っていたのだと。  
少年の背後で赤くなり俯いていた少女に、わかるわけもなく。

最後に少年が言った言葉を、少女は聞き取れずにいて。

少年もそれを忘れてしまいが……その想いを声にしたことが、少年にとつてはどれだけ大きい意味を持つのか――

ふっと、少女の背後に差した人影は、その一部始終を感じて……困ったように端整に微笑んでいた。

「――!」

少年の姿が見えなくなった後、最上階の方へ振り返った少女の上方に、またも黒っぽい人影が綺麗に笑って佇んでいた。

「あ……」

少女はその人影に見覚えがあり――人影の方も、忘失の暗幕で隠されているはずの少女に気が付いており。

「流惟……さん……」

「久しぶりね。鶯ちゃん」

にこにここと、体の線がびったりと出る黒い礼装を纏う女性が、青く流れる無造作な長い髪をかきあげながら、蒼白な鋭い目で少女を見下ろしていた。

「……」

友人の養母であるその女性……悪魔になってしまったらしき相手を警戒すべきかどうか、少女は一瞬悩んだものの、

「会えて良かったわ。上にいるコ達にも話してきたんだけど、やっぱり鶯ちゃんが、一番しっかりしてそうなもの」

少女の思った通り、女性に少女が認識出来ている理由は、上で少女を待つ忘失の境界の主が女性を安全と認めた事に他ならず。話をしてきたという女性の言もそれを裏付け――

それなら少女も女性と話をしたいと、階下で立ち止まった。

まず少女は、一応城主である女性に常識的な対応をする。

「……すみません。流惟さんのお城に勝手に入ってしまった」

「――どうして? 招いたのは私よ、鶯ちゃん。私はずっと、貴女達を待っていたの」

「……え?」

女性はそこで、真意の掴めない妖しげな微笑みを浮かべ……養母である女性に対する少年の戸惑いの理由が、少女にも少し共感出来る程だった。

しかしその後が続いた言葉は、妖しいというより胡散臭く、  
「狐魄の、取扱説明書」

「――は?」

「鶯ちゃんなら、口伝えで大丈夫よね。狐魄のこと、よろしく  
お願いね……有り難う、狐魄を迎えに来てくれて」

「……じゃあ、やっぱりあの仔は……」

「ええ。私の可愛いラピスの――新しい姿なの」

いったいどうして、友人がその形になったかは女性は語らず。そしてさらさら女性は、その養女の事――今や式神や使い魔と変わらない存在になったらしい友人について、大切な事として、存在の維持方法を特に強調して色々と説明する。

「主は鶇ちゃんじゃないけど、主のコへの寄生だけじゃ、多分狐魄はヒトには成れないわ。獣でいる時間が長い程に、魂まで獣寄りになってしまうから、鶇ちゃん達さえ良ければ、まめに力を貸してヒト型にしてあげてほしいの」

「……わかりました」

女性の言う意味はなかなか重いと、少女はすぐに頷いていた。

言ってみれば友人は、妖狐に憑依した状態であり、既に心は失われていると……記憶と魂だけが残るものの、それは容易く妖狐に取り込まれる可能性がそこにはあった。

「心が戻れば、主のコの成長次第では、ずっとヒト型もとれるかもしれない。けれどそれは、ラピス次第だから」

「……じゃあ、ラピがもしも望むなら……」

「そうなの。本当に狐さんになっちゃうかもしれないけど……それでもまだ、あの子と仲良くしてくれる？」

「……………」

こくりと頷く少女に、女性はとても安心したように……儂げに微笑んだ。

「ありがとう……これでまた、わたしの心残りが消えた……」

「——え？」

その時の声質の緩み方は、紛れも無く少女が見知った友人の養母と同質であり。

「後一つ叶えば——……私も、消えられる」

「流惟さん……!」

ともすれば、これまでの友人以上に危うく見えたその女性に、少女は思わず数歩距離を詰めて女性を見上げた。

「……帰って来て下さい。ユーオンと一緒に、ジパングに」  
「……………」

元々女性は、友人によく同伴し、少女達とは顔見知りであり。実年齢とかけ離れた若い外見もあつてか、大人にしてはとても気安く喋れた相手に、少女は直球に対峙する。

「私は何も、事情を知りません……でも、これ以上流惟さんが無理をして何かあつたら、悲しむ人が沢山いるはずですよ」

差し出がましい事かもしれない。それでも引き止めなければいけないと少女は……この最上階に戻るまでに出会った、あの不思議な黒い誰かの言葉を脳裏によぎらせていた。

「あいつはね、運命を変えるために現れた魔性の者なんよ——そう口にした誰かは、きつとこの事……養女を妖狐としてまで留めた女性を指しているのだと、少女は感じ取る。

そして後一つ。何かを叶えたいと願っている女性の目的も、誰かの言を思い出すなら、

「オマエの運命も、何か変えてくれるといいな、少年——養子である少年に関わるかもしれない事……それならと少女は、決意を込めて女性をまっすぐに見つめた。

「ユーオンにも何も何かあるなら——私達も手伝いますから」  
だからもう、女性一人で運命と闘う事はないと言うように。

女性はしばらく、そんな少女に——穏やかな微笑みだけを、無言で向けていた。

「……………」

真意の见えない、諦観にも見える女性の顔は、しかし少女には……何故かとても、悲しげに見えた。

やがて女性は、ふっと軽く息をつく。

「……もう十分、手伝ってくれているのよ、鶯ちゃん」

「……………」

「ごめんなさい。私はずっとそのため……ラピスを貴女達に近付けていた」

あくまで穏やかに——そして悲しげに微笑みながら。

女性は階段を降りて少女の頬に軽く手を当てると、元の青を失った蒼白な目で少女に視線を合わせた。

「流惟さん……？」

本当ならその目は、少女の知る少年と同じ光を持っていたのが……確かに何かが変わってしまった者がそこに在り。

「でもね……わたしも迷ってしまったから。ラピスとユーオン、ラピスだけが適合すること、わかっていたのに……わたしは、ユーオンを選ばなければいけなかったのに」

もう、悲しげな顔にしか見えなくなっていた女性に、少女は少年の言葉を思い出す。

「あいつは……狐魄を心配、してたのかな……」

「ユーオンのためのはずだった……それがわたしの希みなのに。だから私は、その埋め合わせをしないとイケないの」

「……それは、どういう事ですか？」

くすりと女性は、悲しげなままで魔性の妖艶な笑みを湛えた。

「鶯ちゃん……狐魄とユーオン、どちらか一人しか、貴女達の元へ行けないとしたら」

「——」

「貴女はどちらを連れて行きたい？ と言っても……もう道は定まってしまったのだけど」

「ありがとう——……狐魄を、助けてくれて——」

最上階まで送ると言いながら、少女に背を向けた少年の声がそこで不意に少女の内に響き。

自分へ行けないと、振り向かなかった少年も、それと知って選んだような言葉に少女はしばらく声を出せず。

それでも少女は、改めてまっすぐに女性を見返した。

「どちらかだけなんて……流惟さんも選べなかつたはずですよ」

大切なものは何一つ、疎かに出来ないのが少女の性であり、

「絶対諦めません。ラピもユーオンも、両方連れて行きたい」  
言い切った少女に、女性は改めて悲しげに微笑んだ。

「私に何か、出来ることはありませんか？」

少女は何一つ事情をわかっていない。本来ならばその確認が先にあるべきだろうが——それを語ってもらえるとは少女には思えなかった。

「ラピだけじゃなくて、ユーオンの力になれること……もしもあるなら、教えて下さい、流惟さん」

魔性の女性はきつと、願いを叶える手立てを全て打っている。その上で話されていない事柄は、語られない意味があるはずで。

そうした形で、無理には事情を尋ねてこない少女に、女性は少しの間、微笑みを消した。

「……そうね、鶉ちゃん」

声には柔らかさが残っているが、それも何処か冷然とした色がそこに加わる。

「鶉ちゃんは——ユーオンがどうして記憶喪失なんだと思う？」

「——え？」

そして女性は、その養女と養子の現実を口にする。

「ユーオンの記憶を奪っていたのは、ラピスと言ってもいいの。今この結界と同じ源の、ヒトの記憶に関わる力で」

「……………」

「でもそれは必要な事だったの。記憶が無い間のユーオンは、それでようやく、普通に過ごせる余裕が出来た状態だった……けれども、その力は無くなってしまった」

それはまるで、友人がいなくなる事で少年には記憶が戻り、しかしその記憶が少年を追い詰めているといったような話で、少女は痛ましげな顔で女性を見つめ返した。

「そんなに、辛い記憶なんですか？ ユーオンの過去って……」  
いつそ忘れたままの方が、少年は幸せだったのか。

しかしそれは、あの勘の良い少年ならどの道、その歪みにも気が付いてしまうだろうと少女の顔が曇る。

「……………」

女性は少女のその問いには、あえて答えを告げなかった。

代りに少女に、謎かけを行うように、

「そんな記憶なら、鶉ちゃんは無い方がいいと思う？」

再びにこりと微笑んだ女性に、少女は言葉に詰まった。

「それは……」

胸元で手を握り締めながら、少女は少し俯いて答える。

「それは私じゃなくて……ユーオンが決める事ですよね」

その答えは、たとえ少年がどの状態を望んでも、それを少女は受け入れる——今まで通りの在り方だった。

女性はそれを聞くと、穏やかな顔で少しだけ首を横に傾け。

「そうね……………」

正解も誤答もそこには無いと、困ったように微笑んでいた。

「だから私も、悩んでいるの……あのコ、本当にバカだから」  
むしろ女性こそ、正解を欲していると言うかのように。

ありがとう、と——女性はそこで歩みを再開し、少女の横を通り過ぎながら口にした。

「あのコが決めるのを、待っていてあげてくれる？ 鶯ちゃん」

「……………」

階段を降り、今度は下の方から振り返るよう少女を見上げて立ち止まった女性を、少女は戸惑いながら見つめる。

女性は不意に、一見はあまり関係の無さそうな事柄を唐突に口にした。

「ラピスとあのコはね、本当にそっくりな子達なんだけど」

「え？」

「そこだけは大きく違っているの。ラピスはね、欲しいものがあったても言い出せない子なんだけど、ユーオンは欲しいものわからないコなの」

「……………」

それはつまり、自覚の有無だけではあるとは言いが、

「だからラピスには、与える事が出来たけど——ユーオンにはどうしてあげればいいのか、私にはわからない」

女性にとって、悲鳴を上げ、救いを掴む機会を得た養女に比べ、まず声が出せない養子は本当に扱い難いようだった。

「でもユーオンが求めるものはきっと、貴女達の所にある……ラピスと同じように」

「……………え？」

それをつい先刻、少年が残した言葉から悟っていた女性は、

「あまりいつまでも待たせるようなら、怒ってあげて。きっと

……それが一番、あのコに届くから」

「……………」

わけがわからず黙り込む少女に、それだけを言い残し。

少年と同じように、振り返らずに去っていった女性だった。

そうして、女性と少年が共に降りて行った階段に、しばらく立ち尽くすしか出来なかった少女は——この階段を駆け下りた数刻前の焦燥を、苦い気持ちで思い出す。

——ここで見失ったら、もう——……会えない気がする……—

「……そんな事ない。狐魄……ラピだつてきつと、帰ってくる」  
己に言い聞かせるように呟きながら、最上階への歩みを少女は再開した。

「確かに二人共……意地っ張りなところとか、そっくりなもの」  
その友人も少年も、自ら助けを求める事はほとんどなくて。それが何処か歯がゆかった少女は、吹っ切れたように笑った。

「迷子なら誰かが——手をひいてあげなきゃね」

そして少女は最上階で、仲間達に保護された友人と再会する。

最初は唾然としてしまったものの。

少女を待っていたのは、予想外に幸せそうな友人の姿だった。

—狐魄の悲鳴が消えたから。あいつがきつと、楽しいんだ—

それを少年が口にした時の、以前からは考えられない表情も、少年を待つと決めた少女を改めて後押しする。

その後には彼らが魔界の城を出て、あるべき場所へ戻った後に、少年と闘った従兄が少女に尋ねてきていた。

「結局ユオンには会えたのか？ 鶴」  
「え？」

同じ邸宅に住む従兄は、自室に帰る前に少女を呼び止め、  
「探しに行ってたんじゃないのか？ ずっといなかっただろ」  
少女がなかなか戻らなかった理由を、従兄はそう思って尋ねてきたようだった。

人喰いクローゼットに捕まり、さまよう羽目になった経緯を話すのも、少女は気恥ずかしく。

「会えたけど。でもアイツ、まだ当分迷子だと思っわ」  
それだけ言うと、従兄は納得したように頷き、

「そうか。それならまた、探しに行こう」  
当然のように言う従兄に、少女も笑って背中を向けたのだった。

C r y   p e r s .

—strayer—

C 3 ・ 外伝余話

了



彼女はきつと迷子なのだろうと、その少女は思っていた。

「——山科さん？ どうかしたの？」

「……あ」

ジパングにしては珍しく、近代的な茶店で木製の円卓を間に、鎖骨までの紅い髪と同じ紅の目の少女の声で、赤い髪の少女は我に返った。

品書きを広げて固まっていた赤い髪の少女に、向かいに座る紅い少女は、くすりと虚ろな微笑みを浮かべる。

「ごめんなさい。もしかして、こういうお店初めて？」

着物姿で生粋のジパング娘の赤い髪の少女に、西の大陸風——西洋物らしき上着を羽織る紅い少女が指定した茶店は、確かに赤い髪の少女は初めて入る所だったが、

「ううん。ただ、<sup>たつき</sup>竜牙さんが珈琲頼んだの、意外だっただけ」

それ以上に目の前の紅い少女と初めて二人でお茶をする状況で、ふっと、相手が『魔』である事実を唐突に思い出した赤い髪の少女だった。

「南の城にいた時、よく淹れてもらってたの」

紅い少女はそれだけ答えると、何か思う所があったのか、窓の外へと不意に視線を泳がせていた。

『魔』とはその純度が高い程、糧となる何かを必要とする。

ハーフくらいになれば、ヒトを喰わずとも生きていける者も多いというが、紅い少女は明らかにそれより血の濃い『魔』に見え、珈琲を静かに頼んだ姿に、いったい普段は何を糧としているのだろうか。赤い髪の少女は気になってしまった。

「それで……相談されてた件んだけど」

紅い少女はすぐに本題に入り、女子会たる雰囲気は欠片もない。

「ヒトの力を与えずに、狐魄をヒト型に出来るのかどうか。お話を結論を言えば、それならヒトを喰うか妖狐化しないと、狐魄に言っただけ」

「……やっぱり、そうなるわよね」

純粹な魔力行使の魔道に長ける紅い少女と、念の力や霊力の扱いを得意とする呪術師の赤い髪の少女が、各々の専門知識を持ち合った結果は芳しくなかった。

「貴女達から力もらうのを嫌がるなんて、狐魄らしいけど。ユーオンも狐魄も本当に似た者同士ね、諦めが悪いんだから」  
さらりと突き放した声で陶器の器に口をつける紅い少女に、赤い髪の少女は少し不服気にする。

「誰かの負担になりたくないっていうのは、私はわかるけど」

「でも別に、負担じゃないでしょう？ 山科さん達は」

……と、目も合わせずに言った紅い少女に、言葉を詰まらせた赤い髪の少女だった。

狐の化け物になった友人の、義理の叔母だという紅い少女。

赤い髪の少女の前でぼけつと窓の外を眺め、訊かれたことに応え相槌を打つ以外自ら何かを話そうとはしないが。と言って、ここにいる事が面倒なわけでもなさそうだった。

「……ところで……」

赤い髪の少女はそこで、ここに来たもう一つの目的を口にする。

「竜牙さんは何か、困ってる事とかないの？」

「——？」

唐突な問いに目を丸くする紅い少女に、あえて素っ気無く先を続ける。

「竜牙さんには魔界に行く時、扉の番とか手伝ってもらったし。借りを全然返せてないから、何か落ち着かなくて」

「……別にわたしは、貸しと思っていけないけど？」

そう言いつつも紅い少女は、赤い髪の少女の申し出自体には興味を持ったようで、飲み物に向けていた視線を上げた。

「でも、山科さんがいいと言うなら………ついてきてほしい所はあるわ」

「え？」

紅い少女のそうした反応も意外で、今度は赤い髪の少女が目を見つめる。

「ちよつと飛ぶけど。ついて来れそうかしら？」

そしてそれが、どれだけ無茶な要求であったか、その依頼を聞き届けた日に赤い髪の少女は身を持って知る。

遙かなる天上の鳥達の、遠い日の聖なる巢箱の残骸。

その『地』が存在するとは、実際そこに住んでいた者の血をひく身内から、赤い髪の少女は教えられていたが……まさか、自分がそこに行く事になるとは思ってもみない事態だった。

「ここが……『地』なの？ 竜牙さん……」

「そうよ。貴女のおじいさま辺りの世代が、住んでいた所だと思っただけ」

『伊勢』に行こう。紅い少女にジパング有数の聖地に誘われ、紅い少女の仲間が知るワープゲートであっさり現地に着き、更にはそこから紅い少女に連れられて。気付けば天空の島にいた赤い髪の少女は、ひたすら啞然とするしかなかった。

「乱暴で御免なさいね。さすがにあの距離を、ヒト一人抱えて飛ぶ自信は無かったから」

「……別に。竜牙さんこそ、大丈夫だったの？」

紅い少女の急拵えの魔法で小さな鳥にされた赤い髪の少女は、聖地の力を借りて透明な羽で飛ぶ紅い少女を必死に追いかけて、何とかこの天空の島まで辿り着き。やっここで、その魔法を解いてもらった次第だった。

紅い少女はフウト、赤い髪の少女の見立て通り、相当体力を消耗した様子で……心なしかその雰囲気揺らいで見えた。

「まえまでのわたしなら、難無く行けたんでしようけど。……やっぱり、わたしは彼女とわたしが同じとは思えないわ」

「……？」

かつて天空の島に住んでいた、天上の鳥の血をひく存在。

赤い髪の少女は、紅い少女の前身がその天上の鳥であると、紅い少女の同居人から聞いてはいたのだが、

「ここが——竜牙さんの住んでた所なの？」

少女達が降り立った、天空の島の南の廃墟……『チブリス』と名があつたらしい、厳かな石造りの建物と森に囲まれた土地を、虚ろな遠い目で見つめる紅い少女に、思わず尋ねていた。

天上の鳥の羽を移植された『魔』である紅い少女の、羽の主……『チブリス』に住んでいた旧日の少女剣士が、紅い少女の命の基盤であり前身。しかしその少女剣士の記憶も力も失われ、今の紅い少女は自らを『魔』でしかないと見なしているとも、赤い髪の少女は話を聞いている。

それを知ってか知らずか、紅い少女は少し説明口調で答える。

「……まえのわたしが、住んでいた所と言うべきでしょうね」

……でも、と。これまでになく拙げな雰囲気で、紅い少女は荒れ果てた廃墟を見つめる。

「でも……ここを見ていると……」

まるで、胸が痛むとでも言うように、紅い少女は静かに胸元を押えて——虚空を見据える紅い目は、大きく澱んで見えた。

その深みには今は触れずに、赤い髪の少女は淡々と尋ねる。  
「竜牙さんはどうして、私をここに連れて来たの？」

「……」

ついてきてほしい所があると、はっきり口にした紅い少女の意図は全く説明されておらず。それでもその依頼を引き受けた赤い髪の少女に、紅い少女は無表情のまま振り返った。

僅かに躊躇うように俯き、紅い少女はその理由を口にする。

「……わたしには靈感はないから。山科さんに、この様子を教えてもらいたかったの」

「——え？」

「ここにはまだ、眠れないヒト達が沢山いるって……クアンとクラルさんに、聞いた事があつたの」

紅い少女が口にした名前は、赤い髪の少女の身内の仲間と、その子供のものだ。紅い少女も本来、その血縁に当たるはずと赤い髪の少女は聞いていたが、今の紅い少女はその彼らにも、何処か距離を置いている様子でもあつた。

「ねえ。ここにはそんなに……まだ、何かが残っているの？」

伏し目で尋ねてくる紅い少女に、赤い髪の少女は少しの間だけ悩んだ後に——……ありのままの答えを、そこで伝える。

「……いいえ。きつと——竜牙さんの探しているものは、何も残っていないわ」

この場所に住んでいたはずの、紅い少女の前身。それに纏わるものは全て、とつくと失われているだろう現実を。

「……………」

紅い少女はその答えを、特別衝撃を受けた様子もなく、ただ黙って神妙な様子で受け止める。

「竜牙さんは、まえの竜牙さんに戻りたいの？」

彼女はきつと迷子なのだろうと、赤い髪の少女は思っていた。

「今の竜牙さんじゃダメなの？ ……帰れないの？」

そこで彼女は、ようやく普段通りの虚ろな顔付きで微笑む。

「……わたしは、昔を振り返ったことなんてないわ」

「じゃあ……何が欲しいの？ 竜牙さんは」

今まで懇意だった者達とは、誰とも大きく関わらずに過ごす彼女を、彼女の周囲が心配している事を少女は知っていた。

彼女はそれにも、くすりと魔性の微笑みで応える。

「わたしはわたしの糧が欲しいだけ。だから、まえのわたしの力が戻ってくれたらいいと思っっているけど」

『魔』とはその純度が高い程、糧となる何かを必要とする。

しかし彼女の前身とは『聖』で、それは矛盾した望みのように少女には感じられたが、

「それは——私達に何か、手伝えること？」

何もわからないまま条件反射のように尋ねていた人の好過ぎる少女に、彼女はまた、虚ろな顔付きに戻って笑った。

「いいえ。山科さん達には、狐魄をみてもらってるだけで十分」

そしてここに来てくれたから、もう貸し借りはないと笑う。

「でも、そうね……貴女達の前では、わたしはわたしでいいものかもしれないわ」

「……………」

「だって貴女達は、まえのわたしを知らないでしょう？」

その紅い少女の微笑みは、何処までも虚ろと言うしかなかった。

「貴女達はまえのわたしを望まない。今のわたしがわたしだと思ってる……だから、今のわたしであることを望む」

しかし虚ろであっても、力強い涼やかな声で彼女は続ける。

「わたしはヒトの望みが欲しい。ヒトに望まれるわたしが——わたしがそう在りたいわたしなの」

「……それって、竜牙さん」

「でも今は、まえのわたしでは在り切れなくて。だから……まえのわたしを知るヒト達の所には、まだ帰れないの」

それが彼女の求める糧だと、荒れ果てた白い石の地盤の上で、一際目立つ紅いシルエットは晴天の空を見上げた。

「戻るんじゃないくて、今度こそなりたい。……まえのわたしに」

限りなくヒトに近く造られた、しかしヒトではない人形。

赤い髪の少女の身内が評した見立てを、確かに体現している

紅い少女は……それでも、人形になりたいという願いを持った、確かな心を持つ人形だった。

「……『聖魔』っていうのは、そういうものなのかしら」

だから赤い髪の少女は——なれたらいいねと、それだけ頷いた。

——了——